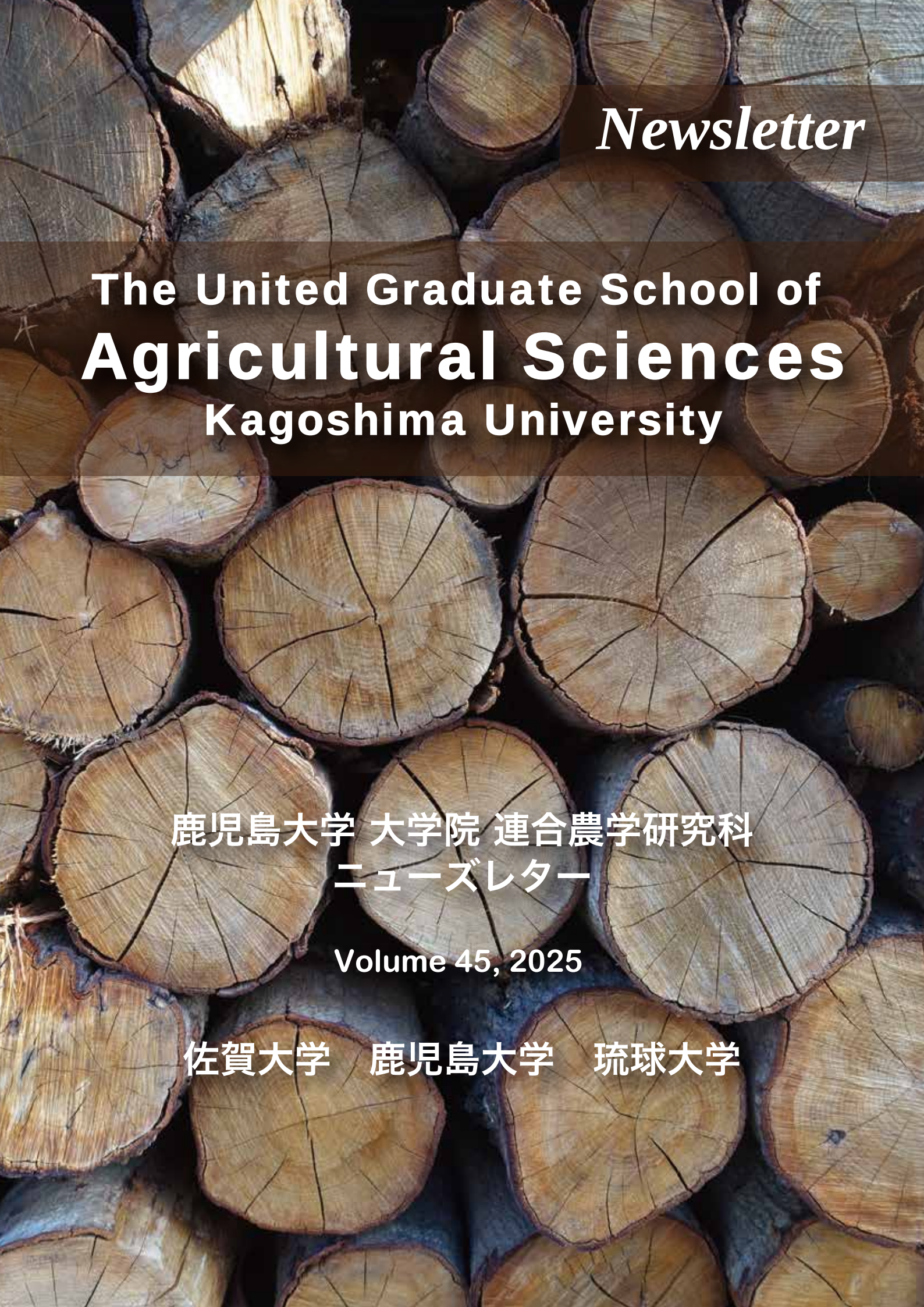




Newsletter

**The United Graduate School of
Agricultural Sciences
Kagoshima University**

鹿児島大学 大学院 連合農学研究科
ニュースレター

Volume 45, 2025

佐賀大学 鹿児島大学 琉球大学

目 次

◇鹿児島大学大学院連合農学研究科長挨拶 ―はじめに―	北原 兼文	1
◇鹿児島大学大学院連合農学研究科副研究科長挨拶.....	寺田 竜太	2
◇退職の挨拶		
多くの出会いに感謝.....	石丸 幹二	3
退職にあたり、皆様への感謝を込めて.....	和田 浩二	4
連大一期生から連大教員退職までの所感.....	侯 徳興	5
「つながり」	上西 由翁	6
◇旧代議委員の挨拶		
二年間、お世話になりました！	宗 伸明	7
代議委員の退任のご挨拶	弓削 こずえ	8
お世話になりました。謳歌した代議委員の2年間.....	建本 秀樹	9
杞憂と幸運	坂井 教郎	10
代議委員を終えて	玉置 尚徳	11
代議員任期を終えて思うこと	中村 啓彦	12
◇新代議委員の挨拶		
代議委員就任のご挨拶	辻 一成	13
ご挨拶	永尾 晃治	14
代議委員就任の挨拶	嬉野 健次	15
代議委員着任のご挨拶	志水 勝好	16
代議委員就任の挨拶	大塚 彰	17
代議委員就任のごあいさつ	吉川 毅	18
◇新入生の素顔		
令和6年10月入学		19
令和7年4月入学		25
◇学生の研究活動 ―2024年度在学生の学会等発表―		62
◇研究室紹介		72
◇留学生の近況		73
◇修了生より		75
◇学会賞等受賞		77
◇連大行事と活動		
連合農学研究科学位記授与式		91
連合農学研究科入学式		92
令和6年度 全国連合農学研究科協議会		94
連合一般ゼミナール「農学共通講義」		96
中間発表会		97
ティーチング・アシスタント（TA）研修会		98
分野別セミナーの開催		99

令和6年度 連合農学研究科（博士課程）「農学特別講義(一般セミナー)」実施報告	100
令和6年度 連合農学研究科「人材養成学生支援セミナーⅠ」実施報告	102
2024年度「人材養成学生支援セミナーⅡ」洋上セミナー実施報告	104
先進的研究推進事業成果報告会を開催	110
◇資料 一学生数・教員組織等一	
年度別入学者数	112
学位記授与状況	116
代議委員会委員名簿	118
令和7年度 鹿児島大学大学院連合農学研究科 行事予定表	119
代議委員会委員・連大事務室一覧表	120
編集後記	121

◇鹿児島大学大学院連合農学研究科長挨拶 －はじめに－



鹿児島大学大学院連合農学研究科長
北 原 兼 文

2025 年（令和 7 年）、鹿児島大学大学院連合農学研究科（連大）は 16 年ぶりに改組しました。この改組は、本学の第 4 期中期目標・中期計画（令和 4 年度～令和 9 年度）に基づき、前研究科長の寺田竜太先生のもと基本構想が検討され、筆者も 2023 年から副研究科長として参画しました。大学執行部ヒアリング及び文部科学省事務相談を経て、最終的に『次世代の農林水産業の技術革新の中核を担う農林水産学系博士人材の育成』～社会や産業、学界のニーズに応え、キャリアパスの多様化に対応した、我が国の大学院教育活性化の一翼を担う博士課程への発展を目指して～と題した改組構想案が作成され、本年度から実施の運びとなりました。具体的には、従来の 3 専攻・9 連合講座の細分化された組織から、改組後は 1 専攻の「農水生命科学専攻」とし、その中に研究分野を示すため 3 つの領域「農水圏生産科学領域」、「生物資源生命科学領域」、「地域環境共生科学領域」を設けました。これは、広い枠組みの中で柔軟な指導体制を構築し、学際的な分野や新たな研究領域の可能性を広げることを狙いとしています。また、カリキュラムでは、博士課程を修了した学生が職業上の成長や職歴の発展を促すためのキャリア開発教育や、社会のニーズに応えるためのデータサイエンス教育を強化します。さらに、定員超過傾向の入学志願者ニーズに対応するために入学定員を 7 名増やして 30 名としました。今後も、佐賀大学、琉球大学、そして鹿児島大学の構成大学が互いに切磋琢磨する中で、優れた教育・研究体制を築いていきたいと考えています。急速なテクノロジーの進化とともに持続可能な社会の探究に向けたニーズに応えるため、連大は常に進歩を続ける所存です。

本年度は新組織「農水生命科学専攻」の 1 期生として 33 名の新生を迎え、在学生在が総数 117 名になりました。新生の中には 7 か国から 15 名の外国人留学生も含まれています。新生の皆さんを心より歓迎いたします。博士課程は決して楽な道ではありませんが、皆さんが選んだこの挑戦の道には、世界を広げ、深い洞察を得る価値があります。困難に直面することもあるでしょうが、その場面で成長の機会であり、研究の過程で得る知識や経験は、皆さん自身だけでなく、社会や未来へ貢献するものと信じています。もし悩んだ時は、初めて学問に魅了された瞬間や、この道を選んだ理由を思い出しては如何でしょうか。また、連大の成果に貢献された方や連大の存在意義を高めた方には各種教育支援を提供していますので、これも研究の励みにしていただければと思います。3 年後には、皆さんが、国内外の大学や試験研究機関、行政、企業等を活躍の場として巣立っていき、トップリーダーとして成長されることを期待します。実り多き博士課程となりますことを心から願っております。

◇ 鹿児島大学大学院連合農学研究科副研究科長挨拶



論文投稿と査読について

鹿児島大学大学院連合農学研究科 副研究科長
寺 田 竜 太

この度、鹿児島大学大学院連合農学研究科（鹿児島連大）に入学された皆様をお祝い申し上げますとともに、充実した環境の下で研究に取り組み、博士の学位を取得されることを心より期待します。

学生の皆さんはご存知のことですが、学位を取得するためには、学位論文を提出しなければなりません。鹿児島連大では、学位論文を提出する基準として、原著論文を2報以上刊行することを定めています。これはとても高いハードルであり、論文刊行のために、査読（peer review）という関門を突破しなければなりません。門前払いの「掲載却下（reject）」は絶対避けたいところですが、一発で「受理（accept）」は滅多にありません。多くの場合、審査結果は「大幅な修正で再審査（major revision）」であり、査読者のコメントに対する対応文をつくり、コメントが受け入れられる場合は内容に沿って原稿を改訂します。受け入れられない場合は、その理由を論理的に記述して反論しなければなりません。このような対応文は、数ページに及ぶ場合もあります。改訂稿を提出し、再審査で再び major revision になる場合もありますが、「軽微な修正（minor revision）」という審査結果になることもあります。ここまでくれば、ゴールは目前です。原稿を修正し、改訂稿を提出すると、「I am pleased to inform you...」のような文章から始まる受理通知が届きます。投稿からここまで数ヶ月かかりますが、再実験を求められたりすると、半年以上要することもあります。なるべく早めに原稿を纏め、できる限り早く投稿するようにしましょう。

私は、Elsevier の Algal Research (IF 4.5) と Springer Nature の Journal of Applied Phycology (IF 3.0) の編集者をしていますので、編集・審査側の立場にもいます。投稿された原稿を見て思うのは、学術雑誌の書式に沿ってない原稿が以外に多いことです。書式に全く沿っていない原稿や、内容があまりにひどい原稿などは、査読を経ずに reject にする場合があります。特に前者の場合は、他の雑誌で reject になったものを、そのまま投稿する場合に多いようです。原稿執筆の際は、投稿規定をよく確認しましょう。また、査読者を探すこともかなり大変です。通常、査読者は2名であることが多いのですが、10名以上に打診して断り続けられたことがあり、審査期間もかなり時間を要してしまいました。審査結果がなかなか届かないのは、そういうことです。査読者の方も、原稿をよく読んでコメントしてくれる方もいますが、粗雑なコメントも稀にあります。それぞれの原稿は、投稿した研究者の熱い思いが込められていますので、どのような審査結果にせよ、誠意を持って対応するように心がけています。

鹿児島大学は、Elsevier、Springer Nature、Wiley の出版大手3社とオープンアクセス化（OA）の権利を含めた転換契約を結んでいます。通常、論文のOAには数十万円の費用が必要ですが、鹿児島連大生が責任著者として投稿した場合、数に上限はありますが、自己負担なくOAとして刊行可能です。是非、すぐれた研究成果を質の高い雑誌よりOAとして刊行されることを期待しています。そして、このような研究成果を基に、晴れて博士の学位を取得されることを心より願っているところです。

◇退職の挨拶

多くの出会いに感謝



佐賀大学教授 農学部

石 丸 幹 二

私は平成2年6月に佐賀大学農学部助教授として着任しました。着任早々、オランダで開催された国際植物組織培養学会に出席し、そこで流暢なドイツ語でポスター発表されていた先生にお声をかけ、ご挨拶したのが宮崎大学農学部の足立先生でした。また数ヶ月後には、当時連大2年生の留学生の研究指導を任されることとなり、約1年半という短期間での実験と論文投稿の末、なんとか学生が学位をとることができたのは幸いでした。平成6年4月からは、正式に連大の指導教員となり、退職までに留学生6名を含む合計10名の連大生を指導しました。日本人の卒業生2名は大学教員として活躍しています。タイ、中国、インドネシアの留学生は、帰国後それぞれの大学、研究所に務めており、私が訪問した際はいつも親切に案内してくれました。連大のおかげで、国際交流と共同研究を楽しむことができたことと感謝しています。また、鹿児島大学農学部の橋本先生は、学生時代（修士、博士課程）に薬学部の同じ研究室で共に実験に励んだ同僚ですが、農学部の連合大学院で再会できたことは、偶然とはいえ縁の不思議さを感じますし、私にとって非常に幸運でした。

平成25年から2年間、代議員を務めさせていただきましたが、私自身はあまり苦勞した記憶がなく、当時の代議員の先生や事務の皆様にお世話になりっぱなしでした。代議員会のおかげで、鹿児島町の町にも詳しくなりましたし、初めて沖縄にも行きました。連大特有の連帯感が心地よく、佐賀大学の雑事から解放されてリフレッシュできる学会気分を味わっていました。

佐賀から鹿児島への移動については随分様変わりしました。新幹線の開通による日帰り出張、コロナ禍でのオンライン会議など、時間的には随分楽になりましたが、仕事量は変わらず、気分転換ができ難いのは残念です。新幹線以前の鹿児島本線は、特急で佐賀から鹿児島まで4時間以上の長旅で、特に八代を過ぎるあたりからは時間を持て余し、車窓を走る薩摩沿岸とそらまめ畑を眺めていたことを思い出します。鹿児島がそらまめの一大産地であることをその頃初めて知りました。車中で投稿論文の下書きを書いたこともありましたが、レフェリーから英文が同じ表現ばかりでつまらないと添削までされてしまい、それ以後は車中で論文を書くことはやめました。

乱暴な言い方かもしれませんが、連大に所属することは、佐賀、鹿児島、琉球、かつては宮崎の4つの大学に就職したようなもので、大学の枠を超えて多くの人（教職員、学生）との出会いがあります。図書館や研究施設も利用できます。ぜひ、連大組織の素晴らしさを満喫してください。最後になりましたが、長い間お世話になり、また多くの機会をいただきありがとうございました。連大が益々発展されることをお祈りいたします。

退職にあたり、皆様への感謝を込めて



琉球大学教授 農学部

和田 浩二

2025 年 3 月 31 日をもちまして琉球大学農学部を定年退職いたしました。長い間、多くの教職員の皆様に支えられ、多くの学生と様々な研究を行うことができました。いろいろと大変なこともございましたが、それらを乗り越えて素晴らしい日々を送ることができましたこと、心から感謝申し上げます。

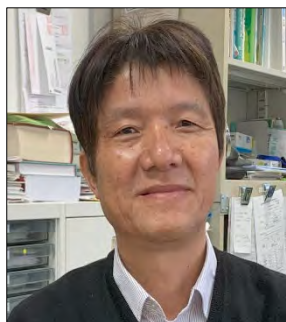
私は 1989 年 12 月に九州大学農学部から琉球大学農学部助手として着任し、鹿児島大学大学院連合農学研究科（鹿児島連大）には、1995 年から副指導教員、2007 年から主指導教員、2008～2009 年度は青木研究科長、菅沼研究科長、杉元研究科長補佐のもとで代議委員、そして、2019～2022 年度は琉球大学大学院農学研究科研究科長として鹿児島連大の運営に参加させていただきました。

まず、2008 年の代議委員は主指導教員になった翌年で、まだ鹿児島連大の教育研究や運営を十分に理解していない状況下で、私が経験した博士課程では予想しなかった定員管理や単位制、シラバスの作成など、改組に向けたいろいろな準備に参加させていただきました。十分なお協力はできなかったかもしれませんが、組織運営ということ初めて学ばせていただきました。また、所属大学や専門分野の異なる出会いの場であり交流の場でもあり、多くのことを学ぶことができました。特に各大学持ち回りの代議委員会では地元の美味しい味覚に接しながら、お互いに屈託のない意見交換ができ、その後の研究の大きな励みになりました。一方、2020 年度からは新型コロナウイルスのパンデミックにより、教育研究に大きな制約を受けました。その間、寺田研究科長や三好副研究科長には教員や学生への対応について多大なる支援をいただきました。鹿児島連大のすばらしさは、現実の諸問題への対応とともに、将来的、それも前向きでかつ建設的な議論を活発に行えるところにあり、2025 年度からの二度目の改組もその成果の一つと感じております。

さて学生との研究は、日本で唯一亜熱帯島嶼県である沖縄の地理的な特性を活かして、沖縄特産農産物である亜熱帯甘味資源、亜熱帯果樹、亜熱帯野菜、亜熱帯香辛料およびその加工品などを中心に、フレーバー特性および機能性成分の解析とともにそれらの高機能化に関わる研究を行ってきました。主指導教員として、少ないながらも 8 名の博士を輩出することができ、学位取得者は琉球大学（4 名）、沖縄大学、中村学園大学、九州栄養福祉大学、Gadjah Mada University（インドネシア）の教職員として、それぞれの専門分野で活躍していることを光栄に感じております。

最後になりますが、鹿児島連大のますますのご発展と教職員の皆様のご活躍とご健勝を心より祈念して、ご挨拶とさせていただきます。

連大一期生から連大教員退職までの所感



鹿児島大学 農学部

教授 侯 徳興

私は卒業生としても指導教員としても鹿児島大学大学院連合農学研究科（連大）に深く関わっています。1988年4月に連大の1期生として入学し、1991年3月に連大の1期生として修了し、農学博士を取得しました。「花の連大博士課程1期生」で、入学式と卒業式ともテレビや新聞社からインタビューを受けて大きく報道されていたことを今でも覚えています。また、連大での学生生活の中には「農学特別講義（一般セミナー）」で「青少年の家」などに合宿し、昼夜にわたり異なる分野の連大生達と深く楽しい交流ができたこと、特に、学位申請時の“学術論文が2報以上発表済み”という条件が私の研究の志を一層高め、その経験は今までの研究教育生活にも生かされています。1991年4月から理化学研究所つくばライフサイエンスセンターで7年間の博士研究員等を経て、1997年11月に鹿児島大学農学部の助教授として着任し、食品の機能を研究することになりました。1998年に連大の副指導教官、2004年に連大の主指導教員となり、2019年から2020年まで連大の代議員を務めました。連大で過ごした時間は学生で3年、教員で27年、計30年余りになります。

私は連大の応用生命科学専攻先端応用生命科学連合講座に所属し、研究分野は「食品・天然化合物の機能性及び作用機構に関する研究」として連大に登録していました。それは、これまで自分が博士課程及び博士研究員の期間に習得した遺伝子・ゲノム科学の知見と技術を利用し、食品成分の機能性及び作用機構を研究することを教育・研究テーマとしました、いわゆる「ニュートリゲノミクス」と呼ばれる新しい分野の立ち上げでした。多くの学生さんが興味を持ってくれ、連大生が絶えずに入学してくれました。指導教員としては、自分の連大生時代の経験を活かしながら、研究を志す学生を幅広く受け入れてきてました。最終的には、計5ヶ国から20人近くの博士学位学生を送り出すことが出来ました。彼らは現在各地の大学・研究機関・企業等にて中堅として大変活躍しています。このような博士学位学生を輩出できたことは、連大構成大学の多くの副指導教員や学位審査委員会のご指導及び事務方のきめ細かなご支援の御陰だと感謝しております。改めてこの誌面を借りてお礼申し上げます。

連大の活動では、2年間の代議委員でいろいろと経験させて頂きました。特に、連大入試委員長を仰せつかった時に研究科長をはじめ、代議委員の先生方、農連大事務系の皆様に大変お世話になりました、また、農学特別講義（一般セミナー）の担当の時には工場見学・発表等で、皆様のご協力のもと、充実したセミナーを開催し運営することができました。改めてお礼申し上げます。

連大の一期生として入学し、連大の指導教員として定年退職を迎えることは人生において充実した、幸せな時間でした。長い間、大変お世話になりました。ありがとうございました。最後に、連大の益々のご発展と連大構成教員の皆様のご健勝をお祈り申し上げます。

「つながり」



鹿児島大学教授 水産学部

上西 由翁

連合農学研究科の第1期生である私にとって、退職にあたり紙面を借りて皆さまにご挨拶できる機会をいただきまして、大変光栄に存じます。連大との出会いは、当時、社会人の私が偶然にも指導教官の西元諄一先生を訪ねてきたところから始まりました。それは、1987年に鹿児島市が募集した「海外青年派遣生」に採用され2週間、米国への視察が決まった折りに、鹿児島県の養殖ブリに関連して現地で活躍されている卒業生を紹介していただくためでした。その際に、西元先生との会話のなかで連大の話題になり、連大へ進学することとなりました。このことが、その後の私の人生で大きな転換点になるとは思いませんでした。

連大在学中は、科学技術の風景が日々変わっていくのを肌で感じました。1990年の頃パソコンはまだ高価なものでしたが、徐々に測定機器はコンピュータにつながるようになり、コンピュータの性能の向上が測定機器の高性能化となってデータも変わりつつありました。隣の研究室では、米国のNIHから戻られた板倉隆夫先生が、最先端の遺伝子工学の手法を鹿児島大学の中でもいち早く取り入れた研究をしており、下関の水産大学校から水産学部に移動してきた時の上司の先生になるとは思いませんでした。いくつかの偶然が重なり、何かのご縁をいただいたものと感謝しています。

連大を修了した後、鹿児島大学の医学部で1年間、遺伝子工学に関して研究をする機会がありました。その後、下関の水産大学校で約9年間、勤務させていただきました。あまり知られていませんが、水産大学校は農水省管轄の素晴らしい大学です。そのため、農水省の行政に係わる課題にも取り組みました。水産大学校では、上司の国本正彦先生からタンパク質の精製、脂質の分析、微生物学の同定など幅広い分野の実験を教えてもらい、私の研究者としての土台となりました。国本先生には公私ともにお世話になり、大変感謝しています。そして平成14年に、生まれ故郷でもある鹿児島大学に帰ってきました。

鹿児島での研究テーマは、板倉先生からのアドバイスをいただきながら、水生生物におけるダイオキシン類のような異物応答に関わる遺伝子の解析等や遺伝子工学の研究分野に取り組みました。後年は、水産業界の方々との交流の中で相談を受けるようになり、最近では食品ロス対策として刺身のMA貯蔵や、さつま揚げの包装過程におけるクリーン化技術なども手がけました。2024年度の最終年度は、若き日に海外青年派遣生として米国へ行くことの契機となった「養殖ブリの凍結・解凍および冷凍貯蔵における品質保持に関する研究」で幕を閉じます。

最後になりますが、今まで多くの先生方や事務の方々、学生の皆さんに大変お世話になりました。ありがとうございました。

◇旧代議委員の挨拶



二年間、お世話になりました！

連大専攻・領域名：農水生命科学専攻 生物資源生命科学領域
大学・学部名：佐賀大学教授 農学部
お 名 前：宗 伸明

2023 年 4 月から 2 年間、代議委員を務めさせて頂きました。代議委員を務める前までは、連大にはあまり関わる機会がなかったのですが、突然、代議委員の順番（？）が回ってくることになり、ほぼ何の予備知識もなく代議委員に就任することになりました。代議委員をお引き受けしたすぐ後に、代議委員は関連する連大の各種委員（私の場合は、入試検討委員や教務委員などの委員）も併任する必要があることを知り、これは相当重たい仕事なのでは・・・、と思った記憶があります。

私の代議委員としての任期がスタートした 1 年目には、既にコロナの大きな混乱は過ぎ、入学式や同日開催の最初の代議委員会も対面で開催されました。それから、ほぼ毎月 1 回、鹿児島（まれに沖縄）を訪れる 2 年間の日々が始まりました。最初は、頻繁に鹿児島に訪れるのは大変なのではないかと思っていましたが、新幹線のおかげで 2 時間ほどで鹿児島に到着できるため、道中、車窓からの景色を楽しみながら仕事をすることもでき、つかの間のノマドワーカー的気分を味わえたような気がしています。代議委員になって 1 年間が経つと、代議委員の仕事にも随分慣れてきた感じはあったのですが、2 年目からは専攻長を務めることになったため、それに付随する役割も増えました。また、2 年目では改組が直前に迫り、それに関連する事項も大幅に増えたため、実感としてはかなり大変になったように思います。しかし、代議委員としての全在任期間を通じて、寺田先生（旧研究科長、現副研究科長）、北原先生（現研究科長）をはじめ、他の多くの先生方、連大事務の皆様の温かいサポートのおかげで、何とか無事に代議委員の務めを果たすことができました。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

私にとって、代議委員を経験させて頂いて一番良かったことは、他の代議委員の先生方と親しく交流させて頂く機会を得た、ということです。代議委員会後に、時折開催される情報交換会では、分野の異なる先生方のお話をたくさん聞くことが出来ました。工学部出身の私にとっては、「こんな研究もあるのか！」と驚くこともしばしばで、大変良い刺激になりました。加えて、先生方の素人離れした趣味・特技に驚かされることもよくありました。常に皆さんがフランクな雰囲気であり、これが代議委員会の会議においても、率直に議論し合える場を形成するのに大きく貢献していたように感じています。

2025 年度からは改組を経て、新しい連大がスタートします。新しい課題なども見えてくるかもしれませんが、この改組を通じて、連大が益々大きく発展されることを祈念しております。私も連大構成員の一人として、微力ながらこれからの連大の発展に協力できればと思っております。最後に、代議委員在任時にお世話になりました全ての方々に改めて感謝の意を表し、退任のご挨拶とさせて頂きます。二年間、本当にありがとうございました！

代議委員退任のご挨拶

連大専攻・領域名：農水生命科学 地域環境共生科学領域
大 学 ・ 学 部 名：佐賀大学教授 農学部
お 名 前：弓削こずえ

2023 年 4 月から代議委員を務めさせていただきました佐賀大学農学部の弓削こずえと申します。
Newsletter に就任のご挨拶を寄稿したことがつい先日のように思われ、あっという間の 2 年であったと感じております。

就任当時は自分自身が所属する専攻名や連合講座名もおぼつかない状態で、代議委員の務め果たすことができるのか心配でしたが、当時の研究科長の寺田先生や副研究科長の北原先生をはじめとする代議委員会の皆様の温かいご支援のお陰で何とか様々な業務に対応することができたと感じております。毎月の代議委員会では、連大の様々な課題について日頃はあまり交流のチャンスがない異分野の先生方と意見交換をさせていただき、大変楽しく有意義な時間を過ごすことができました。また、連大事務の皆様には様々な場面で惜しみないサポートを頂きました。この場をお借りしてお世話になりました皆様に心から感謝申し上げます。

代議委員に就任したことで、連大の様々な舞台裏に関わることができたのも良い経験であったと感じています。学生に対する教育、教員の資格審査、研究助成および入試など、代議委員会の先生方や事務部の皆様の多岐に渡る下支えのお陰で連大が成り立ってきたことを実感いたしました。また、改組が進行している中で代議員を務めさせていただきましたが、改組の目的や改組後の体制などの理解を深めることができ、とても幸運であったと感じています。

これからも、連大の一構成員として皆様には大変お世話になりますが、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。2 年間、誠にありがとうございました。



お世話になりました。謳歌した代議委員の2年間

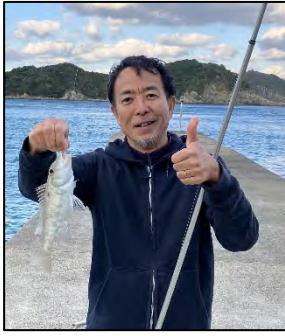
連大専攻・領域名：農水生命科学 農水圏生産科学領域
大 学 ・ 学 部 名：琉球大学教授 農学部
お 名 前：建本秀樹

令和5年4月からの2年間、代議委員を務めさせていただいた琉球大学農学部の建本です。私にとって、この2年間は非常に短く、内容の濃い期間であり、これまでに無い非常に良い経験を積ませていただき感謝しています。就任当初の3~4カ月間ほどは、ただただ代議委員としての業務の流れとリズムに慣れていくのがやっとでした。しかし、暫くして柔軟に立ち振る舞えるコツを掴んでくると、基本的に探究心旺盛な私は「代議委員を単なる会議構成メンバーとしての役職として終わらせるだけではなく、鹿児島大学や佐賀大学へ出向く機会を自分なりに楽しんで有意義な時間に変え知見を広めていこう。」と次第に多方面に行動範囲を広げていきました。

鹿児島大学での代議委員会や連大教授会の終了後は、レンタカーを借りて南九州地域を巡り、砂風呂や泥風呂で疲れを癒やし、その土地の美味しい料理を堪能しました。佐賀大学では経由地である博多の街を探索し、様々な高級ブランドショップを訪ねました。今になると、大隅半島側を探索することが出来なかったのが非常に残念です。また、代議委員として他大学の多分野の先生側と直接接する機会が持てたことは、私にとって非常に刺激的でした。お陰で、佐賀大学からの代議委員の先生と共同研究を開始する機会にも恵まれ、大きな壁に当たって根本的なブレイクスルーが難しかった自分の研究を好転させることが出来、現在、興味深い研究成果を得られる状況に至りました。今後、この共同研究を通して得られた結果が、どの様に発展していくか楽しみです。

連大の代議委員を経験することで、改めて鹿児島連大の組織の重要さと面白さ、そして、将来に向けた発展の可能性等について身をもって知ることが出来ました。令和7年度からは、多くの代議委員会を初めとする連大の会議が Teams による遠隔会議に変更されます。時代の流れからこのような形態に変化していくことは、ある意味、致し方ないのかも知れません。しかし、インターネットを介した映像と音声だけからでは、代議委員としての職を全うするだけになり、代議委員の業務の枠を越えた発展は難しくなるのではないかと危惧されます。連大を構成する各大学が連大の組織の中で有意義な成果を得るには、単に会議や入試等の業務を熟すだけではなく、その先にある識字憂患に個々の連大構成員は気付くことが重要ではないかと強く感じ学ばせていただきました。

最後に、北原研究科長や寺田副研究科長を初め、代議委員の先生方には大変お世話になりました。特に、連大事務室のスタッフの方々にはきめ細やかな面で常に助けていただき感謝しております。今後、何かの形で皆様と一緒に仕事出来ることを期待しつつ、鹿児島連大の益々の発展を祈念して、私の退任のご挨拶とさせていただきます。



杞憂と幸運

連大専攻・領域名：農水生命科学 地域環境共生科学領域
大 学 ・ 学 部 名：鹿児島大学教授 農学部
お 名 前：坂井教郎

2 年前に連大の代議委員と入試検討委員会委員長を仰せつかった直後は、大変そうでかなり身構えましたが、実際には北原研究科長や寺田副研究科長，連大事務の方がほとんど準備してくださり，また他の代議委員の先生方のサポートもあり，大変なことは全くありませんでした。大きなチョンボもなく，2 年間の任を終えることができ，まずは関係の先生方と事務の皆様に感謝申し上げます。

代議委員の 2 年間で幸運だったのは，それまで猛威を振るっていた新型コロナの影響を全く受けなかったことです。代議委員は，毎月，代議委員会の日には，昼間は連大の運営について長時間議論し，終了後は食事をしながら長い時間を一緒に過ごします。また年に 1 回開かれる一般セミナーでも，3 日間，朝から夜までずっと一緒です。その中で，連大が良くなるための議論を真剣にやりつつ，ついでに研究や趣味のこと，各大学の状況など，色々な話をします。お互い別の世界に住んでいるようですが，自然と仲間意識や連帯感のようなものが生まれたように思います。

多くの人たちが助け合いながら，博士課程の大学院を運営するという連大のシステムは非常に良いものだと思改めて感じています。（ただし，私は過ぎてしまえば，楽しかったことだけが心に残るたちなので，実際はちょっと違うかもしれませんが，それでも）良い 2 年間でした。ありがとうございました。今後は連大生の指導に注力します。



代議委員を終えて

連大専攻・領域名：農水生命科学 生物資源生命科学領域
大 学 ・ 学 部 名：鹿児島大学教授 農学部
お 名 前：玉置 尚徳

昨年、代議委員就任のご挨拶をしてからはや1年が経ち、退任のご挨拶の文を書くことになりました。そもそも、私の場合は北原先生の研究科長就任に伴う代議委員の欠員補充のため、2度目で任期1年の代議委員でしたが、それにしても1年はあっという間に過ぎてしまいました。その間に連大では、改組など大きな変化もありましたし、代議委員会の開催も約半分がWEBでの開催となるなど、前回（10年前）と比べると大きな変化を感じました。また、年2回の教授会の開催方法についても対面とWEBでの開催をどのようにするのか気になるところです。

昨年もご紹介しましたが、私の所属する鹿児島大学農学部 附属焼酎・発酵学教育研究センターは、学部学生の教育以外にも全学向けの「焼酎」講義を担当し、年400名の受講生に焼酎の基礎を教えています。また、社会人教育として焼酎マイスター養成コースも開講しています。99時間（99000円）の受講料にもかかわらず、本コースの受講者がここ数年激増しており、昨年まで(13期)に548名の焼酎マイスターを輩出してきました。

また、酒関連では、新潟大学日本酒学センター、山梨大学ワイン科学研究センターとの連携協定を結び、毎年のシンポジウム開催「日本の酒シンポジウム」、連携講義開講「日本の酒学序論」などを進めています。さらに、昨年12月には、「日本の伝統的酒造り」が、ユネスコの無形文化遺産への登録が決まり、清酒、味醂、泡盛、焼酎業界では、大いに盛り上がっているところです。我々もこの機会を逃さずに焼酎を世界に広める算段を進めています。具体的には、フランスのボルドー大学と連携協定を結んで、学生や教員の交流を深める中で焼酎の紹介を始めています。先日、ボルドー大学のワインセンターを訪問し、持ち込んだ焼酎について説明して試飲してもらいました。感触は、良好でグラッパ（ワインの搾りかすを発酵・蒸留した蒸留酒）のようだと感想も聞けました。懇親会の中で、鹿児島の名物料理は何かと問われ鳥刺しと答えたのですが、検索した画像を見て Curious との反応で他の普通のものの方が良かったかなと少し反省しました。

このように当センターは、「焼酎を世界の酒に！」をスローガンにさらに前進を続けています。



代議員任期を終えて思うこと

連大専攻・領域名：農水生命科学 農水圏生産科学領域
大 学 ・ 学 部 名：鹿児島大学教授 水産部
お 名 前：中村啓彦

2023 年度から 2 年間、鹿児島大学水産学部から選出され代議員を務めました。定年まであと 7 年の遅い時期での就任となりました。代議員の役割は、月例の代議員会への参加、各種セミナーの人選・運営、入試・学位授与・教員資格審査など多岐にわたります。しかし、すべての業務の段取りは、研究科長、副研究科長と連大事務係の連携の下で整えられ、代議員の仕事は非常にやり易いものでした。まがいなりにも所属学部での仕事と連大での仕事を両立できたのは、このような確立された組織運営の賜物だと思います。関係者の皆様にお礼申し上げます。

さて、代議員の 2 年間を振り返って、私なりに考えたことを書きたいと思います。私は、海洋物理学を専門としており、連合農学研究科のカバーする学問の中心から最も離れた場所にいると思っています。水産学部内では、海洋生物を育む海洋環境の研究者として認識されていますが、連合農学研究科に枠組みが広がると肩身が狭くなる思いです。このような立場で、2021 年 9 月と 2023 年 3 月に、海洋物理学の研究で 2 人の留学生に博士（学術）の学位を取得させることができました。学位審査の副査を選ぶに当たっては、専門外の先生方をお願いせねばならず、かなりの無理を感じながらの審査でした。副査の方々には、2 本の論文が査読付き科学ジャーナルで受理されたことで学位の質を納得して頂き、なんとか厳正な審査ができたと考えています。

2024 年度の代議員会では、学位審査体制について、大きな転機を迎える議論がありました。私は現在の改革に賛成していますが、前述した内容に関連して気になる点を書きおきたいと思います。1 つは、査読付き論文を出すことと、それによって学位の質を保証することの関連性についてです。電子ジャーナル時代になり、伝統的科学ジャーナルを凌駕する新興科学ジャーナルが出てきました。それらの中には、マジックのような手段でインパクトファクターをあげ、大した査読もなく短時間で論文を受理しているものがあります。連大では、2 本の査読付き論文を出すことによって学位の質を保証してきましたが、このようなジャーナルに投稿するのでは、質は保証されないと思います。その意味で、指導教員には学生に安易な科学ジャーナルへ投稿させない倫理観が求められますが、一方で修業年限内の学位取得を目指すという時間のジレンマがあり、指導教員は難しい駆け引きをしなければなりません。また、学位授与の審査体制では、主指導教員が主査になれないという制度に変更されました。私のような農学・水産学の中心から離れた周辺領域の研究者にとっては、主査を任せられる教員を探すのが難しいという事情があり、今後は連大で学位を取得させるのは難しくなったと感じています。2 本の査読付き論文による学位の質保証と修業年限内での学位取得の両立、新しい学位審査体制の下での審査、これらを経営面ではなく教育面からポジティブに評価するのはなかなか難しいと感じています。

◇新代議委員の挨拶

代議委員就任のご挨拶



農水生命科学専攻
地域環境共生科学領域
佐賀大学教授 農学部
辻 一成

2025 年 4 月から代議委員になりました辻一成と申します。鹿児島連大では、2015 年に副指導教員資格、2022 年に主指導教員資格を取得してこれまで教育研究活動に励んで参りました。この間、9 人の博士学位取得に大なり小なり関わることができ、予想外の幸運に喜びを感じています。これも日頃お世話になっている連大構成員の同僚教員並びに事務係職員の方々のおかげです。この場を借りて改めて御礼申し上げます。とりわけ、この 3 月まで相当の間、佐賀大学農学部で農業経済・経営学分野を専門にする教員は唯一私だけでしたので、連大での鹿児島大学と琉球大学の同分野の先生方との教育研究上の交流は心強い限りでした。

さて、私の研究関心について少し紹介させていただきます。私は縁あって 1990 年代の終わり頃から主にベトナムの農業発展や農村開発に関する社会経済的な諸問題について研究する機会を得てきました。1980 年代半ばに計画経済から市場経済化へと舵を切って以降、ベトナムの稲作生産力は飛躍的に向上して、わずか数年のうちに米の国内自給を達成するだけでなく、世界屈指の米輸出国にまで成長しました。また 2000 年代に入ってから世界的なグローバル化の中、国家経済の「近代化」「工業化」に向けた号令の下で農村部でも急速な都市化がすすみ、農家や農村経済の構造は大きく変化しています。そして近年、気候変動による干ばつや低平地地域における塩水遡上域の広がりなど自然災害が多発化する傾向が顕かになり、将来の持続的な農業生産と地域社会の安定に資する様々な条件整備が大きな課題として認識されるようになってきました。昨年度末、連大からのご支援を頂戴して開催した国際セミナーで、そうした現状について異なる分野の連大研究者と情報共有でき、不肖農学に関わる者としてこれから向き合うべき諸課題に関して意見交換できたことは大変有り難いことでした。また、それに加えて、この 4 月、私の研究室では連大で博士学位を取得したばかりのベトナム人助教を迎えることができました。これを大きな励みとして、連大での教育と研究に更に勤しみたいと思っています。

ご挨拶の最後になりますが、これから 2 年間、代議委員として連大のお役に立てるよう微力ながら努力して参ります。皆様のご支援をどうぞよろしくお願いします。

ご挨拶



農水生命科学専攻 生物資源生命科学領域
佐賀大学教授 農学部

永尾晃治

2025 年度より代議委員を仰せつかりました、佐賀大学の永尾晃治と申します。私は 2000 年 12 月に佐賀大学に着任し、連大には 2002 年に研究室の博士過程学生の指導補助教員になってから 20 年以上お世話になっております。かねてより、学生さんの指導や連合研究科の支援による先進的研究推進事業などを通して他大学の先生方と密に交流できる素晴らしいシステムであると感じております。とはいえ、連大組織運営には初めて深く関わらせて頂きますので、何かと至らない点も多いかと思いますが、どうぞ宜しくお願い致します。

私の専門について紹介させていただきますと、学位取得後から一貫して「食品栄養化学」に関する教育・研究を行っています。世界には現在二つの栄養問題が存在しており、一つは先進国に見られる「栄養過多」による肥満・生活習慣病の罹患率増加の問題で、もう一つは途上国に見られる「栄養不足」の問題です。私達の研究室では、それらの解決策の一助とすべく「食環境による健康維持・疾病予防に関する研究」として、病態発症に対する予防・改善効果を持った食品成分の検索を行い、「未利用資源の有効活用に関する研究」として、廃棄・未利用食材からの機能性成分検索などを行っています。これらの研究を行いながら、食品の生体での反応を指標にして、未知の代謝調節機構を明らかにしていくことや、食事成分の機能性を評価していく中で、地域のものを含めた食品の新たな価値や未利用資源の有効活用方法を見出していくことを目標にしています。

最後に、連合農学研究科は今年度（令和 7 年 4 月）より 3 専攻を 1 専攻とする改組が行われ、入試改革・入学定員増やカリキュラム改正など大きな変更があったため、運用を始めてから生じる問題などがあるかもしれません。任期である 2 年間、学生さんたちの学修に支障が生じないよう、職務遂行に精一杯努めて参りたいと思います。

代議委員就任の挨拶



連大専攻・領域名：農水生命科学・農水圏生産科学領域
大 学 ・ 学 部 名：琉球大学教授・農学部
お 名 前：嬉野 健次

本年度より代議委員を仰せつかりました、琉球大学農学部の嬉野 健次と申します。よろしくお願いいたします。私は、平成 20 年 5 月に琉球大学農学部赶赴し現在に至っております。連大の代議委員は、令和 3 年より 2 年間担当させていただきましたので、今回は 2 回目になります。前回担当させていただいたときは、コロナ流行下であったため、会議の多くはオンラインで行われていました。今回は、対面での実施が多く、他大学の代議委員の先生方との交流を楽しみにしております。

私の専門分野は園芸学で、主に花卉類を対象にした研究を行っております。現在取り組んでいる研究は、花卉園芸植物の花色育種に関する研究と花木類の休眠機構の解明に関する研究です。花色育種では、ツツジを材料として用い、常緑性黄色花ツツジの作出を目指しています。常緑性ツツジ類には黄色花のツツジはありませんが、これは、花卉内でカロテノイド生合成遺伝子群の発現が弱いことと高発現する CCD4 遺伝子により黄色色素カロテノイド類が酸化開裂されるためです。カロテノイド生合成遺伝子群は、落葉性種キレンゲツツジとの交配により発現量を増加させることができますが、CCD4 遺伝子の発現によりカロテノイドは無色のアポカロテノイドになります。しかし、この CCD4 発現量は常緑性ツツジ種により異なり、面白いことにサキシマツツジやヤクシマヤマツツジなど鹿児島および沖縄に自生する固有種で発現量が低いことが、これまでの研究で解明されました。これらの種は、常緑性ツツジ品種作出のための育種親として利用されておらず、有望な育種親になると考えています。休眠性の研究については、台湾原生の四季咲き性キンモウツツジを用いて実験を行っています。このように、対象に用いている種は、亜熱帯に自生している種で、亜熱帯に自生する未利用資源植物の魅力を感じています。

今回、代議委員を担当させていただきますが、連大の教育研究に少しでも貢献できるように協力していきたいと思います。2 年間、よろしくお願いいたします。

代 議 委 員 着 任 の ご 挨拶



農水生命科学 農水圏生産科学領域
鹿児島大学教授 農学部
志水勝好

35 年前になりますが、私は母校の 5 年一貫の博士課程に入学しました。連合農学研究科のように定員を超えるような人気の大学院ではなかったため、及第点さえとっていれば入学できました。また講義は特論と言う各分野の教授の講義を受けるのですが、受講者は多くても 5 人程度、少ないときは 1～2 人ということで、先生のオフィスでコーヒーをいただきながら、先生の若かった頃の研究のご苦労や大学の裏話、世間話で終わることも多かったです。また大学院生個人の研究活動が第一ということで、欠席しても大目に見てもらえました。試験は特に無く、レポートが主流でした。のんびりした大学院時代を過ごした私には連大の手厚い教育指導にびっくりしました。私が所属したのは比較環境農学研究室で、作物学研究室の教授が熱帯・亜熱帯の作物や農業、それらの地域で栽培された工芸作物に焦点を当てた研究室として新たに立ち上げた研究室でした。私は卒業研究としてこの研究室で植物の耐塩性について研究しました。塩生植物という塩分に強い性質がどのようなメカニズムによるのか興味を持ったためです。結局この塩生植物の耐塩性の解明、作物学的利用について大学院にて研究を進めたのですが、栽培研究は原則 1 年 1 作でデータを出すのに時間がかかり、学位論文を提出できたのは 6 年目でした。運良く任期付助手として同研究室に採用され、昨日まで学生で今日から教官ということで、生活が自己中心・研究中心の生活から授業・会議中心・学生研究指導中心と 180 度変わったことと、責任の重さから初年度は毎日帰宅すると疲労から爆睡する毎日でした。

約 30 年在籍した母校から鹿児島大学に赴任したのが 10 年前で、その際比較環境農学研究室の看板も持ってきました。現在も世界の農業を対象とし、特に地球温暖化緩和・抑制・回復を、また沙漠化の防止、回復を植物を栽培して目指すことを柱とし、さらに地域貢献として鹿児島県の島嶼部で自生しているボタンボウフウの栽培技術開発、サトウキビの塩害防止法の技術開発のための塩害の作用機作の解明などを行っています。

昨年度の夏は「地球沸騰」と言われ、過去類を見ない酷暑の夏でした。今年の夏が昨年より過ごしやすくなる理由が見当たりません。さらに暑くなる理由ならいくらかもあります。私は世界の研究者がそれぞれの個性を生かした地球温暖化防止研究をして欲しいと思います。私自身が農学者なので、植物や作物で何とかできないかと研究を始め、賛同してくれた大学院生や学部生が彼らのアイデアを加え鋭意研究を進めてくれています。みなさんもお自分の研究のなかのテーマに「地球温暖化防止」を加えていただけないでしょうか。温暖化に対し「会心の一撃」となる技術開発は困難だと思います。研究者が束になってかかれば通用するのではないのでしょうか。よろしくお願いいたします。

代議委員就任のご挨拶



連大専攻・領域名：農水生命科学・生物資源生命科学領
大 学 ・ 学 部 名：鹿児島大学・共同獣医学部
お 名 前：大塚 彰

この度、代議委員を仰せつかりました鹿児島大学の大塚彰と申します。今回、初めて代議委員を務めさせていただきます。不慣れでご迷惑をおかけすることもあると思いますが、ご指導ご鞭撻のほどどうぞよろしくお願い申し上げます。

私は令和5年度まで、農学部農業生産科学科畜産科学コースが主担当でありましたが、現在は令和6年度の農学部および共同獣医学部改組で新設された畜産学科を主担当としております。私の専門は家畜栄養学と飼料科学であり、新規の飼料原料の栄養機能性評価や飼料栄養成分が畜産物の品質に及ぼす影響に関する研究を行っております。これまで家畜栄養学や飼料科学分野では、いかに効率よく飼料を動物性タンパク質に変換するかを中心に研究が発展してきましたが、近年は畜産物の差別化や高付加価値化（つまり希少性や美味しさなど）を図る上で有効な飼料原料の開発・運用に関する研究も盛んに行われています。加えて近年の気候変動、不安定な国際情勢および世界的な畜産の拡大による飼料穀物の国際相場の高騰は、飼料価格のかつてない高騰を引き起こしております。そのため、特に飼料の原料生産の国内回帰や未利用農産物やその残さの飼料への循環利用などに関する研究ニーズの増加を感じております。前述のように、研究の主体は飼料栄養成分と畜産物の品質との関係を調べるのですが、最近では農作物食害の有害獣として捕獲されたキュウシュウジカ、ニホンイノシシやリュウキュウイノシシの肉（これらは大変良質な動物性タンパク質資源なのですが、現状では膨大な量が未利用となっています）の機能性成分に関する研究にも取り組んでいます。

任期中は、鹿児島大学に加え、佐賀大学そして琉球大学の先生方や学生さん、ならびに普段大変お世話になる事務方のみな様との交流を深め、微力ではありますが連合農学研究科の教育・研究の発展に貢献できればと思います。同時に新たな人々とのつながりや連携を通じて、新たな教育研究プロジェクトの発足などの機会として生かしていきたいと思います。

代議委員就任のごあいさつ

連大専攻・領域名：農水生命科学 農水圏生産科学領域
大 学 ・ 学 部 名：鹿児島大学教授 水産学部
お 名 前：吉川 毅

このたび代議委員を仰せつかりました、鹿児島大学水産学部・吉川 毅と申します。このたび 2 度目の担当となります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

所属する水産学部では、水圏環境保全学分野を担当しています。その中で、水圏環境微生物学、特に、時として甚大な漁業被害をもたらす赤潮を研究対象としています。赤潮の発生には、海洋環境のみならず、陸水環境や気象など多様な要因が関与しています。従って、赤潮の生理生態に関する研究は容易ではありません。その一方で、赤潮防除、漁業被害軽減などの赤潮対策について、南九州域の漁業者の皆様からは期待をいただいているところです。近年では、画像解析や AI などの農水産分野への応用が進められています。赤潮対策にもこれらの技術、手法が応用できたらと考えているところです。

前回、代議委員を担当しました折にはコロナ禍に入り、オンライン入試や農学特別講義のオンライン開催など新たな取り組みが始まりました。幸い農学特別講義は対面での実施が可能となりましたが、オンライン入試は現在も続けられています。また、本年度は研究科改組後の初年度で、新しいカリキュラムによる教育がスタートします。加えて、水産学部が担当する農学特別講義も来年度に控えております。これらが円滑に進むよう、これからの 2 年間、微力を尽くしたいと存じます。皆様にはご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

◇新入生の素顔

★令和6年10月入学（3名）★

【生物生産科学：Science of Bioresource Production】

（熱帯資源・植物生産科学：Tropical Bioresource and Planet Resource Production）

サマディ ディサナヤカ
Name: E.J.M. Samadhi K. Dissanayake Nationality: Sri Lanka

Title of Research: Mycorrhizal Diversity of Ryukyu Islands Orchids and Assessment of the Role and Function of Generalist Mycorrhizal Fungi

Advisory Professor : Yuki Ogura-Tsujita (Saga University)

First Vice-Advisory Professor : Shiro Isshiki (Saga University)

Second Vice-Advisory Professor : Tadashi Kajita (University of Ryukyus)



Hello! I'm Samadhi, a first-year PhD student in the Science of Bioresource Production course and a Japanese government MEXT scholar from Anuradhapura, Sri Lanka. I began my education at A/Ihala Bulnewa Vidyalaya and A/Galnewa Primary School and later, built a foundation in Biological Science at Mahamaya Girls College, Kandy. Based on my achievements, I was fortunate to be admitted to Sri Lanka's leading institution for agricultural education, the Faculty of Agriculture, University of Peradeniya, and obtained a bachelor's in Agricultural Technology and Management (Honors).

During my undergraduate years, I was one of 200 students selected to participate in the SPACE-E exchange program with Saga University, sponsored by the competitive JASSO scholarship. Although held online due to the Covid-19 pandemic, this experience strengthened my desire to pursue postgraduate studies in Japan. After graduation, I served as a temporary staff member at the University of Peradeniya until beginning my master's at Saga University in 2022. With the support of my supervisor, Prof. Yuki Tsujita, and the recommendation of the Faculty of Agriculture, Saga University, I began my postgraduate studies in Japan, focusing on the Diversity and Ecology of Orchid Mycorrhizal Fungi, Conservation of Subtropical Orchids, and Molecular and Symbiotic Culture Techniques in Plant-Fungal Studies.

After completing my PhD, I plan to return to Sri Lanka and use my knowledge and skills to conserve native orchid species, promoting sustainable practices that will protect these valuable plants for future generations. I believe my current projects will deepen my commitment to support environmental conservation efforts in both Japan and Sri Lanka, and I am truly grateful for all the support I've received along the way.

I take this opportunity to thank my family, relatives, teachers, lecturers, and friends who have been there for me

through each step of this journey. My gratitude also extends to the Faculty of Agriculture, University of Peradeniya, Faculty of Agriculture, Saga University, and the United Graduate School of Agricultural Sciences, Kagoshima University. I am especially thankful to my supervisor, Prof. Yuki Tsujita, for her continuous support and encouragement.

Last but not least, I am grateful for the free education system in Sri Lanka, the Japanese government, and the taxpayers in both countries who make these opportunities possible. I congratulate my fellow PhD colleagues as we start this new chapter and wish everyone success in their journey toward completing their doctorates, while enjoying all that life in Japan has to offer.

【農水圏資源環境科学：Resource and Environmental Science of Agriculture, Forestry and Fisheries】
(生物環境保全科学：Environmental Science and Conservation Biology)

ファディル ノール
Name Fadhil Noor (Indonesia)

Title of Research: Solute Transport Dynamics in a Smart Field Lysimeter
with Bi-Directional Pumping System

Advisory Professor: Ueno Daisuke (Saga University)

First Vice-Advisory Professor: Tokumoto Ieyasu (Saga University)

Second Vice-Advisory Professor: Ito Yuji (Kagoshima University)



My name is Fadhil Noor, and it is an honor to introduce myself as a new PhD student in this program. I am originally from Kampar, Riau, Sumatra, Indonesia, and I previously completed my master's degree at Saga University, Japan, from 2022 to 2024. Building on my previous research, I am focusing on the development and analysis of water in the agricultural sector, an area that is crucial for supporting sustainable agriculture. This work is especially important considering global challenges such as climate change and water scarcity, which require innovative and sustainable solutions.

I am privileged to be under the guidance of Prof. Ueno Daisuke and Prof. Ito Yuji, who brings extensive expertise to the table, and Prof. Tokumoto Ieyasu, a specialist in agricultural water management. Their mentorship has been instrumental in shaping my research project, providing me with the support and strategic insight needed to address the pressing issues facing the agricultural sector.

As part of my ongoing research, I am continuing the development of the lysimeter, a device designed to measure water flux, groundwater recharge, and solute transport dynamics in agricultural fields. This advanced lysimeter features a two-way pump system and solar panels, enabling continuous data collection even in remote locations. At present, I am also assessing more efficient energy sources to ensure that the device can operate uninterrupted. This research holds great potential, as it is expected to make a meaningful contribution to improving agricultural water management. Given the increasing demand for innovative agricultural solutions, I am optimistic that this project will play a vital role in advancing sustainability in the sector.

Beyond my academic endeavors, living as a student in Japan has been an enriching experience. The knowledge I have gained has been complemented by the opportunity to immerse myself in the local culture and explore the natural beauty of Saga. Japan has not only been a place of learning but has also become a second home that continues to inspire me.

Looking ahead, I am eager to continue growing and making a tangible impact in the field of agricultural water management. I would like to express my heartfelt gratitude to everyone who has supported me thus far,

especially my colleagues in the lab. I look forward to fruitful collaborations and the valuable experiences that lie ahead on this academic journey.

Best regards,

Fadhil Noor

PhD Student, The united Graduate School of Agriculture Science Kagoshima University

Title of Research:

Establishment of the Mathematical Models for Tomato Growth Indices using Environmental Factors and Photosynthesis Information.

Advisory Professor : TANAKA Munehiro(Saga University)

First Vice-Advisory Professor : KONDO Fumiyoshi(Saga University)

Second Vice-Advisory Professor : TAIRA Eizo(Ryukyu University)



Greetings to Everyone!

My name is Kalpani Abeysinghe. I was born and grew up in a city near to Colombo, Sri Lanka. Since my childhood I have been passionate about science and learning new things. At my high school I selected biology stream to start over my journey in science. Then, I was selected to University of Peradeniya which is one of the most prestigious and renowned universities for its academic excellence, where I completed my bachelor's in Agriculture Technology and Management (Special) by 2020. Then I worked in a private health care insurance company as a senior operations analyst. In 2022, I was honored to receive MEXT scholarship to pursue my master's degree in the stream of Biological Resource Sciences at Graduate School of Agriculture Saga University, Japan. My master's research focused on understanding the intricate relationships between environmental factors and growth indices within controlled environments, particularly for tomatoes grown in greenhouses. I have developed mathematical models to find the impact of temperature, solar radiation and relative humidity on tomato growth. In addition, I was also focusing on how to incorporate multispectral image information to predict tomato growing information. Besides, I gained lot of hands-on experience in field work, laboratory skills and greenhouse management etc. during that period.

Currently I am enrolled to the United graduate school of Agriculture, Kagoshima university as a PhD candidate. During my PhD, I will continue to study further on relationships between tomato growing indices and environmental factors. In this research I aim to optimize greenhouse conditions to enhance the yields and quality of tomatoes by integrating advanced data analysis and modeling techniques. Particularly I am interested in identifying how innovations in environmental monitoring and automation can contribute to enhance the sustainable agricultural production. My ultimate intension is

to develop deep and specialized knowledge in this field and contribute to the sustainable food production in the globe as well as in Sri Lanka.

Besides academic pursuits, I am learning Japanese as a hobby. This linguistic skill has always helped me to engage in a wider range of opportunities so far. Finally, through this platform, I would like to express my gratitude to my supervisor Prof. Tanaka Munehiro for accepting me as a student at his laboratory, MEXT scholarship foundation, Saga University and Kagoshima university for offering me this incredible opportunity to continue my higher studies.

★令和6年4月入学（33名）★

【農水生命科学：Agriculture, Fisheries, and Life Sciences】

（農水圏生産科学：Agricultural and Fisheries Production Sciences）

OMBOUDA NAMA Franck Honore Kevin (Cameroon)

Title of research: Characterization of grain yield and identification of genes increasing rice grain yield under *Candida parapsilosis*-treated condition.

Advisory professor: Fujita Daisuke (Saga University)

First Vice-Advisory Professor:

ZHENG, Shao-Hui (Saga University)

Second Vice-Advisory Professor:

ICHITANI Katsuyuki (Kagoshima University)



Hi everyone,

My name is Kevin, and I'm excited to be here! I'm originally from Cameroon and currently affiliated with Saga University, where I'm pursuing a Ph. D course from the United Graduate School of Agricultural Sciences of Kagoshima University.

Before coming to Japan, I earned a Master of Engineering in Crop Production from the University of Dschang in Cameroon. I then moved to Japan in November 2021 as a research student at Saga University, where I completed my second master's degree in March 2024.

My research interests lie in sustainable agriculture. I've worked on improving rice yields through breeding and am currently focused on developing microorganism-based biostimulants. I believe this approach offers a sustainable solution to increase food production and meet the demands of a growing global population.

Outside of academics, I enjoy working out and traveling. I'm looking forward to making new friends, learning from different cultures, and maybe even picking up a new language or skill along the way.

If you see me around campus, feel free to say hi, I'd love to connect!

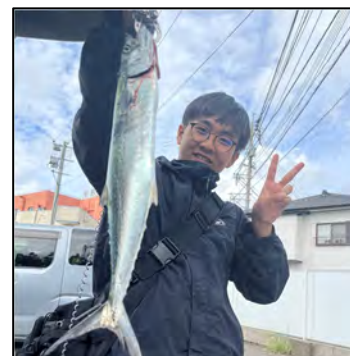
Thanks!

研 究 題 目 : ビワがんしゅ病 (*Pseudomonas syringae* pv. *eriobotryae*) に対するビワの抵抗性機構の解明

主 指 導 教 員 : 福田 伸二 (佐賀大学)

第一副指導教員: 永野 幸生 (佐賀大学)

第二副指導教員: 関根 健太郎 (琉球大学)



佐賀大学アグリ資源開発学研究室に所属しております、古賀翔吾と申します。学部時代から佐賀大学で学び、佐賀県での生活も今年で7年目になります。趣味は釣りで、川や海を問わずさまざまな場所で楽しんでいます。

研究室では、私の出身地である長崎県の特産品でもあるビワ (*Eriobotrya japonica*) を対象に研究を行っています。ビワの育種では、果実品質の向上や環境ストレス・病害耐性など、さまざまな課題がありますが、私はその中でもビワ産業において最も深刻な病害とされる「ビワがんしゅ病」に対する病害抵抗性の研究に取り組んできました。

これまでの研究から、この病害の原因となる細菌には A・B・C の 3 つのグループが存在し、ビワはそれぞれに対応する異なる抵抗性遺伝子を持つことが報告されています。私はその中でも、A グループ菌に対する抵抗性を支配する主働遺伝子「*Pse-a*」の研究を進めており、卒業研究では抵抗性遺伝子の同定まで後わずかなところまで到達しています。

しかしながら、現状の成果では、細菌による既存抵抗性の打破（ブレイクダウン）というリスクがあり、安定的かつ持続可能な抵抗性品種の育成にはまだ課題が残されています。そこで博士課程では、病害抵抗性の分子機構の解明にまで踏み込むことで、より長期的に有効な抵抗性品種の開発を目指したいと考えています。限られた3年間ではありますが、研究を通じて地元・長崎県に少しでも貢献し、ビワの魅力を発信していくことを目指しています。

授業では、同期の皆さまとお会いできるのを楽しみにしております、よろしくお願いいたします。

研究題目：コバンハゼ属の分類および生態に着目した多様化要因の解明

Title of Research: Elucidation of diversification focusing on the taxonomy and ecology of the genus *Gobiodon*.

主指導教員：本村浩之（鹿児島大学）

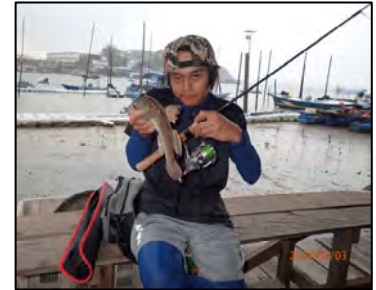
Advisory Professor：Motomura Hiroyuki (Kagoshima University)

第一副指導教員：山本智子（鹿児島大学）

First Vice-Advisory Professor：Yamamoto Tomoko (Kagoshima University)

第二副指導教員：寺田竜太（鹿児島大学）

Second Vice-Advisory Professor：Terada Ryuta (Kagoshima University)



はじめまして、2025 年 4 月に連合農学研究科に入学しました佐藤智水です。所属は鹿児島大学の魚類分類学研究室です。鹿児島大学水産学部を機に鹿児島での生活は 7 年目となりました。この 6 年間を通して鹿児島県の壮大な自然と、複雑な多様性にふれ、さらなる自然の神秘を解き明かす礎を築いていきたいと考えるようになりました。

博士課程の研究テーマは、コバンハゼ属の分類および生態に着目した多様化要因の解明です。本研究で最も重要な取り組みはまず、コバンハゼ属魚類に識別可能な種が何種いて、それぞれにいずれの学名が適応されるかという分類学的問題を解決することです。分類学は生物を研究するうえで最も基礎となる分野です。例えば、生物学的研究をすすめる際に間違えて複数種を同種として扱うとどのようなことが起きてしまうでしょう。生物は種ごとに生態的特性が異なる可能性もありますし、おそらく、この場合研究そのものが破綻してしまうことでしょう。本研究で取り扱うコバンハゼ属魚類は造礁サンゴを直接的なすみかとして利用する魚類の中で最も多様であり、こうした特異的な生態から、かねてから多くの生態学的・生理学的研究が行われてきました。しかし、本属魚類は分類学的知見が乏しく、私が行った分子解析においても、遺伝的に区別される、複数の隠蔽種が存在が示唆されました。したがって、これまで執り行われてきた本属に関する生態的・生理学的研究においても複数種を同種とし研究資料として扱われてきた可能性があるわけです。博士課程の 3 年間ではこのようなコバンハゼ属魚類の分類学的・生態学的知見を集積することで、本属魚類の応用研究の足がかりを築くとともに、同様の生物学的研究のモデルケースとなるよう精進して参ります。どうぞよろしくお願いいたします。

研究題目：栽培イネと野生イネの交雑後代で見出された生殖隔離現象の分子遺伝学的解析

Title of Research: **Molecular genetic analysis of reproductive barriers identified in the progenies from crosses between cultivated rice and wild rice**

主指導教員：一谷 勝之（鹿児島大学）

Advisory Professor : Katsuyuki Ichitani (Kagoshima University)

第一副指導教員：清水 圭一（鹿児島大学）

First Vice-Advisory Professor : Keiichi Shimizu (Kagoshima University)

第二副指導教員：松本 雄一（佐賀大学）

Second Vice-Advisory Professor : Yuichi Matsumoto (Saga University)



はじめまして！鹿児島大学・植物育種学研究室でイネの研究をしています、柴田雪花と申します。イネは、私たちの食を支える重要な作物であると同時に、モデル植物としても多くの魅力を持っています。私の研究の関心は、「**生殖隔離（reproductive barrier）**」という現象の謎を解き明かすことにあります。

生殖隔離とは、異なる種や品種を交配した際に、子孫がうまく育たなかったり、全くできなかったりする現象です。これは、生きものがそれぞれの“種の境界”を保つために進化の中で獲得してきた、自然のしくみのひとつです。

私が特に注目しているのは、栽培イネ（*Oryza sativa*）と、オーストラリアに自生する野生イネ（*Oryza meridionalis*）を掛け合わせたときに生じる生殖隔離現象です。

博士課程の研究では、**SDV1** と **SDV2** という、よく似た2つの**重複遺伝子**の働きに着目しています。これらの遺伝子のどちらかが正常であれば種子は育ちますが、両方が壊れていると、受精後すぐに種子発達が止まってしまいます。この遺伝子を解析することで、イネにおける「種子発達に必要な因子」や「種分化の歴史」を明らかにすることを目指しています。

また、もうひとつ興味深い現象として、**花粉同士の受精競争**についても研究しています。修士課程での実験では、**GA16** という遺伝子の作用により、見た目は正常な花粉であっても**受精の“優先順位”に差が生じる**ことが確認されました。この現象は、イネにおける新たな生殖隔離モデルとして注目しています。

これらの研究を通して、イネがどのように種を保ち、進化してきたのかを明らかにする手がかりが得られると考えています。また、野生イネがもつ**病害抵抗性や環境適応性**といった**貴重な遺伝資源**を、育種に活用するためにも、生殖隔離という壁を理解し、乗り越える必要があります。

私にとって生殖隔離の研究は、「**進化の謎を解く楽しさ**」と「**育種への応用可能性**」という、学術的な面白さと社会的意義の両方を持つテーマです。

これからも、自然の不思議を少しずつ明らかにしながら、未来の農業に貢献できる研究を続けていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします！

Name: SSENKONGA PETER BALYEJUSA

Nationality: Ugandan

Title of Research: **Physiological Performance of Upland NERICA Variety; Investigation into Stay-green Characteristics During Grain-filling Period**

Advisory Professor : Prof. Sakagami Junichi (Kagoshima University)

First Vice-Advisory Professor : Prof. Ikenaga Makoto (Kagoshima University)

Second Vice-Advisory Professor : Prof. Fujita Daisuke (Saga University)



Greetings, this is Peter Balyejusa Ssenyonga from Uganda. A member of the East African community, it is also known as pearl of Africa due to good weather and beautiful scenery. I reside in the central region and Kampala is the capital city.

I gained passion for agriculture when I completed my first degree in 2008 from Kyambogo University, Uganda. I joined a Soil Science laboratory at Makerere University, Kampala Uganda, here I got a chance to work with a number of professors and on several projects where I earned an experience in agriculture in especially in soil related activities. I was engaged with soy beans farmers to improve their production and productivity through use of biological nitrogen fixation. This project enhanced my knowledge for crop production and farmer environment, with that experience later joined National Agricultural Research Organization (NARO) as a Research Assistant on soil fertility. In 2013, I was a NARO staff and had started working with rice farmers to improve its production and several research activities have been conducted to improve rice production since it is a new crop for Uganda.

Back in Uganda, 2018 I had an opportunity to meet a prominent scientist Prof. Sakagami Jun Ichi of Kagoshima University. In 2019 I joined his Laboratory and undertook a masters in crop physiology and rice crop was my major. With his effort and experience I got courage to further my knowledge and experience at Kagoshima University under his supervision for a PhD program. Thirty percent of world's total rice cultivation area is SSA region, however, farmer's production technologies do not match the growing consumption demand and increasing population (Saito et al., 2015). Biotic and abiotic factors as a result of climate change are leading grain yield constraints in Sub-Saharan Africa; drought spells (Jarvis *et al.*, 2009), reduced radiation (Wang *et al.*, 2015), and increasing temperature (Krishnan *et al.*, 2011) during growing season are challenging food security. Therefore, the main objective is to

investigate the stay-green characteristics using various stresses on upland NERICA variety during grain filling period. Therefore, the presence of stay-green characteristics in upland NERICA, will aid the delayed leaf senescence influencing more translocation and remobilization of structural carbohydrates into grain, and this underscores its utilisation in breeding programs for future rice varieties with climate change resilience traits.

The United Graduate School of Agricultural Sciences, Kagoshima University Japan will provide a suitable platform for my continued quest of scientific growth as a crop physiology researcher in the field of Agriculture.

研究題目：ケナフによる地球温暖化抑制に関する研究
ケナフの栽培条件がCO₂固定に及ぼす影響とCO₂貯蔵の可能性の検討

主指導教員：志水 勝好 先生（鹿児島大学）

第一副指導教員：朴 炳幸 先生（鹿児島大学）

第二副指導教員：諏訪 竜一 先生（琉球大学）



初めまして。2025年4月より連合農学研究科に入学しました高崎 蒼です。鹿児島大学農学部 比較環境農学研究室に所属しています。

私の研究題目は、ケナフを用いたCO₂固定・貯留技術の開発です。近年、世界的に気候変動に対する対策の重要性が認識されています。農業分野においても気候変動の影響によって、例えばコメの収量や品質への悪影響や果実の品質・栽培適地への影響等、さまざまな分野において悪影響が確認・予測されています。気候変動への具体的な目標として、IPCC（気候変動に関する政府間パネル）は「産業革命前からの地球の平均気温上昇を1.5℃に抑えることを目指す」いわゆる1.5℃目標を設定しました。しかしながら、この1.5℃目標を達成するためには、カーボンニュートラルの達成だけではなく、むしろ大気中のCO₂を積極的に取り込んでいく必要性が指摘されています。そこで、大気中のCO₂を積極的に回収する手段として、植物栽培を考え、特に光合成能力が高いケナフを用いることを考えました。

ケナフはアフリカ北部を原産とする一年生の植物で、アオイ科のフヨウ属に属しています。繊維作物であり、ロープなどの原料として使用されています。

研究の内容としては、まずはケナフの収量を増加させるような栽培法の検討です。ケナフのバイオマスは80%が茎に集中するため、特に茎の収量を増加させることが、ケナフの炭素固定量を増加させることにつながります。特に博士研究では、栽培期間、特に栄養生長期間の長期化を目標として、過酸化水素などを用いた発芽促進による早期播種の実現、そして花芽形成の阻害による、栄養生長期間の延長を目指しています。

また、ケナフの長期的な炭素貯留法としては、ケナフをバイオ炭化させることを考え、ケナフのバイオ炭の貯留法や貯留環境の検討、またケナフのバイオ炭を土壌改良剤として有効活用させる方法などを検討する予定です。

長いようで短い3年間で有意義なものにできるよう、日々挑戦の精神で学んでいく決意です。

研究題目 : *Caligus fugu* における宿主特異性の機構解明
Title of Research: Elucidation of Host Specificity Mechanisms in *Caligus fugu*

主指導教員 : 田角 聡志 (鹿児島大学)
Advisory Professor : Satoshi Tasumi (Kagoshima University)
第一副指導教員 : 安楽 和彦 (鹿児島大学)
First Vice-Advisory Professor : Kazuhiko Anraku
第二副指導教員 : 塩崎 一弘 (鹿児島大学)
Second Vice-Advisory Professor : Kazuhiro Shiozaki



Hello everyone, my name is Junji Zhang, and I'm from Shanghai, China. I've been living in Kagoshima since I began my undergraduate studies, and I can confidently say that it's the most comfortable and relaxing city I've ever lived in. The lifestyle here is calm, the people are friendly, and the natural environment is absolutely beautiful. What attracts me most about Kagoshima is without a doubt fishing. Kagoshima University's Faculty of Fisheries is located less than two kilometers from the ocean, so whenever I have some free time, I grab my fishing gear, hop on my bike, and ride down to the sea. The waters around Kagoshima are home to an incredible variety of marine life. You can catch many kinds of delicious fish, and if you're lucky, you might even witness dolphins jumping out of the water or spot hammerhead sharks chasing their prey near the surface. For me, fishing is not just a hobby—it's a way to connect with nature and unwind from the pressures of academic life. I highly recommend it to anyone who wants to experience the charm of Kagoshima.

Besides fishing, I have a rather unusual hobby: raising parasites. It may sound strange, but it's also directly related to my research. My first encounter with marine parasites was during a fishing trip, when I caught a Japanese eel catfish (Gonzui) and noticed a copepod parasite attached to it. That moment sparked my interest and eventually led me to join a research lab that studies marine parasites. Currently, I am conducting research on a parasitic copepod called *Caligus fugu*, which infects pufferfish. What makes this species fascinating is its extreme host specificity—it infects only pufferfish and completely ignores other fish species. Even more interesting, in its juvenile stage, it attaches only to the fins, while in its adult stage, it moves to the body surface. I aim to understand the chemical or behavioral mechanisms behind this selectivity. Why are pufferfish the only attractive hosts? What signals are these parasites responding to? As a result, when I go fishing, I often give away the tasty fish to my friends and keep the parasite-infected ones for research. This habit has actually helped me get along very well with the local anglers in Kagoshima! If you also enjoy fishing, or if you're curious about parasites and host-parasite interactions, feel free to reach out to me. I'd love to share more about my research—or even go fishing together!

研究題目：「人工海藻を利用したイセエビ *Panulirus japonicus* 着底期の生態の解明

主指導教員：山本 智子（鹿児島大学）

第一副指導教員：江幡 恵吾（鹿児島大学）

第二副指導教員：小針 統（鹿児島大学）



初めまして。豊福真也と申します。私は2018年に鹿児島大学水産学部を卒業し、環境コンサルタント会社に勤務しています。2022年に社会人修士として鹿児島大学大学院農林水産学研究科で学び、2025年4月から連合農学研究科に進学しました。

私は、修士課程からイセエビについて研究しています。高級食材の代名詞ともいえるイセエビですが、その生態は意外にも難解です。イセエビの成体は沿岸の岩礁域に生息していますが、孵化後はプランクトンとして、約1年もの期間海を漂っています。この期間、イセエビはフィロソーマと呼ばれる紙のように薄い形態をしており、親とは似ても似つきません。沿岸域に回帰すると成体に近い形のプエルルス幼生に変態して、主に海藻等の基質に着底し底生生活に移行し成長していきます。フィロソーマ期の研究は盛んに行われていますが、着底期の研究は少なく、生態が十分明らかになっているとはいえません。そこで私は、浮遊生活から底生生活への移行という、極めて大きな変化を迎える着底期の生態について、博士課程で研究していく予定です。一つに、着底基質どのように利用しているかをテーマにしています。例えば単純に着底場のみなのか、あるいは生息場として一定期間基質上に留まるのか、摂餌場としても利用するのか、というようなイセエビと着底基質との関係を調べていきます。また、餌料についても不明点が多く、着底後の稚エビの餌料が何か、本来摂餌しないといわれているプエルルス幼生は本当に餌を食べないのか、これらの疑問の解明を目指します。

イセエビは漁獲量が減少傾向にあり、全国有数の産地である鹿児島県でも年々減少しています。これには磯焼けによる海藻の減少＝着底場の減少が関係していると考えられ、着底場の造成は急務といえます。本研究で着底期の生態を明らかにすることで、着底場の重要性を示し、より良い漁場整備の一助となるよう尽力します。

最後に、同じく研究に邁進する皆様とお会いできることを楽しみにしております。どうぞよろしくお願いいたします。

研究題目：魚胚への多環芳香族炭化水素類（PAHs）暴露による下顎の形成異常
誘発メカニズムの解明

Title of Research: Effects of Polycyclic Aromatic Hydrocarbons (PAHs) and
the derivative on mechanism of head bone deformation in fish embryo

主指導教員：宇野 誠一（鹿児島大学）

第一副指導教員：久米 元（鹿児島大学）

第二副指導教員：石川 学（鹿児島大学）



皆さま、こんにちは！鹿児島大学・環境保全学研究室所属の北條 裕也と申します。出身は京都で、大学進学を機に鹿児島での生活をスタートさせ、気が付けばすでに7年目になりました。昔から水辺に行くと覗き込んで魚ばかり観察していましたが、最近は水辺の環境汚染に関心が向いてしまいます。。。

私の研究テーマは、多環芳香族炭化水素類（PAHs）の魚類に対する毒性発現メカニズムの解明です。PAHs は山火事などの自然発生的な要因だけではなく、有機物の燃焼や自動車・工場などの排気ガス、そして石油流出などの人為的な要因によっても環境中に放出されます。PAHs は大気汚染物質として知られていますが、降雨などで水系に流入します。そのため PAHs 汚染が深刻な水域では、PAHs の強い毒性と高い残留性から水生生物への影響が懸念され、種の多様性が損なわれる恐れがあります。しかし魚胚に対する PAHs の毒性発現メカニズムに関する研究は限定的で、環境中での生物影響誘発の予測も難しいため、実験室レベルでの水生生物に対する PAHs の毒性発現メカニズム解明は急務の課題です。これまで魚胚への PAHs 暴露により孵化稚魚に下顎の形成異常などの様々な形態異常を誘発することを明らかにしました。博士課程では、魚胚への PAHs 暴露による形態学的な異常、特に下顎の形成異常の誘発メカニズムを頭部骨格の形成に重要な神経堤細胞や活性型ビタミン A であるレチノイン酸の寄与の観点から検証します。本研究で PAHs の魚類に対する毒性メカニズムを明らかにして、豊かな水圏生態系保全の一助となるように日々精進していきます。

講義で皆さんに会えることを楽しみにしています。3 年間という短い間ですが、どうぞよろしく願いいたします。

研 究 題 目 : カンキツにおけるポリメトキシフラボン (PMF) の
蓄積メカニズム解明と育種基盤の強化

主 指 導 教 員 : 古藤田 信博 (佐賀大学)

第一副指導教員: 渡邊 啓史 (佐賀大学)

第二副指導教員: 山本 雅史 (鹿児島大学)



皆様、初めまして。この度、連合農学研究科に入学しました山下拓実と申します。長崎県出身で、大学から佐賀に移り、現在は佐賀大学の果樹園芸学分野に所属し、古藤田信博先生のご指導のもと研究に取り組んでいます。大学で何かに真剣に取り組みたいと考えていた中で、学部時代に研究に触れる機会を得たことをきっかけに、その奥深さと魅力に惹かれ、次第に研究に没頭するようになりました。そのような経験を通じて、より高度な専門知識と研究能力を培うべく、博士後期課程への進学を志しました。

私の研究対象はカンキツです。カンキツと言っても、温州ミカン、文旦、グレープフルーツ、オレンジ、レモンなど多様な品種が含まれており、それぞれに異なる特徴があります。カンキツは世界で最も生産されている果物のひとつであり、健康機能性成分を豊富に蓄積することから注目されています。その中でも私は『ポリメトキシフラボン (PMF) 』という成分に注目して研究を行っています。PMF は、抗炎症作用や抗肥満効果など様々な機能性を持ち、特にアルツハイマー病に対する治療効果の可能性が報告されており、非常に期待されています。しかし、PMF は一部のカンキツと黒ショウガにしか蓄積せず、その蓄積メカニズムは未解明です。そこで私の研究では、私たちの研究室が保有するカンキツ交雑実生や野生種などのミカン亜科植物遺伝資源を活用し、PMF の蓄積に関する遺伝子の特定と機能解析を通じて、PMF の蓄積メカニズムの解明を目指しています。

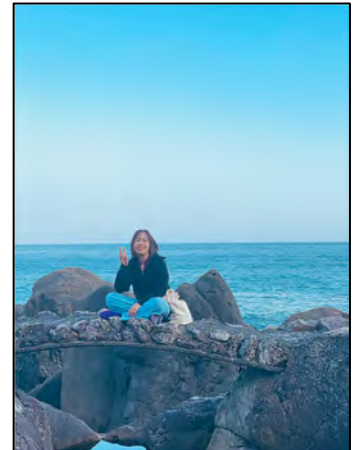
博士課程では、これまで以上に求められることが多くなると思いますが、日々成長し、研究者としてだけでなく人間としてもより良くなることを目標に努力していきます。先生方や学生の皆さんとの交流も大切にし、実りある3年間にしたいと思います。よろしくお願いします。

Title of Research: Optimal Culture Condition of *Pyropia* Species from the Philippines and Investigating its Potential for Aquaculture Application

Advisory Professor: Ryuta Terada(Kagoshima University)

First Vice-Advisory Professor: Hikaru Endo (Kagoshima University)

Second Vice-Advisory Professor: Kei Kimura (Saga University)



Mabuhay!

Konnichiwa minna-san!

My name is Gemlyn Mar S. Rance. I am known as “Kissai” by my colleagues. I am from the Philippines, often referred to as the “Pearl of the Orient Seas”. Growing up in an archipelagic country, I have always been fascinated by the ocean. As I grow older, my curiosity and appreciation for the marine environment also deepen. And so, without a doubt, I took up Marine Biology as my undergraduate course in Mindanao State University at Naawan. Subsequently, I earned a Master of Science in Marine Biology from the University of San Carlos in Cebu, Philippines in October, 2017. My interests lie specifically in marine plants, such as seagrass and seaweeds. I believe that these submerged ecosystems play crucial roles in terms of climate mitigation, food security, economic growth- and the list of its importance goes on! Unfortunately due to its submerged state, these “*hidden gems*” are often overlooked and undervalued.

Three years ago, I had the opportunity to come to Japan. Living in Japan, I am astonished as to how Japanese people incorporate seaweeds in their daily diet. I was further impressed to learn that there are private companies that continue to research and explore the cultural significance of seaweeds, their potential utilization, and sustainable farming practices. These undertakings highlight areas where my country can improve on and that I am eager to contribute to in the near future.

Currently, I am presented with an opportunity to work at Sea Vegetable Company, a Japanese seaweed company, as a seaweed researcher. My primary responsibilities involve exploring the potential of various seaweeds in Japan through laboratory experiments designed to optimize cultivation. I still have ample things to learn and fortunately enough I was selected as a PhD candidate in the United Graduate School of Agriculture at Kagoshima University. I am hoping to have a meaningful time in this esteemed institution. Furthermore, I would like to express my gratitude to my supervisor and professors who accepted me under their supervision. I look forward to unlocking advanced skills, acquiring essential knowledge and connecting with experts during this doctoral program. I believe this marks a significant step towards achieving my long-term objective of contributing to the elevation of the seaweed industry in my home country.

Finally, I extend my sincere appreciation to the individual who took the time to read this introduction. Let us strive to achieve our goals with dedication and perseverance!

Salamat po!

Title of research: Effects of high temperature and drought on rice photosystems and the protective role of exogenous substances in *O. glaberrim*

Advisory Professor: SAKAGAMI-Junichi (Kagoshima University)

First Vice-Advisory Professor: AKAGI Isao(Kagoshima University)

Second Vice-Advisory Professor: Md. Amzad Hossain(Saga University)



Hello everyone. My name is Liu Lunyu, a Ph.D. student from China currently studying at Professor Sakagami's supervision in the Tropical Crop Science Laboratory.

My research focuses on rice's physiological and molecular responses to abiotic stresses, particularly high temperature, drought, and their combined effects. As climate change intensifies, understanding how rice - a globally crucial staple crop - adapts to these challenges becomes increasingly vital for food security. Through comparative studies of diverse rice varieties, I aim to identify key genetic determinants of stress tolerance that could inform future breeding programs. Additionally, I'm investigating how exogenous compounds like plant growth regulators or osmoprotectants might enhance rice's resilience under adverse conditions.

What distinguishes my approach is the integration of multi-omics techniques with traditional physiological assessments. By combining transcriptomic, proteomic and metabolomic analyses with growth parameter measurements, I hope to develop a comprehensive understanding of stress adaptation mechanisms from molecular to whole-plant levels.

My journey to Japan was motivated by both academic and personal aspirations. Since childhood, I've been fascinated by Japan's unique blend of traditional culture and technological innovation. This interest grew through exposure to Japanese literature, cinema, and scientific achievements. I particularly admire the Japanese research philosophy that emphasizes precision, diligence, and practical applications - qualities that perfectly align with my own academic values.

At here, I've been impressed by the cutting-edge facilities and collaborative research environment. The opportunity to work alongside leading experts in plant stress physiology while experiencing Japan's rich cultural heritage firsthand represents the ideal combination of professional and personal growth for me.

Beyond research, I'm actively engaging with the international student community and participating in cultural exchange activities. These experiences have broadened my

perspectives and enhanced my intercultural communication skills - assets I believe are increasingly important in today's globalized scientific community.

Looking ahead, I aspire to contribute to sustainable agriculture solutions that address real-world challenges. Whether through academic research, industry partnerships, or policy development, my goal is to translate scientific insights into practical applications that benefit farmers and communities facing climate-related agricultural stresses.

I'm grateful for this opportunity to introduce myself and look forward to productive collaborations and meaningful exchanges during my time here. Thank you.

陸 正一 (China)

Title of Research: Population dynamics of the solenocerid shrimps in Kagoshima Bay, Japan

Advisory Professor : Ohtomi Jun (Kagoshima University)

First Vice-Advisory : Doi Wataru (Kagoshima University)

Second Vice-Advisory Professor : Shiozaki Kazuhiro (Kagoshima University)



Hello everyone, my name is Lu, and I am from China. I completed both my bachelor's and master's degrees at Huazhong Agricultural University, majoring in aquaculture with a focus on the cultivation of fish and crustaceans. Since my early academic years, I have been fascinated by aquatic life, especially crustaceans like shrimp and crabs, which led me to develop a strong interest in scientific research.

In 2022, I was fortunate to join Kagoshima University as an exchange student. During that time, I not only experienced the beautiful natural scenery and friendly atmosphere of Kagoshima but also discovered how much I resonated with the research environment and academic culture here. After completing my master's studies in China, I made the decision to return to Kagoshima to pursue a doctoral degree.

Currently, my Ph.D. research focuses on the underutilized shrimp resources in Kagoshima Bay. Many of these species are caught as bycatch in local fisheries and discarded due to lack of commercial value or awareness. Through my research, I aim to explore their biological characteristics and potential for food utilization. I hope my work will contribute to enhancing the resource efficiency of local fisheries and transforming what used to be “fishery waste” into valuable and sustainable food options.

Outside of the lab, I am a passionate long-distance runner and have participated in several marathon events across Japan. Running helps me maintain a healthy balance between my academic life and personal well-being. I also enjoy exploring culinary creativity, and I am particularly interested in integrating Japanese seafood with elements of traditional Chinese cuisine to develop new and exciting dishes.

I am truly grateful to be part of this academic community and I look forward to deepening my research, collaborating with peers, and building friendships with those who share similar interests. I understand that the Ph.D. journey is both challenging and rewarding, and I am ready to face it with determination and passion. I hope that during my time here, I can not only grow as a researcher but also make a meaningful contribution to the academic and cultural life of Kagoshima University.

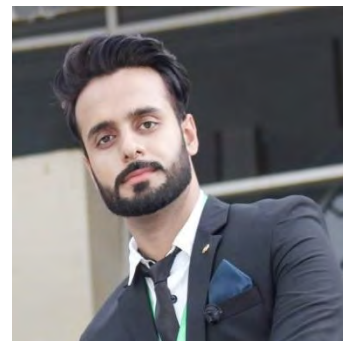
Thank you very much for reading my introduction, and I look forward to meeting and working with you all.

Title of research: Comparative Effects of Pollutants on Fish Embryonic Development.

Advisory Professor: ISHIKAWA Manabu (Kagoshima University)

First Vice-Advisory Professor: Seiichi Uno
(Kagoshima University)

Second Vice-Advisory Professor: ANRAKU Kazuhiko
(Kagoshima University)



ノーマン ワヒード

 International Spotlight: **Noman Waheed** (Pakistan )

I am **Noman Waheed** from Pakistan, currently pursuing my PhD at the United Graduate School of Agricultural Sciences (UGSAS), with academic affiliation to the Faculty of Fisheries, Kagoshima University. I am deeply honored to be here as a recipient of the prestigious MEXT Scholarship, awarded by the Government of Japan. This opportunity represents a major milestone in my academic journey and professional aspirations.

Academic & Research Background

My educational path reflects a consistent dedication to aquatic sciences and environmental research. I hold a Bachelor's degree in Zoology (where I graduated as a gold medalist from Hazara University Mansehra, Pakistan) and a Master's degree in Aquaculture and Fisheries, during which I explored the effects of nanoparticles on fish. Building on this research, I have published several related articles in reputed scientific journals. At present, my doctoral research focuses on "Comparative Effects of pollutants on Fish Embryonic Development. This project investigates how marine pollutants influence embryogenesis in fish, a crucial study in the context of marine pollution and environmental sustainability.

Professional Experience & Collaborative Work

Professionally, I've contributed to several fields and academic research initiatives. I worked with Fisheries department under Provincial government in Pakistan. I collaborated with the Japan International Cooperation Agency (JICA) on inland aquaculture systems, where I worked with Japanese experts to enhance cold and warm water fish culture techniques in Pakistan. Additionally, as a Field Supervisor in the WWF-funded "Water Resources Accountability in Pakistan" project, I focused on community-driven freshwater conservation efforts.

Looking Ahead

Being part of UGSAS and honored to receive support from the MEXT Scholarship, I am fully committed to utilizing this valuable platform to broaden my expertise, engage in meaningful collaboration with researchers worldwide, and contribute to impactful, solution-oriented science, particularly in the fields of aquaculture and aquatic toxicology. I view this opportunity as both a privilege and a responsibility, and I am eager to make a lasting

contribution through dedicated research, innovation and cross-disciplinary collaboration.

 A Note of Gratitude

I am sincerely thankful to the Government of Japan for awarding me the prestigious MEXT Scholarship and Kagoshima University for offering an exceptional academic and research environment. I am deeply honored to be part of such a vibrant and forward-thinking institution. This opportunity not only strengthens my academic journey but also inspires me to contribute actively to the shared mission of sustainable science and innovation. I look forward to growing both personally and professionally within this distinguished academic community.

With warm regards,

Noman Waheed

United Graduate School of Agricultural Sciences

Affiliated Faculty: Faculty of Fisheries

Kagoshima University, Japan

(生物資源生命科学 : Bioresource and Life Sciences)

エランガ パワニ ウィタラナ
Name Eranga Pawani Witharana (Sri Lankan)

Title of Research: Phylogenomic Insights into Sri Lankan Spices and the Genetic Diversity of *Akebia* in Japan

Advisory Professor : Yukio Nagano (Saga University)

First Vice-Advisory Professor : Shinji Fukuda (Saga University)

Second Vice-Advisory Professor : Tadashi Kajita (Ryukyu University)



Greetings everyone,

I am Eranga Pawani Witharana, originally from Sri Lanka, often referred to as the “Pearl of the Indian Ocean” and recognized globally as a biodiversity hotspot rich in unique flora and fauna. My hometown is Badulla, one of the country's most picturesque cities, renowned for its breathtaking waterfalls, historic bridges, and scenic mountains.

After completing 13 years of schooling, I was selected to pursue my undergraduate studies at the Faculty of Agriculture, University of Peradeniya, one of Sri Lanka's top public universities. During the final year of my undergraduate studies, the COVID-19 pandemic posed a significant challenge. Lockdown restrictions prevented us from accessing the university to carry out our final research projects. However, as every cloud has a silver lining, this difficult situation opened the door for me to begin learning bioinformatics under the guidance of Dr. Yukio Nagano from Saga University, turning a challenge into a valuable opportunity. In August 2021, I graduated with a BSc Honours in Agricultural Technology and Management. Motivated by my interest in bioinformatics, I continued working with Dr. Nagano on a collaborative research project focused on *Citrus* and its relatives, which helped me develop strong research and analytical skills.

In October 2022, I was honored to be awarded the Japanese Government (MEXT) Scholarship by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology of Japan. I began my academic career at Saga University as a research student and enrolled in the Master's program in April 2023. During my master's studies, I actively participated in both domestic and international academic conferences. I completed my Master's degree in March 2025, publishing my first study in Scientific Reports, where I developed a novel bioinformatics pipeline to analyze phylogenetic conflicts using nuclear and chloroplast genomes derived from the same short-read sequencing

data (<https://doi.org/10.1038/s41598-024-83292-9>). My two and a half years at Saga University were deeply enriching, helping me grow academically and professionally while building collaborations, especially with Indian researchers, under Dr. Nagano's mentorship.

Now, as a PhD student, I plan to pursue two key research areas. First, I will apply the pipeline I developed to Sri Lankan spices to investigate their evolutionary history. Second, I will conduct evolutionary and genetic diversity studies on *Akebia* species in Japan, a plant used in traditional Kampo medicine.

Beyond my individual research, I aim to further strengthen international scientific cooperation across Japan, Sri Lanka, India, and beyond. I believe that my research works collectively contribute to global progress in agriculture, health, and sustainability, aligning with the United Nations Sustainable Development Goals, especially SDG 15, SDG 8, and SDG 3.

Last but not least, I would like to express my heartfelt gratitude to my supervisor, Dr. Yukio Nagano, for his unwavering guidance and mentorship, and to the Japanese government for supporting my academic aspirations. I am committed to using my skills and knowledge to make meaningful contributions not only to Sri Lanka and Japan but also to the global scientific community by uncovering new insights into the wonders of science.

ふりがな うちむら みく
氏名 内村 望空 (日本)

研 究 題 目 : 鹿児島在来カンキツ類の機能性評価と
高付加価値化に関する研究

主 指 導 教 員 : 坂尾 こず枝 (鹿児島大学)

第一副指導教員 : 山本 雅史 (鹿児島大学)

第二副指導教員 : 高良 健作 (琉球大学)



皆様、はじめまして。2025 年 4 月より連合農学研究科に入学いたしました内村望空と申します。修士課程まで在籍しておりました鹿児島大学 食品分子機能学研究室に再びお世話になることとなりました。

修士課程修了後、鹿児島県の公設試験研究機関である工業技術センターに就職し、現在も勤務しております。所属する食品・化学部では、焼酎や麦味噌、黒酢など特色ある鹿児島の発酵食品や、食品の健康機能に関する研究を担当し、県内企業への技術支援や研究開発に携わっています。ご縁あって、社会人 1 年目に巣立ったばかりの研究室と「鹿児島みその腸内環境に対する機能性評価」について共同研究を行ったことは、生涯忘れられないでしょう。現在は、県内の発酵食品や天然資源から鹿児島県オリジナルの乳酸菌を単離・収集し、それらの特性評価を行っています。発酵食品は麹菌や酵母、酢酸菌など微生物が働いて醸造されますが、興味深いことに乳酸菌はほとんどの発酵食品で関与しています。それぞれの環境で生きてきた多様な乳酸菌と、鹿児島在来カンキツ類を掛け合わせることで、その機能性をさらに引き出し、新たな付加価値を生み出せるのではないかと考えています。また、それが県オリジナル乳酸菌の活用法の一つとして提案できる可能性もあると感じています。連合農学研究科では、食品の機能性や微生物に加え、幅広い分野の知見を深め、今後の研究に活かしていけるよう努めてまいります。

最後に、“社会人ドクター”となる私を温かく受け入れてくださった坂尾先生をはじめ、研究室の皆様、博士課程進学を快く認めてくださった工業技術センターの皆様、そして日々の研究を支えてくださるすべての方々に心より感謝申し上げます。最後の学生生活を楽しみながら、公私ともに研究に邁進してまいります。どうぞよろしく願いいたします。

研究題目：

Title of Research:

ニゲラン高生産化を目指したニゲラン分解・合成酵素関与遺伝子
agtC・gnsA の機能解析

Functional analysis of the nigeran degrading and synthesizing-related genes
(agtC and gnsA) in the co-expression of agtC or gnsA using a nigeran-high
producing strain in *Aspergillus oryzae* as a host

主指導教員：水谷 治（琉球大学）

Advisory Professor：Osamu Mizutani（University of the Ryukyus）

第一副指導教員：外山 博英（琉球大学）

First Vice-Advisory Professor：Hirohide Toyama（University of the
Ryukyus）

第二副指導教員：二神 泰基（鹿児島大学）

Second Vice-Advisory Professor：Taiki Futagami（Kagoshima University）



皆様、はじめまして。2025 年 4 月に連合農学研究科に入学し、琉球大学 発酵微生物学研究
室所属の菊池 麻紀子です。臨床検査技師、看護師として社会人を経験した後、海なし県・埼玉
から青い海に憧れて 2021 年 に 3 年次編入で琉球大学に入学し、博士課程に進学いたしました。

私の研究室では、産業微生物である酢酸菌、酵母、麹菌を使った研究を扱っています。その中
で、私の研究は、一部の *Aspergillus* 属等が作る細胞壁多糖の一つであるニゲランの分解・合成に
関与する遺伝子の機能解析です。ニゲランという聞き慣れない細胞壁多糖ですが、生育に必要な
窒素が欠乏した状態で生育すると作られる細胞壁多糖です。熱水に溶け、冷水に溶けない性質が
あります。ニゲランの合成・分解には、*nisA*・*agtC*・*gnsA* の 3 つの遺伝子の関与が明らかになっ
ています。このうち、*nisA* がニゲラン合成の本体を担っており、ニゲランを作らない黄麹菌に、
この遺伝子を高発現させるとニゲランを高生産することが明らかになっています。しかし、残り
の遺伝子については機能が明らかになっていません。このニゲランですが、エステル誘導体化物
がバイオベースプラスチック素材として有用であると報告されています。そのため、産業応用化
の期待が持てるのですが、応用利用に向けた特性解析が進んでいません。研究を進めるために
は、大量のニゲランが必要です。そこで、この研究では、機能解析が進んでいないニゲランの分
解・合成酵素である *agtC*・*gnsA* の機能解析を進め、ニゲラン大量生産化に繋げることを目標とし
ています。

修士課程では、未解析の遺伝子の一つである *agtC* にニゲランを分解する可能性があることを
示唆するデータを得ることが出来ました。博士課程では、この *agtC* を産業応用に利用するため
には、どのようにすれば良いのか？ということを中心に研究を進め、さらに、これまでの研究で
は明らかに出来ていない *gnsA* の機能を明らかにすることも目標に研究を進めていきたいと考え
ています。

どうぞよろしくおねがいします。

研究題目：クモノスカビのフマル酸高生産をもたらす排出輸送体の同定と機能解明

主指導教員：二神 泰基（鹿児島大学）

第一副指導教員：玉置 尚徳（鹿児島大学）

第二副指導教員：後藤 正利（佐賀大学）



初めまして！2025 年 4 月より連合農学研究科に入学いたしました、鹿児島大学・醸造微生物学研究室所属の朱 恩康と申します。私は中国の河南省で生まれ、湖南農業大学で修士課程を修了しました。

私の研究テーマは、「クモノスカビにおけるフマル酸高生産をもたらす排出輸送体の同定とその機能解明」です。*Rhizopus* 属の糸状菌は、フマル酸を高濃度に分泌生産することが知られており、特に高生産菌株では、還元的 TCA 回路により生成されたフマル酸が細胞外へ分泌されます。しかし、フマル酸の細胞外輸送を担う輸送体については、これまで未同定でした。そこで本研究では、*Rhizopus* 属におけるフマル酸輸送体を同定し、その機能を明らかにすることを目的としています。

私が連合農学研究科に進学したきっかけは、湖南農業大学と鹿児島大学との交換留学プログラムに参加し、1 年間鹿児島大学に留学した経験です。留学中に微生物学や遺伝子工学に関する多くの知識を学び、研究に興味を持ち、さらに学業を深めたいと強く思うようになりました。

趣味はバドミントンと卓球で、旅行も大好きです。日本では、これまでに北海道、東京、大阪、京都、奈良、沖縄などを訪れました。どの地でも出会った人々はとても親切で、日本の美しい風景には深い感動を覚えました。

なかでも鹿児島では桜島が一番のお気に入りです。これまでに 3 回、自転車で桜島を一周したことがあります。とても疲れましたが、その分、美しい桜島の風景を見ることができ、楽しい思い出となりました。この写真は、友人と仙巖園を訪れた際に撮影したもので、桜島の景色がとても印象的でした。

博士課程の 3 年間は決して楽ではないと思いますが、私は困難を恐れません。より多くの科学的知識を学び、目標に向かって努力を重ね、自分自身を成長させていきたいと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。

Name ジュ ハオ ユウ ZHU HAOYU (国籍) China

Title of Research: Effect of organic acids on yeast growth and aroma component formation in shochu brewing

Advisory Professor: Takamine Kazunori (Kagoshima University)

First Vice-Advisory Professor: Yoshizaki Yumiko (Kagoshima University)

Second Vice-Advisory Professor: Mizutani chi (Ryukyus University)



Hello, my name is Haoyu Zhu, a Ph.D. student at Kagoshima University in Japan. I am originally from Chengdu, Sichuan Province in China—a place known for its rich food culture and traditional fermented products. With a background in brewing engineering during my undergraduate studies and food processing and safety during my master's, I have always been fascinated by fermentation and the invisible power of microorganisms in shaping flavor and culture.

Currently, my doctoral research focuses on the production of imo shochu, a traditional Japanese distilled liquor made primarily from sweet potatoes. Specifically, I am studying how organic acids—such as citric acid and lactic acid—produced during the fermentation process affect yeast growth and the formation of aroma compounds. My goal is to better understand how these components interact and how we might improve the quality and flavor of shochu by adjusting fermentation conditions. I find this research meaningful, as it combines microbiology, traditional culture, and practical application.

One of the reasons I chose this path is because I enjoy exploring the intersection between tradition and science. I believe that even the most time-honored fermentation methods can benefit from modern scientific insights, and I hope to contribute to that balance through my work. At the same time, I greatly respect local culture and craft, and I aim to preserve the uniqueness of regional products like shochu while enhancing their value.

In terms of personality, I am a patient and detail-oriented person, especially when it comes to experimental work. I enjoy solving problems and working independently, but I also value collaboration and learning from others. Outside of the lab, I have a strong interest in sports, particularly table tennis and tennis, which help me stay active and focused.

Looking ahead, I hope to continue working in the field of fermentation science, possibly as a researcher or developer in the food or beverage industry. I am especially interested in developing high-quality, regionally distinctive fermented products that are both scientifically sound and culturally meaningful. I would also like to contribute to international exchange in food science, promoting understanding and collaboration between Japan, China, and other countries.

Studying abroad in Japan has broadened my perspective and allowed me to grow both academically and personally. I am grateful for the opportunity to conduct research in such a rich cultural and scientific environment, and I will do my best to contribute to the field and to society through my future work. Thank you very much for your attention.

研 究 題 目 : 機能を付与した新規タンパク質低分子阻害剤の合成と評価

主 指 導 教 員 : 川口 真一 (佐賀大学)

第一副指導教員: 辻田 忠志 (佐賀大学)

第二副指導教員: 熊谷 百慶 (鹿児島大学)



はじめまして。この度、連合農学研究科に入学いたしました濱田悠菜と申します。佐賀大学の天然資源化学研究室に所属しており、唐津で研究しています。佐賀大学と聞くと佐賀市内の本庄キャンパスをイメージする方が多いと思いますが、天然資源化学研究室は唐津に位置しています。

私の目標は、自ら設計した化合物を医薬品としての実用化に導くことです。新薬の開発に携わることを志し、博士課程への進学を決意しました。将来的に自身の研究成果を社会に還元できる研究者になりたいです。

私の研究テーマは「機能を付与した新規タンパク質低分子阻害剤の合成と評価」です。特に、Plasminogen activator inhibitor-1 (PAI-1) やプロリン水酸化酵素 (PHD) などのタンパク質の阻害剤を合成し、タンパク質や細胞を使用してその活性や細胞毒性を評価しています。PAI-1 は線溶系に関与しており、PAI-1 が増加すると血栓が蓄積します。PAI-1 は血栓症だけでなくがんや糖尿病などさまざまな疾患で上昇することが報告されており、PAI-1 阻害剤はそれらの疾患の治療薬として利用できる可能性があります。また、PHD は Hypoxia inducible factor- α (HIF- α) のプロリン残基を水酸化し、プロテアソーム分解へと導く酵素です。HIF は常酸素下では分解されますが、低酸素下では安定化され、エリスロポエチン (EPO) などの低酸素誘導遺伝子群の転写を促進します。PHD 阻害剤は HIF を活性化し、EPO の産生を促すため、EPO が低下する慢性腎臓病の治療薬として利用されています。PHD 阻害剤は慢性腎臓病以外の疾患にも応用できる可能性があります。従来の PAI-1 阻害剤や PHD 阻害剤とは異なる構造の化合物を設計することで、新たな機能・特性をもつ阻害剤の創出を目指しています。

博士課程ではこれまで以上に研究に励みます。どうぞよろしくお願いいたします。

研 究 題 目 : 沖縄アグー豚の種豚選抜に向けた産肉能力
および肉質特性に関する研究

主 指 導 教 員 : 大塚 彰 (鹿児島大学)

第一副指導教員: 井尻 大地 (鹿児島大学)

第二副指導教員: 伊村 嘉美 (琉球大学)



はじめまして、2025年4月から鹿児島大学連合農学研究科に社会人枠で入学いたしました普照恭多と申します。名前は沖縄風ですが、実は神奈川県出身です。琉球大学農学部に入學後、修士課程を経て沖縄県に畜産技術職員として入庁し、農業改良普及業務や試験研究業務を経て、現在はアグーブランドに関する振興業務や試験総括に携わっております。

私の研究テーマは、沖縄アグー豚（以下アグー）の産肉能力および肉質特性を解明することです。これまでの研究で、アグーは西洋品種と比較して小型で発育が遅い、産肉能力が低い、脂肪蓄積開始時期が早い、肥満になりやすいといった特性があることがわかっております。このことから、アグーの養分要求量は一般豚と異なると予想されますが、これまでアグーの養分要求量に着目した研究はほとんど行われていないのが現状です。そこで、私はアグーの産肉能力（タンパク質合成能力）が低いことに着目し、アミノ酸の要求量に焦点をあてた研究に取り組んでおります。現在、博士課程の研究の一環として、豚の第一制限アミノ酸であるリジンの水準を調整した飼料をアグーに給与し、増体量や血漿中成分からリジン要求量の解明を進めております。また、アグーの肉質は消費者からの評価が高く、銘柄豚として「おきなわブランド」の戦略品目となっているため、飼料のリジン濃度が枝肉成績や肉質に与える影響を検証する必要があります。そこで、生産したアグー豚肉の理化学検査、代謝産物のメタボローム解析および官能評価を実施し、アグーの肉質や美味しさの解明に取り組んでいきます。本研究を進めることで、アグーの飼養標準や産肉能力調査方法の構築に寄与し、アグーの育種改良やアグーブランド強化に繋がると考えております。

3年間という限られた時間の中で、様々な方と交流し、多様な角度から知見を深め、研究者としての資質を身に付けられるよう、精一杯研究活動に努めていきます。どうぞよろしくお願いいたします。

ふりがな 氏名 ^{ゆのきやすなり} Name 柚木康克 (国籍) 日本

研究題目：アオコ毒 Microcystin-LR が誘導する細胞のストレス応答の分子機序

Title of Research: Molecular Mechanisms of Cellular Stress Responses Induced by the Blue-Green Algae Toxin Microcystin-LR

主指導教員：小松正治（鹿児島大学水産）

Advisory Professor: Komatsu Masaharu (Kagoshima University fish)

第一副指導教員：内匠正太（鹿児島大学水産）

First Vice-Advisory Professor: Takumi Shota (Kagoshima University fish)

第二副指導教員：加治屋勝子（鹿児島大学農学）

Second Vice-Advisory Professor: Kajiya Shoko (Kagoshima University agricultural)



皆さん、初めまして。4月から鹿児島大学連合農学研究科に入学した、柚木康克です。鹿児島大学水産学部ケミカルバイオロジー研究室に所属しています。学部のころから、アオコを形成するシアノバクテリアの一種である **Microcystis** 類が産生する、**Microcystin** 類について研究を行っています。

Microcystin 類は、アオコを形成する **Microcystis** 属等のシアノバクテリアが産生する7残基のアミノ酸からなる分子量995前後の環状ペプチドの二次代謝産物であり、100種類以上の同族体が存在します。**Microcystin** 類の中でも **Microcystin-LR** は特に毒性が強いとされています。**Microcystin** の被害事例として、ブラジルのカルアル市にある人工透析センターにおいて **Microcystin** 類に汚染された水が腎臓透析に用いられたことで88名が亡くなる事故や中国では21世紀からアオコが頻発に発生することが頻繁になり、太湖周辺は肝がん多発地帯として知られています。また、近年では地球温暖化における気候変動により、アオコの発生がより活発化する傾向が示唆されています。

これらのことから、私は水産物を摂取する人々の健康の保持・増進のために、リスク&ベネフィットの観点から **Microcystin-LR** の毒性発現メカニズムの解明をめざし、研究を進めています。

博士課程3年間での研究活動で、多くの成果を残し充実した研究生活にしたいと考えています。また、他の連合農学研究科生との交流を行い研究者として、学生として多くのことを楽しみたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

氏 名 ^リ李 ^{カホウ}家鋒 (中国)

研 究 題 目 : 紅茶焼酎の特徴香気成分の生成メカニズムの解明

主 指 導 教 員 : 吉崎 由美子 (鹿児島大学)

第一副指導教員: 高峯 和則 (鹿児島大学)

第二副指導教員: 外山 博英 (琉球大学)



皆様、初めまして。中国から参りました李家鋒と申します。

修士課程在学中、交換留学生として日本に来る機会をいただき、鹿児島大学の焼酎発酵学研究室に所属させていただきました。先生方の丁寧なご指導のおかげで、日本の焼酎に強い関心を持つようになりました。

また、修士課程では中国の紅茶を研究しており、紅茶に関する基礎的な知識と理解があります。そこで私は、中国を代表する特産品である紅茶と、鹿児島の名産である焼酎を組み合わせることで、**独自性と美味しさを兼ね備えた「紅茶焼酎」**の開発に挑戦したいと考えるようになりました。

このたび、博士課程への進学を快く受け入れてくださり、私の研究構想にご理解とご支援をくださった先生方に、心より感謝申し上げます。自分の興味・関心を追求できる環境を与えていただき、本当にありがとうございます。

今後は、「紅茶焼酎」という新しい製品を世に送り出せるよう努力を重ねるとともに、博士課程での研究・生活を通じて大きく成長し、将来的には焼酎業界、そして社会全体に少しでも貢献できる存在になれるよう励んでまいります。今後ともよろしくお願い申し上げます！

Name: Abeykoon Jayasundara Mudiyansele Chathura Madushanka Siriwardana (Nationality) Sri Lankan

Title of Research: Evaluating Methane (CH₄) Emission Pathways from Agricultural Lands: Special reference to paddy lands

Advisory Professor : SAKAI Kazuhito (Ryukyus University)

First Vice-Advisory Professor : Tamotsu Nakandakari (Ryukyus University)

Second Vice-Advisory Professor : Kozue Yuge (Saga University)



I hold a Bachelor of Science degree in Agriculture with Second Class Upper Division Honours from the University of Ruhuna, Sri Lanka, specializing in Crop Science. My undergraduate research focused on “Testing of Nutrient Solution for Potato (*Solanum tuberosum*) Mini Tuber Production under a Hydroponic System,” where I evaluated the effectiveness of specific fertilizer solutions for potato mini tuber production in greenhouse conditions.

Following my undergraduate studies, I completed a Master of Philosophy (MPhil) in Crop Science at the same university. My MPhil research was titled “Development of an Eco-Friendly Weed Management Method for *Carica papaya* (Papaya) Orchards,” which aimed to utilize common herbaceous weeds with allelopathic properties for sustainable weed control in short-term perennial orchards.

Currently, I serve as a lecturer in the Department of Agro-Technology at the University of Colombo Institute for Agro-Technology and Rural Sciences, Sri Lanka. My academic and research interests are focused on agronomy, protected agriculture, and crop modeling-areas that have continually inspired me throughout my academic journey.

Greenhouse gas (GHG) emissions are the primary drivers of global warming and climate change, leading to observable phenomena such as rising global temperatures, sea level rise, and an increased frequency of extreme weather events. Agriculture, while highly vulnerable to these impacts, is also a significant contributor to global GHG emissions. These changes collectively pose serious threats to crop production and, consequently, to global food security. In response to this pressing challenge, my doctoral research is focused on evaluating methane (CH₄) emission pathways from paddy fields under controlled laboratory conditions. I am pursuing these doctoral studies at the United Graduate School of Agricultural Sciences, Kagoshima University, as a recipient of the MEXT scholarship. Through this research, I aim to develop novel knowledge and practical skills that can contribute to mitigating greenhouse gas emissions from agricultural lands.

As an academic researcher, I’m passionate about learning and sharing knowledge beyond the classroom. Engaging with students and the community brings fresh experiences each day, making the work both meaningful and rewarding.

研究題目：微生物群集の動態解析に基づくポストハーベスト青果物の生理障害発生機構の解明

主指導教員：濱中 大介 先生（鹿児島大学）

第一副指導教員：吉田 理一郎 先生（鹿児島大学）

第二副指導教員：平良 英三 先生（琉球大学）



初めまして、2025 年 4 月から鹿児島大学連合研究科(鹿児島大学配属)に入学いたしました藏元理彩と申します。生まれも育ちも福岡県ですが、鹿児島県は祖父母の故郷であり、縁のあるこの地で大学生活を始めて 7 年目となりました。趣味は、映画・アニメ鑑賞、古着集めです。また、幼少の頃からダンスをしています。

学部・修士課程では、非定常環境や保存中に物理的处理を施した青果物の細菌叢に着目し、メタ 16S 解析を基盤とした細菌叢の比較や、その多様性の評価を軸に研究を行ってきました。その結果、温度変動や、紫外線処理を施した青果物に含まれる細菌属種は、保存前後で大きく差異が生じ、細菌叢の多様性は縮小することを明らかにしました。また、低温感受性作物では、障害発生前後において、細菌群集の中でも難培養属種の動態が顕著に変化することも確認しました。これらの結果から、これまで腐敗原因ではあるものの、生理障害そのものには関与しないと考えられてきた細菌が、特殊なコミュニティを形成した場合、低温障害の発生に寄与していることが十分に示唆されました。研究を進める中で、細菌を含めた微生物の新たな可能性を見出すことができ、ポストハーベスト学領域の発展はもちろん、現場での青果物のシェルフライフ評価や予測に貢献できる研究になり得るのではないかと考え、博士課程への進学を決意しました。

博士課程では、流通および保存中の青果物について、低温や高二酸化炭素によって誘導される生理障害に焦点を絞り、障害発生に関与する細菌群集の動態把握ならびに産生代謝物質の同定とともに、青果物組織内での細菌の局在の特徴を明確にすることを目的として研究を行う予定です。

また、この 3 年間を通して、研究者としても人間としても成長したいと考えています。どうぞよろしく願いいたします。

研 究 題 目：日本産 *Stenolechia* 属と近縁属の分類学的
再検討（鱗翅目：キバガ科）

主 指 導 教 員：坂巻祥孝（鹿児島大学）

第一副指導教員：畑 邦彦（鹿児島大学）

第二副指導教員：徳田 誠（佐賀大学）



初めまして、鹿児島大学害虫学研究室の酒井大輔です。出身は鹿児島県ですが、家が転勤族だったため東京、兵庫、福岡でそれぞれ数年過ごし、6年前から大学入学とともに鹿児島に住んでいます。

私はキバガという非常に小さな蛾の分類学的研究をしており、日々昆虫誘引ライトを使用したライトトラップ採集や、植物の葉に潜っている幼虫の採集を行いながら、それらの標本の形態観察や解剖、遺伝子解析などを実施して研究をしています。幼少期から昆虫は好きでしたが、蛾について、特に小蛾類の研究に関心を持ったのは研究室に所属してからで、初めて研究室の先輩に連れて行ってもらったライトトラップがきっかけで小蛾類の研究を始めました。当時先輩が採集していた小蛾類を見せてもらい、肉眼で見た時は地味な印象を受けたものの、顕微鏡で見た際にその美しい模様に気づき、研究が進んでいない分類群が多くあることも小蛾類の魅力だと感じました。私は登山が趣味で、登山部に所属していたので、霧島にも何度か登山に来ていましたが、現在はそこが研究のためのフィールドワークの場になっており、植物探しで山歩きしているときには登山部の思い出がよみがえり、とても感慨深いです。また、鹿児島県は屋久島や奄美大島など離島にアクセスしやすく何度か採集遠征を実施していますが、離島の美しい自然や珍しい生物を見るのが好きなので、この鹿児島県というフィールドで研究を続けられることを非常にうれしく思います。修士の研究では多くの方々の協力のおかげで、研究対象の *Stenolechia* 属から 10 種近くの未記載種を発見することができました。しかし、近縁属との関係性があいまいな状態の種や、食草が判明していない種もいるため、博士課程の研究ではこうした分類学上の問題の解決や生態の解明を目標として研究を行いたいと考えています。皆様の研究内容についてもお話が聞ける機会をととても楽しみにしています。

研 究 題 目 : 漁業経営の持続性確保を目的とした漁業協同組合の
現代的意義と展望に関する経済研究

主 指 導 教 員 : 鳥居 享司 (鹿児島大学)

第一副指導教員: 佐久間 美明 (鹿児島大学)

第二副指導教員: 坂井 教郎 (鹿児島大学)



このたび、連合農学研究科に入学いたしました佐野玲央と申します。所属は、鹿児島大学の水産経営学研究室です。北海道出身の私にとって、鹿児島はかつて「遠い南国の都道府県の1つ」という位置付けでした。鹿児島大学入学から5年間、この地で数えきれないほど沢山の方々のお世話になり、今では「将来、研究を通じて恩返しをしたい」という唯一無二の場所になっています。

現在、漁業協同組合（漁協）の役割をテーマに研究を行っております。漁協は、「漁業者への直接の奉仕」を目的とするわが国唯一の組織であり、漁業者の経営を下支えする「漁村地域の中核的な組織」として位置付けられてきました。しかし、私の修士研究では、販売力の衰えや組合員への指導事業の中止といった「漁協の機能低下」が顕在化しつつあることが明らかになりました。そうしたなか、漁業者間では「漁協の存在意義の希薄化」が広がりつつあることも明らかになってきました。ただし、わが国全体の漁協の現代的な役割と課題、そしてその展望については、まだよく分かっていないのが現状です。漁業経営の持続性を確保するために、漁協はそもそも必要不可欠な組織なのか。必要な組織だとした場合、漁業経営の持続性確保にむけ、漁協が今後どのような役割を果たすべきか。以上の問題意識をもとに、漁協の現代的意義と展望を明らかにすることを目的として、現場の漁業関係者の方々と課題について一緒に考えながら、解決策を模索し続けていきます。

また、将来は、漁業現場の方々、周囲の方々から信頼され、「応援したい」と思っただけのような研究者になることを目指しています。そのために、「不器用ながらも地道にコツコツと、何事にも泥臭く頑張る」という自身の強みを最大限活かしながら、日々改善をしていきます。そして、大好きな研究や学びを続けることができる喜び、そうした環境や支えてくださる方々への感謝、鹿児島で学ぶ博士課程学生としての責任感を持ちながら、今の自分にできるベストを尽くし続けます。皆様、どうぞよろしくお願い申し上げます。

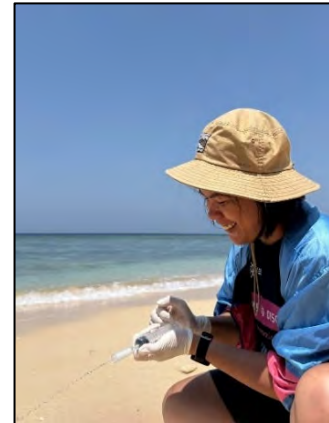
研 究 題 目 : 環境 DNA メタバーコーディング解析によるデータ
駆動型生態系マネジメント

Title of Research: Application of environmental DNA (eDNA)
metabarcoding to develop data-driven ecosystem-based management
strategies

主 指 導 教 員 : 梶田 忠 (琉球大学)

第一副指導教員: 鶴井 香織 (琉球大学)

第二副指導教員: 本村 浩之 (鹿児島大学)



Hi, I'm Marizka Juliano and I came from the place where the mountains meet the sea, Antique, Philippines. Growing up in an archipelagic country meant that I was exposed to the elements of nature early on. I was aware of the concepts of highlands to oceans and the importance of environmental stewardship way before I learned the technical definitions of these terms at school. Studying fisheries was an easy choice to make but definitely not an easy path to take.

Right after completing my Bachelor of Science degree in fisheries at the University of the Philippines Visayas, I worked with several projects focused on developing responsible and sustainable fishing practices in key marine biodiversity areas across the Philippines. I spent almost 7 years engaging fisherfolk communities and local governments towards the goal of implementing science-based management strategies for sustainable development. Most of it involved designing fish catch monitoring surveys, focus group discussions on fishery issues, conducting capacity building training for alternative livelihood to reduce fishing pressure, and developing strategies that allowed active participation of fisherfolks from data collection to policy adoption. These years taught me important life lessons and reinforced my commitment to devoting my life to becoming an effective resource manager, however it also made me realize that I am still severely lacking important skills.

To move forward, I decided to pursue my postgraduate studies in Europe after receiving the Erasmus Mundus joint master's degree scholarship for the International Master of Science in Marine Biological Resources (IMBRSea). I majored in Fisheries and Aquaculture following specialized tracks from Universiteit Gent (Belgium), Universidade do Algarve (Portugal), and Université Côte d'Azur (France). This program also allowed me to conduct my thesis for any research topic around the world through its wide network of research partners. I was able to secure a thesis topic under the supervision and mentorship of Prof. Kajita Tadashi to work on the formation of a global network to study mangrove ecosystem by environmental DNA (eDNA) metabarcoding at the Tropical Biosphere Research Center (TBRC), University of the Ryukyus. My thesis focused on generating baseline data for fish biodiversity of Japan's largest mangrove forest in Nakama River. I was able to receive a collaborative grant and traineeship from April 2024 to March 2025 at TBRC which allowed me to work on improving my molecular laboratory and bioinformatic skills through a series of workshops with international collaborators across Asia and analyzing samples from the priority sites of the Iriomote Wildlife Conservation Center.

My traineeship at TBRC inspired me to do my PhD at Kagoshima University's United Graduate School of Agricultural Sciences to dive deeper into eDNA research with the goal of developing a comprehensive biodiversity monitoring system for Iriomote Island, a UNESCO World Heritage site, that will be used to design effective data-driven ecosystem-based management strategies. I want to continue working on discovering new ways of addressing persistent socio-ecological problems through research that translates laboratory results to actionable solutions.

研 究 題 目 : 糸状菌食性線虫の生理的特性の解明と土壌病害抑制への利用

Title of Research: Understanding the Physiology of Fungivorous Nematodes for the Biological Control of Soil-Borne Pathogens

主 指 導 教 員 : 吉賀 豊司 (佐賀大学)

Advisory Professor : YOSHIGA Toyoshi (Saga Univ)

第一副指導教員 : 草場 基章 (佐賀大学)

First Vice-Advisory Professor : KUSABA Motoaki (Saga Univ)

第二副指導教員 : 畑 邦彦 (鹿児島大学)

Second Vice-Advisory Professor : HATA Kunihiko (Kagoshima Univ)



I am originally from Shanghai, China. In 2017, I came to Japan and studied Japanese in Tokyo for two years. Afterwards, I enrolled in Niigata Agro-Food University, where I encountered the concept of biological pesticides for the first time. This experience led me to realize the potential of environmentally friendly alternatives to chemical pesticides. Since then, my academic goal has been to develop a practical and sustainable biopesticide that contributes to safer agricultural practices.

Nematodes are often perceived negatively by the public due to their association with parasitism. However, many species are free-living and harmless to plants and humans. These lesser-known nematodes play vital roles in natural ecosystems and may hold untapped value in agriculture. I decided to pursue research on nematodes that could contribute positively to sustainable farming systems.

I chose to study at Saga University under the supervision of Professor Yoshiga Toyoshi, who is renowned for his work on entomopathogenic nematodes used in the biological control of insect pests. Under his guidance, I chose to a research direction—fungivorous nematodes in soil environments. These nematodes feed on fungal hyphae by piercing and absorbing their nutrients, thereby potentially suppressing soil-borne fungal pathogens.

During my master's course, I collected soil samples from various regions in Japan and successfully isolated 59 strains of fungivorous nematodes. Preliminary experiments revealed that several isolates demonstrated significant inhibitory effects on common fungal plant pathogens. These findings supported the idea that certain fungivorous nematodes could be developed as biological control agents.

As a doctoral student, my research will focus on further classification and evaluation of these promising isolations. I plan to use both morphological and molecular techniques to identify their species and determine their ecological characteristics. A crucial step will be assessing their safety in relation to crops, ensuring that none of the candidates pose harm to plants. This step is vital for transitioning from basic research to practical applications.

My long-term goal is to identify effective, non-pathogenic nematode that can be mass-reared and introduced into agricultural fields. By doing so, I hope to offer an innovative and ecologically sound solution to the growing problem of chemical pesticide overuse. Ultimately, I wish to contribute to the advancement of green agriculture through nematode-based biocontrol technologies.

ナンプンダ ジュニオ ジョゼ マテウス

Nampunda Junior J . M (Mozambique)

Title of research: Combined application of *Atriplex nummularia* with biochar for phytoremediation of cadmium-contaminated soils of agricultural regions in Japan

Advisory professor: Kondo Fumiyoshi (Saga University)

First Vice-Advisory Professor: Haraguchi Tomokazu (Saga University)

Second Vice-Advisory Professor: Sakai Kazuhito (Ryukyus University)



Warm greetings to all

My name is Nampunda Junior Jose Mateus, I am from Mozambique and I am currently dedicated to research in the area of sustainable recovery of contaminated soils, with a focus on phytoremediation. This is a topic that motivates me deeply, as it represents a crucial response to the challenges that many developing countries face with regard to food security, human health and environmental protection.

My academic interest is particularly focused on the use of plants adapted to extreme environmental conditions, such as salinity and drought, which can be used in ecological remediation strategies. I believe that uniting soil science with environmental sustainability can contribute significantly to restoring degraded agricultural areas.

In the future, I aspire to contribute to public policies and practical solutions that promote more resilient and sustainable agriculture in vulnerable contexts, such as my country. I intend to collaborate with research centers, universities, and local communities to transform technical knowledge into concrete improvements for soils and the people who depend on them.

In my free time, I enjoy watching and playing football, a passion that has been with me since childhood and helps me to maintain the balance between academic work and personal well-being. I am very excited to be part of this international scholarly community, and I hope to learn a lot, as well as share the experiences and values of my country with everyone.

研究題目：小規模食品事業者における HACCP システム構築の現状並びに問題点解決に関する研究

【鹿児島県の伝統的食品製造工場のHACCP構築の課題】

主指導教員：紙谷 喜則（鹿児島大学）

第一副指導教員：李 哉泫（鹿児島大学）

第二副指導教員：青柳 悠也（琉球大学）



はじめまして、2025 年 4 月、鹿児島大学連合農学研究科に入学しました、八反田淳一です。かねてより関心のあった HACCP システムに関する研究を深めるべく、この道を選びました。本研究は、「鹿児島県における伝統的食品製造業における HACCP システム導入の現状分析と、その促進に向けた戦略策定」を主題とします。

政府は 2025 年 1 月 10 日の閣僚会議において、農林水産物・食品の輸出促進に向け、輸出産地の稼ぐ力を強化するため、インバウンド消費の拡大と食品産業の海外展開を新たな柱として位置付けました。農林水産物・食品の輸出には HACCP システムの導入が必須です。2021 年 6 月 1 日からは、全ての食品製造事業者に対し HACCP に沿った衛生管理が義務付けられましたが、HACCP システムの導入は食品業界全体の喫緊の課題となっています。

既存の HACCP 導入支援策は、大企業を対象としたものが多く、中小企業、特に伝統的製法を守る事業者には必ずしも適合しません。本研究は、このミスマッチに着目し、鹿児島県の地域特性を踏まえた、より実践的な HACCP 導入促進モデルの構築を目指します。具体的には、HACCP システムの構築が遅れている鹿児島県の食品事業者が抱える問題、特に伝統的製法にこだわりを持つ特産品製造工場における HACCP 導入状況とその阻害要因を分析し、HACCP 構築が可能な手法開発と社会的問題点の解決を目指します。

本研究では、既存データ分析、アンケート調査、聞き取り調査、統計分析、半構造化インタビュー等の手法を駆使し、多角的に HACCP 導入促進のための戦略を策定します。最終的には、鹿児島県特産品製造工場における HACCP 導入率の向上と食品安全の確保に繋がる成果を目指し、地域産業の活性化と消費者の信頼向上に貢献したいと考えています。

これから 3 年間を通して研究者として必要な資質を磨き上げ、地域社会に貢献できるよう尽力してまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

氏 名 ^{ふじた たくみ} 藤田 匠 (日本)

研 究 題 目 : 昆虫飼料が魚の成長に与える生理・生態的研究

主 指 導 教 員 : 辻 瑞樹 (琉球大学)

第一副指導教員: 鶴井 香織 (琉球大学)

第二副指導教員: 大塚 彰 (鹿児島大学)



はじめまして。琉球大学昆虫学研究室に配属されました藤田匠と申します。

学部と修士は南九州大学（宮崎県）で学び、特定外来雑草の生物防除（雑草に共生している糸状菌を用いた防除）について研究に取り組みました。その後は社会人として国内と海外（ブルネイ）で研究職として11年間働き、この先も「研究」を仕事にしていくには「博士」の学位が必要と考え、この度社会人学生として入学いたしました。

現在の仕事は自身で創業した会社で「昆虫の総合的な産業利用」をテーマに、食用昆虫の養殖と昆虫食の製造・販売に関する事業に取り組んでいます。また、NPO 法人食用昆虫科学研究会の理事としても活動し、昆虫食の教育的な普及・啓蒙活動にも取り組んでいます。

連大では昆虫を水産飼料として利用するための安全性（魚への影響）や、昆虫が持つ栄養成分（機能性成分の探索）といった、複数の学問分野を横断した科学的な検証に取り組めます。

世界では魚の消費量が増加しており、養殖漁業の生産量が増加しています（漁獲漁業はほぼ一定）。

日本の主な養殖産業魚種は肉食魚であり、魚で魚を育てる従来の養殖方法は持続可能と言えないことから、魚粉をなるべく使用しない新たな水産飼料の開発が求められています。

昆虫においては地球上に100万種近く存在すると言われていますが、一部の種を除き、そのほとんどは害虫として扱われ、多額のコストを払って排除（駆除）しようとする活動が行われてきました。

しかし、近年は昆虫（外来種を含む）の生態や機能性を詳しく調べ、人間社会に役立てようとする動きに変わりつつあります。実際に私が研究材料に選定した昆虫も沖縄県では重点対策種に指定されている外来の昆虫になりますが、先行研究によって様々な栄養成分を含んでいることが報告されているため、外来昆虫を利活用した水産飼料の可能性について検証していきます。

将来的にはオリジナル飼料を開発し、特許化や商品販売を目指したいです。

どうぞよろしくお願いいたします。

ふりがな 氏名 Name よしおか 吉岡 しゅうや 秀陽 (国籍) (Nationality) 日本

研究題目：シロオビアゲハのベイツ擬態と表現型多型維持機構の解明

主指導教員：辻 瑞樹（琉球大学）

第一副指導教員：鶴井 香織（琉球大学）

第二副指導教員：坂巻 祥孝（鹿児島大学）



初めまして、今年度より鹿児島大学大学院連合農学研究科に入学いたしました、吉岡秀陽です。現在、琉球大学昆虫学研究室に所属しております。高校卒業後、愛知県から沖縄県に渡り、1年の休学を挟みながら、沖縄生活7年目を迎えました。元々昆虫採集を趣味としており、学部時代には沖縄周辺の離島や本州の山奥に赴き、チョウやガの採集をしておりました。

私の専門は進化生物学、行動生態学で、研究対象はシロオビアゲハという、国内では沖縄のみに分布するアゲハチョウです。シロオビアゲハは、メスの一部のみが別種の毒蝶に擬態しており、擬態するメス（擬態型メス）と擬態しないメス（非擬態型メス）が種内で共存する、という特徴を持っています。擬態を行うチョウは珍しくありませんが、捕食されやすいはずの非擬態型が同時に見られる種はあまり多くありません。私は、“なぜ生存に不利なはずの非擬態型メスが擬態型メスと共存できるのか？”という自然選択の謎をテーマに、学部時代から研究を続けております。

学部研究では、擬態型メスがオスにモテないため、交尾する機会を失うという古典的仮説の検証に挑戦しました。琉球列島4島でシロオビアゲハのメスを400頭以上採集し、腹部に残された精包（オスが交尾時にメスの腹部に注入する物質）の数から交尾頻度を計測しました。交尾頻度を型間比較した結果、擬態型メスは非擬態型メスと同じ程度交尾することができていることが明らかとなりました。また、修士研究ではシロオビアゲハの擬態遺伝子型頻度から各型のメスへの捕食圧を評価する、という新たなアプローチを試みました。博士課程では、上記の研究をより深めていくため、フィールドでのサンプリングや行動学実験を重ねていく所存です。

3年間という限られた時間の中、研究者としてのスキルとキャリアを積み、そして自律的な人間として成長できるよう、日々精進していきたいと存じます。どうぞよろしくお願いいたします。

◇学生の研究活動

2024年度在学生の学会発表等

★生物生産科学専攻(熱帯資源・植物生産科学連合講座)★

●著書・論文等

氏 名	著者名(共著の場合は全員の氏名、ファーストオーサーに*印) authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻(号)、頁 vol./page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、紀要、その他 paper/book/review/bulletin/oth ers
ネフトウ イスラムハージヤ	Neptu Islamy Raharja*, Md. Amzad Hossain, Hikaru Akamine, De-Xing Hou.	Population of Endophyte an Rhizosphere Bacteria Isolated from different Curcuma species	Applied Ecology and Enviromental Research	23(2): 2109-2120		paper
ネフトウ イスラムハージヤ	Neptu Islamy Raharja*, Md. Amzad Hossain, Hikaru Akamine, De-Xing Hou	Microbial Population In Curcuma Species at Different Growth Stages	Applied Ecology and Enviromental Research			Paper
ラッタナーヤカ ムティヤンセーラゲ サンハット ルワン チャアマ	Chamara, R.M.S.R*, Miyoshi, K., Yukawa, T., Asai, N., Ogura-Tsujita, Y.	Orchid Mycorrhizal Association of Cultivated Dendrobium Hybrid and Their Role in Seed Germination and Seedling Growth	Microorganisms	12, 1176	10-Jun-24	Paper
ラッタナーヤカ ムティヤンセーラゲ サンハット ルワン チャアマ	Chamara, R.M.S.R*, Rammitsu, K., Minobe, M., Kinoshita, A., Kotaka, N., Yukawa, T., & Ogura-Tsujita, Y.	Mycorrhizal fungi of Phalaenopsis japonica (Orchidaceae) and their role in seed germination and seedling development	Diversity	16, 218	3-Apr-24	Paper
イブラヒム ソウ	Ibrahim Soe	Assessing Stress Tolerance of SUBI and DRO1 Introgression Lines under Flooding and Drought Conditions at Different Growth Stages	Phyton International Journal of Experimental Botany	94/2/304-316	6th March, 2025	Paper
ムハンマド ムクタル フサイン	Md Mukhtar Hossain*; Shibasaki Yuki; Fumiuyuki Goto	Enhancement of Growth and Quality of Winter Watermelon Using LED Supplementary Lighting	Horticulturae	Horticulturae 2025, 11, 262	1-Mar-25	

●口頭発表・ポスター発表・講演

氏 名	共同研究者氏名(全員の氏名、口頭・ポスター発表者に*印) members(*presenter)	口頭・ポスター発表題目 oral/poster program title	開催期間(西暦) period	開催地: 国名、都市名 place:country.city	口頭発表・ポスター発表oral/poster
ラッタナーヤカ ムティヤンセーラゲ サンハット ルワン チャアマ	Chamara R. M.S.R*, K. Miyoshi, T. Yukawa, Y. Asai, C. K Beneragama and Ogura-Tsujit	Mycorrhizal Colonization and Fungal Diversity in Dendrobium 'Stardust Firebird' (Orchidaceae).	February 24th to March 10th 2024	Tainan, Taiwan	Oral
チェ ジュヨン	Ju-Young Choi*, Young-Hwan Ju, Seong-Woo Cho, Jae-Buhm Chun, Sun-Hee Woo and Jun-Ichi Sakagami	Enhancement of drought resistance by hydropriming in rice plants	9~10th May	seoul	oral
朱 映煥	*Younghwan Ju, Juyoung Choi, Sungcho Yun, Jun-Ichi sakagami	Physiological and proteomics changes by heat stress on rice priming at different growth stage.	2024.05.9 ~ 2024.05.10	Korea, Seoul	Oral
山本 士温	*山本士温(鹿大・院・連農), 下村彩(佐大・農), 高上馬希重(北医大・薬), 鈴木章弘(佐大・農)	根粒菌接種によるカンゾウのGL生産増加のメカニズム	2024/05/25~26	沖縄県琉球大学	ポスター添削
山本 士温	*山本士温(鹿大・院・連農), 下村彩(佐大・農), 高上馬希重(北医大・薬), 鈴木章弘(佐大・農)	共生初期のカンゾウにおける根粒菌接種の影響および根粒菌J8の感染様式の観察	2024/08/28~30	高知県、高知大学	ポスター発表
ラエル チェブコエチ	Rael Chepkoech, Isao Akagi, Amzad Hossain, Jun-Ichi Sakagami	Combined effects and avoidant mechanism of excess iron under excessive light energy on NERICA4 rice cultivar	18-21 september,2024	Kobe Fashion Mart/Japan/Kobe	poster
ボ ティ エンレー	Presenter	Effects of storage temperature and period on the amino acid metabolism of the new citrus cultivar 'Sagakash No. 35' ('Nijumaru')	2024/11/04-2024/11/05	Senbaru, Nishihara-cho, Nakagami-gun, Okinawa, 903-0213 Japan.	Poster
ボ ティ エンレー	member	低温貯蔵下における'佐賀果試35号'の抗酸化活性について	24/11/03-24/11/05	Senbaru, Nishihara-cho, Nakagami-gun, Okinawa, 903-0213 Japan	poster
ボ ティ エンレー	presenter	Effects of storage period and temperature on quality of the new citrus cultivar 'Sagakash No. 35' ('Nijumaru') released from Saga Prefecture, Japan	2024/11/11-2024/11/15	ICC Jeju, Jeju Island, South Korea	Oral
ムハンマド ムクタル フサイン	Md Mukhtar Hossain*; Shibasaki Yuki; Fumiuyuki Goto	Improving Growth and Quality of Winter Watermelon using LED Supplementary Lighting	Fall 2024	Okinawa	Oral

★生物生産科学専攻(動物資源生産科学連合講座)★

●著書・論文等

氏 名	著者名(共著の場合は全員の氏名、ファーストオーサーに*印) authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻(号)、頁 vol./page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、紀要、その他 paper/book/review/bulletin/oth ers
エムディ スロナビ イスラム	Md Nuronnabi Islam, Fumio Ebara, Toshihiro Konno, Hideki Tatemoto, Ken-ichi Yamanaka	Melatonin improves the in vitro growth of bovine oocytes collected from early antral follicles by maintaining oocyte-cumulus cell communication	Reproductive Medicine and Biology	Vol 24, Issue 1,e12629	6-Jan-25	paper

●口頭発表・ポスター発表・講演

氏 名	共同研究者氏名(全員の氏名、口頭・ポスター発表者に*印) members(*presenter)	口頭・ポスター発表題目 oral/poster program title	開催期間(西暦) period	開催地: 国名、都市名 place:country.city	口頭発表・ポスター発表oral/poster
エムディ スロナビ イスラム	Md Nuronnabi Islam, Ken-ichi Yamanaka	Melatonin attenuates endoplasmic reticulum stress during in vitro growth of bovine oocytes	2024	Nagoya University, Japan	Poster
坂本 綾香	*坂本綾香・佐々木猛・平田直也・八木利之・早川康之・川口真一・江原史雄	牛床敷料へのPAdeCSの添加が敷料の性能および牛の行動に及ぼす影響	2024. 10.26-27	日本、熊本県	口頭発表

★生物生産科学専攻(地域・国際資源経済学連合講座)★

●著書・論文等

氏 名	著者名(共著の場合は全員の氏名、ファーストオーダーに*印) authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻(号)、頁 vol./page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、紀要、その他 paper/book/review/bulletin/oth ers
ケレ グロリサ	Kere Glorisa, TORII Takashi	Current status and challenges of Marine Protected Area Initiative in Choiseul, Solomon Islands: A case study evaluation between Zimaa and Parama	Japanese Journal of Fisheries Economics	page 139-149, Vol.64 No.2 and Vol. 65 No.1		Paper
ケレ グロリサ	Kere Glorisa, TORII Takashi	Utilization of Traditional Knowledge in Coastal Fisheries: Case Study of Choiseul, Solomon Islands.	The Journal of Island Studies	26.1		Paper
チャン ティトゥイ	Tran Thi Thu Thuy	ベトナムにおける所得格差一省レベルのデータを用いた回帰分析に基づく分解方法一	農業市場研究	33(1), 36-43	2024年6月	論文
チャン ティトゥイ	Tran Thi Thu Thuy*, Tsuji Kazunari, Fujimura Miho	Understanding Household Income Inequality: A Regression-Based Decomposition Study	Sustainability	16(20), 9010	2024年10月	論文
刀禰 一幸	刀禰一幸*、佐野雅昭、久賀みず保	日本の小売業におけるイカ加工製品の販売実態～POSデータを利用して～	漁業経済研究	69巻(1)	2025年3月	論文

●口頭発表・ポスター発表・講演

氏 名	共同研究者氏名(全員の氏名、口頭・ポスター発表者に*印) members(*presenter)	口頭・ポスター発表題目 oral/poster program title	開催期間(西暦) period	開催地:国名、都市名 place:country,city	口頭発表・ポスター発表oral/poster
新美 達也	*柳澤雅之、藤倉哲郎、小川有子、渋谷由紀	紅河デルタ村落の社会経済構造の変容一2015年バコック村一集落の網羅的調査結果から一	2024年11月9日	京都産業大学:京都市	口頭発表
新美 達也		技能実習生の貧困一出身地生計費調査から一	2025年1月12日	沖縄大学:那覇市	口頭発表
新美 達也		Changes in The Structure of Agricultural Production in Rural Villages in the North and South Delta of Vietnam Over 30 Years	2025年3月7一8日	佐賀大学:佐賀市	口頭発表
ケレ グロリサ	Presenter	The Importance of Preserving Traditional Knowledge of Choiseul Coastal Fishing Communities: A local Indigenous Perspective.	Jun-23	Tokyo, Japan	Oral presentation
チャン ティトゥイ	Tran Thi Thu Thuy*, Tsuji Kazunari, Fujimura Miho	Understanding Household Income Inequality in Rural Vietnam: A Regression-Based Decomposition Study.	2024年9月8日	日本、宮崎県	口頭発表
刀禰 一幸	刀禰一幸、佐野雅昭、久賀みず保	日本のイカ輸入における変化の実態一2015年から2022年を対象に一	2024年12月19日	日本、北海道札幌市	口頭発表
刀禰 一幸	刀禰一幸、佐野雅昭、久賀みず保	不漁に対応するためのいか産業の変化の実態と課題を把握する取り組み	2025年3月26日	日本、神奈川県相模原市	口頭発表
刀禰 一幸	刀禰一幸、佐野雅昭、久賀みず保	日本の小売業におけるイカ製品販売の実態一POSデータを利用して一	2024年6月16日	日本、山口県下関市	口頭発表
ハッピー シェハ ムツサ	Mussa Happy* and Torii Takashi	Navigating Challenges and Seizing Opportunities in the Fish Value Chain in Malawi	2024.11.9 - 2024.11.10	Japan, Tokyo	Oral

★応用生命科学専攻(生物機能化学連合講座)★

●著書・論文等

氏 名	著者名(共著の場合は全員の氏名、ファーストオーダーに*印) authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻(号)、頁 vol./page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、紀要、その他 paper/book/review/bulletin/oth ers
山之内 博紀	*Hiroki Yamanouchi, Yuji Minami, Katsuko Kajiya	Evaluation and validation of angiotensin-converting enzyme inhibitory activity of moringa oleifera, quercetin, and isoquercetin: A comparative study of fluorescence and absorbance measurement	Food Research International	202, 115768	2025/1/23	論文
水野 裕一	*Yuichi Mizuno, Takashi Yoshimura, Kazutaka Sawada, Keisuke Tsuge, Yukio Nagano, Yumiko Yoshizaki, Masatoshi Goto, Genta Kobayashi	Dynamics of the microbiome and volatile organic compounds during fermentation and aging of soy sauce	Journal of Bioscience and Bioengineering	138, 522-532	2024.12	論文
水野 裕一	*Yuichi Mizuno, Takashi Yoshimura, Kazutaka Sawada, Keisuke Tsuge, Yukio Nagano, Yumiko Yoshizaki, Masatoshi Goto, and Genta Kobayashi	Crucial role of early addition of Wickerhamiella versatilis in enhancing aroma formation during soy sauce fermentation	Journal of Bioscience and Bioengineering			論文
浦川 大吾	Daigo Urakawa* 1, Yuki Shioiridani 2, Shinya Igata 2, De-Xing Hou 1 2, Kozue Sakao 1 2	Comparative Analysis of Acetylated Flavonoids' Chemopreventive Effects in Different Cancer Cell Lines	International Journal of Molecular Sciences		2024/7/13	論文
浦川 大吾	Kozue Sakao 1,2*, Shihomi Hamamoto 2, Daigo Urakawa 1, Ziyu He 1, De-Xing Hou 1,2	Anticancer Activity and Molecular Mechanisms of Acetylated and Methylated Quercetin in Human Breast Cancer Cells	molecules		5月20日	論文
深田 峻介	Tatsuhide Miwa*, Kosuke Sato, Daiki Osada, Kazumi Nimura, Aki Kato, Keisuke Tsuge, Ryosuke Fukada, Kota Yokoshima, Takahiro Ishii, Yukimasa Yamagishi, Takashi Kamada	Chemical Compositions of the Marine Red Alga Laurencia composita Collected in Japan	Chemistry and Biodiversity	e202403326		論文

●口頭発表・ポスター発表・講演

氏 名	共同研究者氏名(全員の氏名、口頭・ポスター発表者に*印) members(*presenter)	口頭・ポスター発表題目 oral/poster program title	開催期間(西暦) period	開催地:国名、都市名 place:country,city	口頭発表・ポスター発表oral/poster
山之内 博紀	*山之内博紀、南雄二、加治屋勝子	鹿児島県産モリンガのアンジオテンシン変換酵素阻害活性評価におけるin vitro測定法の影響	2025	札幌	ポスター発表
山之内 博紀	*山之内博紀、南雄二、加治屋勝子	国産モリンガのACE阻害活性物質探索と測定法の検討	2025	那覇	ポスター発表
戴 鳳凰	戴鳳凰、江原史雄、稲葉繁樹、近藤文義、永尾晃治、北垣浩志	麹糖セラミドが糞便の状態に 及ぼす影響のin vitro解析	2024/5/25	福岡市	口頭発表
水野 裕一	*水野裕一、吉村臣史、澤田和敬、柘植圭介、永野幸生、吉崎由美子、後藤正利、小林元太	醤油発酵・熟成工程における揮発性成分プロファイルの季節的変動	2024/8/29～8/31	名古屋市	口頭発表
水野 裕一	*水野裕一、吉村臣史、澤田和敬、柘植圭介、永野幸生、吉崎由美子、後藤正利、小林元太	美製醤油油詰味の微生物叢と揮発性有機化合物の解析	2024/9/19～9/20	佐賀市	口頭発表
水野 裕一	*水野裕一、吉村臣史、澤田和敬、柘植圭介、永野幸生、吉崎由美子、後藤正利、小林元太	醤油の発酵熟成過程においてWickerhamiella versatilisの早期添加が香気形成に及ぼす影響	2025/3/4～3/8	札幌市	ポスター発表
野田 涼風	吉崎由美子、奥津果優、二神泰基、玉置尚徳、高峯和則	製麹時の異なる蒸米水分は黒麹菌および白麹菌の酵素活性および4-ピニルグアイアコール生成に顕著に影響を与える	1)2024年8月21日～25日 2)2024年12月10日 3)2024年12月11日	1)中国、ハルビン 2)日本、鹿児島県 3)日本、鹿児島県	
岩永 卓也	*岩永卓也・吉田和広・木村圭・野口浩介	有明海湾奥部における秋季ノリ色落ち原因珪藻Chaetoceros属の出現動態および種解析	2024	日本、松江	口頭発表
岩永 卓也	* 岩永卓也・太田洋志・野口浩介・木村圭	有明海湾奥部におけるAkashiwo sanguineaのブルームの発生要因と海洋構造	2024	日本、東京	口頭発表
岩永 卓也	* 岩永卓也・吉田和広・木村圭・野口浩介	有明海湾奥部における秋季ノリ色落ち原因珪藻Chaetoceros属ブルームの種解析および環境要因との関係性	2025	日本、神奈川	口頭発表
中島 菜々子	Nakashima,Nanako*; Yoshida,Kazuhiro; Tomaru,Yuji; Kimura,Kei	Detection of DNA molecules associated with DNA viruses infectedto the diatom Chaetoceros tenuissimus	2024年4月14日～18日	北海道(札幌)	口頭発表
中島 菜々子	中島菜々子*, 吉田和広, 外丸裕司, 木村圭	珪藻Chaetoceros tenuissimus感染DNAウイルスと共存するサテライトウイルス様DNA因子の相互作用	2024年10月19日～20日	茨城県(筑波)	ポスター発表
中島 菜々子	中島 菜々子*, 吉田 和広, 外丸 裕司, 木村 圭	海洋珪藻Chaetoceros tenuissimusに感染するウイルスに付随するサテライトウイルス様DNA因子の性状解析	2024年10月28日～31日	広島県(広島市)	ポスター発表
平松 健太郎	平松 健太郎*, 森 一樹, 門岡 千尋, 奥津 果優, 吉崎 由美子, 高峯 和則, 田代 康介, 後藤 正利, 玉置 尚徳, 二神 泰基	鏝節カビAspergillus chevalieriの生活環境が変化する現象の解析	2024年9月8日～10日	日本・東京	口頭発表
平松 健太郎	平松 健太郎*, 門岡 千尋, 奥津 果優, 吉崎 由美子, 高峯 和則, 二神 泰基, 玉置 尚徳	イオンビームにより取得した黒麹菌のクエン酸低生産株BM40の解析	2024年9月27日～29日	日本・福岡	ポスター発表
平松 健太郎	平松健太郎*, 森一樹, 門岡千尋, 奥津果優, 吉崎由美子, 高峯和則, 田代康介, 後藤正利, 玉置尚徳, 二神泰基	鏝節カビAspergillus chevalieriの生活環境が変化する現象の解析	2024年11月3日～4日	日本・沖縄	ポスター発表
平松 健太郎	平松 健太郎*, 森 一樹, 門岡 千尋, 奥津 果優, 吉崎 由美子, 高峯 和則, 田代 康介, 後藤 正利, 玉置 尚徳, 二神 泰基	鏝節カビAspergillus chevalieri のテオモルフ株とアナモルフ株の表現型の解析	2025年3月4日～8日	日本・北海道	ポスター発表
深田 峻介	Ryosuke Fukada*, Keisuke Nishikawa, Kazumi Nimura, Iori Oshima, Shinobu Takizawa, Yoshiki Morimoto, Yukimasa Yamagishi, Norio Kikuchi, Takahiro Ishii, Takashi Kamada	New antifouling brominated diterpenes from Japanese red alga genus Laurencia	2024年 4月14日～18日	北海道札幌市	ポスター発表

★応用生命科学専攻(食品機能科学連合講座)★

●著書・論文等

氏 名	著者名(共著の場合は全員の氏名、ファーストオーサーに*印) authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻(号)、頁 vol./page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、紀要、その他 paper/book/review/bulletin/others
大江 萌那	Moena Oe*, Yonathan Asikin, Fumimasa Mitsube, Yasuyo Sekiyama, Kensaku Takara, Koji Wada	Physicochemical, Carotenoid, Metabolite, and Volatile Organic Compound Profiling of Okinawan Shikuwasha (Citrus depressa Hayata) and Calamansi (C. microcarpa Bunge)	Appl. Sci.	14(15), 6746	2024	
大江 萌那	Moena Oe*, Yonathan Asikin, Misaki Kashima, Masashi Yamamoto, Fumimasa Mitsube, Shu-Yen Lin, Kensaku Takara, Koji Wada	3) Genetic Characteristics and Volatile Organic Compounds of Leaves and Fruit Edible Parts of Citrus depressa Hayata from Different Geographic Origins	Horticulturae	10(9), 939	2024	
松永 将伍	*Shogo Matsunaga, Satoru Fukagawa, Kiriko Nakamura, Akira Ohtsuka, Daichi Ijiri	Effect of a Mixed Fermented Loquat Leaf Tea By-Product on the Growth Performance and Meat Quality of Tsushima-Jidori Crossbred Chicken	The Journal of Poultry Science	61巻、jpsa.2024024	2024年10月25日	論文
ハッタラピントホーン アリサ	Alisa Pattarapitporn*, Seiji Noma, Wannaporn Klangpetch, Mikihide Demura, Nobuyuki Hayashi	Extraction of citrus pectin using pressurized carbon dioxide and production of its oligosaccharides	Food Bioscience	57, 103584	5-Jan-24	Paper
ハッタラピントホーン アリサ	Alisa Pattarapitporn*, Mikihide Demura, Wannaporn Klangpetch, Seiji Noma	Pectin Extraction from Citrus paradisi Using Pressurized CO2 in Combination with Citric Acid and Citrate Buffer	Food and Bioprocess Technology	18, 1-17	6-Jan-25	Paper

●口頭発表・ポスター発表・講演

氏 名	共同研究者氏名(全員の氏名、口頭・ポスター発表者に*印) members(*presenter)	口頭・ポスター発表題目 oral/poster program title	開催期間(西暦) period	開催地:国名、都市名 place:country,city	口頭発表・ポスター発表oral/poster
大江 萌那	大江萌那*, ヨナタンアシキン, 新垣江利子, 笠松久美, 堀内政宏, 棚原尚哉, 高良健作, 和田浩二	ヘチマ (<i>Luffa cylindrica</i>) の加熱調理により生成する特徴香気成分の分析	2021	オンライン開催	口頭発表
大江 萌那	Moena Oe*, Yonathan Asikin, Masashi Yamamoto, Fumimasa Mitsube, Shu-Yen Lin, Kensaku Takara, Koji Wada	12) Genetic Characteristics and Volatile Aroma Compounds of Leaf and Fruit Edible Part of Citrus depressa from Kagoshima, Okinawa.	2024	バンコク(タイ)	口頭発表
平川 智章	*Tomoaki Hirakawa, Megumi Taniuchi, Kiko Yoshitake, Yoko Iguchi, Takeshi Uemura, Tadayuki Tsujita	F-E2-related factor 1 suppresses the expression of a spermine oxidase and the production of highly reactive acrolein	2024年8月25-30日	神戸	口頭発表
油屋 和	*油屋和、丸岡早紀、室井由起子、杉元康志、渡邊啓一	分離大豆タンパク質エマルジョンゲルの構造と物性に及ぼす油脂中の脂肪酸組成の影響	2024.9.6-8	日本、大阪	口頭発表
ハッタラピットポーニ アリサ	Alisa Pattarapisitporn*, Seiji Noma	A novel method for pectin extraction from grapefruit using carbonate mineralization	June, 29th 2024	Japan, Fukuoka	Poster
ハッタラピットポーニ アリサ	Alisa Pattarapisitporn*, Seiji Noma	Extraction and characterization of pectin extracted from citrus under pressurized carbon dioxide condition	August 29th (Thu.)—31th(Sat.), 2024	Japan, Nagoya	Poster
エカナヤクムディヤンセラゲ ニ シャディ ハンサニ エカナヤク	Ekanayake H*, Sugimoto H., and Horitani M.	Elucidation of Characteristic Cold-Adaptation Mechanism of Pyruvate Kinase from Psychrophilic Bacteria by X-ray Crystallography	2024	Kyoto, Japan	Poster presentation
折田 幸	Tsukasa Orita*, Kozue Sakao, De-Xing Hou	Green tea extract (GTE) prepared with daily infusion style prevents dyslipidemia by targeting intestinal lipid absorption, hepatic lipid metabolism and gut microbiota composition	2024.11.23	オンライン	口頭発表
折田 幸	Tsukasa Orita*, Satoshi Chogahara, Kozue Sakao, De-Xing Hou	Daily intake of green tea extract (GTE) prevents dyslipidemia by targeting lipid excretion, fatty acid oxidation and gut microbiota	September 24-28, 2024	日本、鹿児島県	口頭発表
片淵 歩美	*片淵歩美・石橋果歩・友永省三・島元紗希・石原慎矢・大塚彰・井原大地	メタボローム解析による暑熱感作誘導性の骨格筋イミダゾールシベプチドの減少機構の解明	2024年9月19日	日本、京都市	口頭発表
兵頭 駿希	*兵頭 駿希、山手 沙月、Xiaoling Chen、小松 正治、塩崎 一弘	リボソームタンパク質との相互作用を介した 核局在型Neu4 の細胞増殖/細胞死制御機構	2024年10月	横浜	口頭発表
兵頭 駿希	*兵頭 駿希、山手 沙月、Xiaoling Chen、小松 正治、塩崎 一弘	核小体局在型シアリダーゼNeu4とRPL11およびRPL5の相互作用による細胞増殖調節機構の解明	2024年11月	福岡	ポスター発表

★応用生命科学専攻(先端応用生命科学連合講座)★

●著書・論文等

氏 名	著者名(共著の場合は全員の氏名、ファーストオーダーに*印) authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻(号)、頁 vol./page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、紀要、その他 paper/book/review/bulletin/others
何 子煜	Ziyu He*, Takuhiro Uto, Shunsuke Tanigawa, Kozue Sakao, Takuma Kumamoto, Kun Xie, Xuchi Pan, Shusong Wu, Yili Yang, Masaharu Komatsu, De-Xing Hou	Fisetin is a selective adenosine triphosphate-competitive inhibitor for mitogen-activated protein kinase kinase 4 to inhibit lipopolysaccharide-stimulated inflammation	BioFactors	51(1): e2108	2025.1~2	
何 子煜	Ziyu He *, Xuchi Pan, Kun Xie, Kozue Sakao, Jihua Chen, Masaharu Komatsu, De-Xing Hou	The Effects of Fisetin on Gene Expression Profile and Cellular Metabolism in IFN- γ -Stimulated Macrophage Inflammation	Antioxidants	14, 182	2025.2	
ミヤットユー サン	Myat Htoo San*, Yoshio Kawamura, Kei Kimura, Eranga Pawani Witharana, Takeshi Shimogiri, Eiji Fujiyoshi, Yukio Nagano	Gene tree conflict in chloroplast-based phylogenies in Pyropia species	Phycological Research	https://doi.org/10.1111/1/pre.12576		paper
ミヤットユー サン	Eranga Pawani Witharana*, Takaya Iwasaki, Myat Htoo San, Nadeeka U. Jayawardana, Nobuhiro Kotoda, Masashi Yamamoto & Yukio Nagano	Subfamily evolution analysis using nuclear and chloroplast data from the same reads	Scientific Reports	Scientific Reports volume 15, Article number: 687 (2025)	3-Jan-25	paper
津久井 慶	Kei Tsukui*, Masamitsu Suzuki, Miyu Amma, Yoshihiro Tokudome	Synergistic effect of cerium chloride and calcium chloride alters calcium signaling in keratinocytes to promote epidermal differentiation	Bioscience, Biotechnology, and Biochemistry	88(12), 1432-1441	Sep-24	Paper
津久井 慶	Satoshi Mizuno*, Makiko Takabayashi, Hiroko Makihara, Kazuhiro Ogal, Kei Tsukui, Yuriko Ito, Takahiro Kawakami, Yusuke Hara, Arimi Fujita, Yoshihiro Tokudome, Tomoko Akase, Yukio Kato, Tsutomu Shimada, Yoshimichi Sai	Effect of changes in skin properties due to diabetes mellitus on the titration period of transdermal fentanyl: single-center retrospective study and diabetic animal model study	Journal of Pharmaceutical Health Care and Sciences	10(1), 80	Dec-24	Paper
山田 剛暉	*Sudarma Bogahawaththa, Megumi Hara, Takuma Furukawa, Chiharu Iwasaka, Takeshi Sawada, Goki Yamada, Mikiko Tokiya, Kyoko Kitagawa, Yasunobu Miyake, Mizuho Aoki Kido, Yoshio Hirota, Akiko Matsumoto	Asian Flush Gene Variant Enhances Cellular Immunogenicity of COVID-19 Vaccine: Prospective Observation in the Japanese General Population	vaccines	12, 1015	5-Sep-24	

●口頭発表・ポスター発表・講演

氏 名	共同研究者氏名(全員の氏名、口頭・ポスター発表者に*印) members(*presenter)	口頭・ポスター発表題目 oral/poster program title	開催期間(西暦) period	開催地: 国名、都市名 place:country,city	口頭発表・ポスター発表oral/poster
何 子煜	He Ziyu *	Fisetin is a selective ATP-competitive MKK4 inhibitor to suppress lipopolysaccharide-stimulated inflammation	2024年9月	日本 鹿児島市	口頭発表
何 子煜	Ziyu He *, Xuchi Pan, Kun Xie, Kozue Sakao, Jihua Chen, De-Xing Hou	Fisetin targets Jak1/Jak2-STAT1-IRF1 axis and modulates cellular metabolism to attenuate IFN- γ -stimulated macrophages inflammation	2024年9月	日本 鹿児島市	ポスター発表
何 子煜	Ziyu He *, Xuchi Pan, Kun Xie, Kozue Sakao, De-Xing Hou	Fisetin targets JAK1/2-STAT1-IRF1 axis and cellular metabolism to attenuate IFN- γ -stimulated macrophages inflammation	2024年11月	日本 福岡市	ポスター発表
平田 風子	平田 風子*, 水谷 治、平良 東紀、上地 敬子	部位特異的変異導入による黒麹菌細胞壁多糖ニグラン合成酵素の機能解析	2024年9月8日～10日	日本、東京	口頭発表
平田 風子	平田風子*, 水谷治、平良東紀、上地敬子	部位特異的変異導入による黒麹菌細胞壁多糖ニグラン合成能の比較	2024年11月3日～4日	日本、沖縄	ポスター発表
ミヤト トー サン	Myat Htoo San*, Yukio Nagano, Yoshio Kawamura, Kei Kimura, Yukino Mizutani, Kazuhiro Yoshida, San San Aye, Thu Thu Min, Cherry Aung, Moe Moe Khaing	Exploring temperature-induced cellular alterations in <i>Pyropia vietnamensis</i> from Myanmar and <i>Pyropia yezoensis</i> from Japan: a comprehensive investigation via transcriptomic analysis and transmission electron microscopy	April 14-18, 2024	Hokkaido University, Sapporo, Japan	Poster
ミヤト トー サン	Myat Htoo San*, Yoshio Kawamura, Kei Kimura, Eranga Pawani Witharana, Takeshi Shimogiri, Eiji Fujiyoshi, Yukio Nagano	Gene tree conflict in chloroplast-based phylogenies in <i>Pyropia</i> species	2025 年 2 月 27 日 (木) ～ 2 月 28 日 (金)	琉球大学 農学部	poster
矢埜 紅音	*Akane Yato, Rio Asaka, Keiichi Watanabe, Masaki Horitani	Measurement of structural flexibility of enzymes using spin labeling-ESR	2024/6/24-2024/6/28	日本・京都	ポスター発表
矢埜 紅音	*矢埜紅音、淺野梨砂、中木戸誠、津本浩平、堀谷正樹	先端ESR法を用いたMtsAの金属イオン結合に伴う開閉ダイナミクス解析	2024/9/10-2024/9/12	日本・佐賀	口頭発表
矢埜 紅音	*矢埜紅音、浅香里緒、渡邊啓一、堀谷正樹	スピラベル-ESR法を利用した酵素の構造柔軟性の実測	2024/9/13-2024/9/14	日本・大分	口頭発表
矢埜 紅音	*矢埜紅音、浅香里緒、堀谷正樹	スピラベル-ESR法を利用した酵素の構造柔軟性の温度変化の実測	2024/11/2-2024/11/4	日本・福井	口頭発表
津久井 慶	水野智詞*, 榎原弘子、津久井慶、藤田有美、嶋田努、赤瀬智子、徳留嘉寛、崔吉道	角質層がフェンチル経皮バイオアベイラビリティの塗布部位差に与える影響	2024年5月	日本、神戸市	ポスター発表
津久井 慶	津久井 慶*, 鈴木 将光、安間 未有、徳留 嘉寛	塩化セリウムは正常ヒト表皮角化細胞のカルシウムシグナリングを変化させ細胞分化を促進する	2024年9月	日本、所沢市	口頭発表
津久井 慶	Satoshi Mizuno*, Tsutomu Shimada, Hiroko Makihara, Kei Tsukui, Arimi Fujita, Makiko Takabayashi, Takahiro Kawatani, Yusuke Hara, Yoshihiro Tokudome, Tomoko Akase, Yoshimichi Sai	Alteration in intercellular lipid composition of stratum corneum in Goto-Kakizaki rats: A model of type 2 diabetes with an increased fentanyl released ratio from the transdermal formulation	Sep-24	USA, Hawaii	Poster
津久井 慶	津久井 慶*, 佐野 愛子、上沖 和己、堂籠 究、川口 真一、徳留 嘉寛	らっきょうフルクタンは正常ヒト皮膚線維芽細胞の細胞外マトリックス生成を促進する	2025年3月	日本、札幌市	ポスター発表
山田 剛暉	*山田剛暉、平川 智章、北 穂乃、辻田 忠志	転写因子Nrf1の核移行制御機構の解析	2024年	日本、熊本	ポスター発表
山田 剛暉	*山田剛暉、平川智章、北穂乃、辻田忠志	転写因子Nrf1の核移行制御機構の解析	2024年	日本、福岡	ポスター発表
山田 剛暉	*山田剛暉、平川智章、北穂乃、辻田忠志	転写因子Nrf1の核移行制御機構の解析	2024年	日本、佐賀	口頭発表
浅尾 和弥	浅尾和弥*, 園田健登、川口真一、川添嘉徳	Thienopyridine誘導体の神経分化誘導能と蛍光特性	2024	日本、福岡市	口頭発表
浅尾 和弥	浅尾和弥*, 園田健登、川口真一、川添嘉徳	Thienopyridine誘導体の神経分化誘導能と蛍光特性	2024	日本、福岡市	ポスター発表
浅尾 和弥	浅尾和弥*, 園田健登、川口真一、川添嘉徳	蛍光分子thienopyridine誘導体の神経分化誘導能と蛍光の活用	2024	日本、佐賀市	ポスター発表
辻 さやか	Sayaka Tsuji*, Shigeki Ogai, Masakazu Fukuta, Hirosuke Oku, Hiroshi Sugimoto, Masaki Horitani	Structural basis of bifunctionality of mimosine synthase in plants	2024年6月24日-6月28日	京都	ポスター発表
辻 さやか	辻 さやか*, 大貝 茂希、福田 雅一、屋 宏典、杉本宏、堀谷 正樹	X線結晶構造から視る亜熱帯性植物ギンネムの生存戦略～ギンネム由来ミモンシ合成酵素はなぜミモンシ合成能を獲得できたのか？～	2024年9月19日-9月20日	佐賀	口頭発表
辻 さやか	辻 さやか*, 大貝 茂希、福田 雅一、屋 宏典、杉本宏、堀谷 正樹	2機能性システイン合成酵素におけるミモンシ生合成触媒能獲得の分子機構	2024年11月16日-11月17日	鳥取	ポスター発表
フイントン フ	フイントンフ	トルコギキョウの変異型F3' 5' H 遺伝子とDFR遺伝子の共発現によるシアニン系アントシアニンの蓄積	2024	沖縄	ポスター発表

★農水圏資源環境科学専攻(生命環境保全科学連合講座)★

●著書・論文等

氏 名	著者名(共著の場合は全員の氏名、ファーストオーダーに*印) authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻(号)、頁 vol./page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、紀要、その他 paper/book/review/bulletin/oth ers
サンタディグロム バラバン	SANTUDPROM Phacharapan	Objective Evaluation of Quality Change by Aging of Japanese Brewed Rice Vinegar (Kurozu) using Multichannel Taste Sensor and NIR	農業生産技術管理学会誌	第32巻第1号	2025年6月	論文
忠村 一毅	Kazuki Tadamura*, Atsushi Torada, Toyoshi Yoshiga	Evaluation of host status of garlic varieties for a plant-parasitic nematode, Ditylenchus destructor, by using in vitro inoculation	Plant Biotechnology	41巻(2号)、137-145	2024年6月18日	論文
プーピン タウン	*Puping Ta-oun, Toyoshi Yoshiga	Effects of insect odor cues and infective juvenile age on the host-seeking behavior of Steinernema siamkayai	Journal of Invertebrate Pathology	210./108280	12-Feb-25	paper
宗 祥史	*Makoto TOKUDA, Yoshifumi SO	Range expansion of Schizomyia castanopsisae Elsayed & Tokuda, 2018 (Diptera: Cecidomyiidae) outbreaks in the Izu Islands, Japan	THE PAN-PACIFIC ENTOMOLOGIST	100(4)	2024年12月31日	paper
宗 祥史	* 宗祥史、矢野文士、和智伸也、徳田 誠	(Dip.: Cecidomyiidae) 九州・沖縄地域におけるスタジイタマハエの新分布記	Pulex	No.103	2024年12月31日	論文
宗 祥史	* 宗祥史、奥園元晴、大塚彰、徳田 誠	(Col.: Carabidae) 佐賀県におけるフトアゴエグリゴミシンの初記録	Pulex	No.103	2024年12月31日	論文
比江島 尚真	Shoma Hiejima*, Yuka Watanabe, Shin Ugawa	Characteristics of bud endodormancy and physiology in Quercus acutissima seedlings growing in an environment with low chill availability	Journal of Forest Research		2024年11月28日	論文
比江島 尚真	Shoma Hiejima*, Hiroto Seino, Rico Hachisuka, Yuka Watanabe, Takakazu Matsuura, Izumi C. Mori, Shin Ugawa	Physiological and Biochemical Traits of Dormancy Release and Growth Resumption in Japanese Cedar in the Warm?Temperate Zone	Forest Science		2025年2月20日	論文
矢野 文士	*宗 祥史、矢野 文士、和智 伸也、徳田 誠	九州・沖縄地域におけるスタジイタマハエの新分布記録	PULEX 九州・沖縄昆虫研究会会報	103:1041-1047	2024年12月31日	論文

●口頭発表・ポスター発表・講演

氏 名	共同研究者氏名(全員の氏名、口頭・ポスター発表者(*印) members(*presenter)	口頭・ポスター発表題目 oral/poster program title	開催期間(西暦) period	開催地: 国名、都市名 place:country,city	口頭発表・ポスター発表oral/poster
プーピン タウン	*Puping Ta-oun, Toyoshi Yoshiga	The influence of insect associated cue on the jumping behavior of Steinernema siamkayai	September 05-06, 2024	Guerinnarae Hotel, Busan, Korea	poster
プーピン タウン	*Puping Ta-oun, Toyoshi Yoshiga	The role of CO2 in the insect host-seeking behaviors of Steinernema siamkayai	25-30 August 2024	Kyoto, Japan	poster
菅原 早紀	菅原早紀*・梶田忠・川窪伸光	西表島におけるヤエヤマセマルハコガメによる種子散布	2024/12/6-8	日本・岡山	ポスター発表
宗 祥史	* 宗祥史 Ayman K. Elsayed, 田淵研・吉村英翔, 岩泉連・内藤明紀, 山尾僚・村山輝記, 小高信彦, 古川晶啓, 尾形之善, 喜久村智子, 徳田誠	ヨモギ属植物の蕾を利用するタマハエ類の多様性	2024年5月25日, 26日	沖縄県	口頭発表
宗 祥史	* 宗祥史, Ayman K. Elsayed, 池上真木彦, 徳田誠	Gall midges (Diptera: Cecidomyiidae) associated with flower buds of Artemisia	2024年8月25日-30日	京都府	口頭発表
田中 康就	Yasunari Tanaka* & Hiroyuki Shimoji	Relationship between worker fertility and reconstruction of division of labor in ants	Aug. 2024	Kyoto, Japan	poster
田中 康就	Yasunari Tanaka*, Kazuki Tsuji & Hiroyuki Shimoji	Does the task flexibility of ants compensate for the imbalance division of labor?	Nov.2024	Naha, Japan.	Poster
蜂須賀 莉子	Rico Hachisuka*, Hiroto Seino, Shoma Hiejima, Atsushi Takashima, Tsutomu Enoki, Kei Kawai, Yoshimi Sakai, Shin Ugawa	Functional traits of leaf and fine root depending on the tree species adapted to different topography in a subtropical evergreen forest	24-28 February 2025	Netherlands, Amsterdam	Poster
ハナガナン ベルナデス グレース エルテ	Oral Presenter. Authors : Bernadeth Grace S. Pananganan , Yukinobu Isowa , Maria Daniela Artigas Ramirez , Takashi Yamamoto , Masaki Miya , Tadashi Kajita	Evaluating fish biodiversity Near Mangrove Ecosystem using eDNA Metabarcoding on World Heritage Island	April 22-25, 2024	Bangkok, Thailand	Oral
ハナガナン ベルナデス グレース エルテ	Oral Presenter. Authors: Bernadeth Grace S. Pananganan , Nasreen Peer, Jean Fall, Yukinobu Isowa , Tadashi Kajita.	Application of eDNA Metabarcoding for Faunal Biodiversity in Mangrove Ecosystem.	August 27-29, 2024	Stellenbosch University, Cape town, South Africa	Oral
ハナガナン ベルナデス グレース エルテ	Poster Presenter.Authors: Bernadeth Grace S. Pananganan , Marizka G. Juliano, Maria Daniela Artigas Ramirez, Yukinobu Isowa , Tadashi Kajita	Exploring Fish Biodiversity in Urauchi River Mangroves: An eDNA Metabarcoding Study of Longest River in Okinawa, Japan	December 2-4, 2024	Tsukuba, Japan	Poster
ハナガナン ベルナデス グレース エルテ	Oral Presenter. Authors: Bernadeth Grace S. Pananganan , Marizka G. Juliano, Yukinobu Isowa , Maria Daniela Artigas Ramirez, Tadashi Kajita.	Exploring Fish Biodiversity in Urauchi River Mangroves: An eDNA Metabarcoding Study of Longest River in Okinawa, Japan	6 Jan - 14 February 2025	Iriomote Station, TBRC, University of the Ryukyus, Okinawa, Japan	Oral
ハナガナン ベルナデス グレース エルテ	Oral Presenter. Authors: Bernadeth Grace S. Pananganan , Marizka G. Juliano, Yukinobu Isowa, Maria Daniela Artigas Ramirez, Tadashi Kajita.	Exploring Fish Biodiversity in Urauchi River Mangroves: An eDNA Metabarcoding Study of Longest River in Okinawa, Japan	February 18-19, 2025.	University of Nottingham Teaching Centre, Kuala Lumpur Malaysia	Poster
ハナガナン ベルナデス グレース エルテ	Keynote speaker.Authors : Bernadeth Grace S. Pananganan , Yukinobu Isowa , Maria Daniela Artigas Ramirez , Takashi Yamamoto , Masaki Miya , Tadashi Kajita	Long-term eDNA data for biomonitring in a subtropical coral reef.	21-23 Feb 2025	University of Nottingham Teaching Centre, Kuala Lumpur Malaysia.	Oral
矢野 文士	*矢野文士、古川晶啓、尾崎一天、澤島拓夫、徳田 誠	幼生種タマハエの野外生態: 九州北部の照葉樹林における事例研究	2024年5月25日～26日	日本、沖縄	口頭発表
矢野 文士	*Fumito YANO, Akihiro FURUKAWA, Ayman Khamis ELSAYED, Kazutaka OSAKI, Takuo SAWAHATA, Makoto TOKUDA	Diversity and habitat use of paedogenetic gall midges (Diptera: Cecidomyiidae) in Japan	8.25-30,2024	Japan,Kyoto	Poster
矢野 文士	*矢野 文士、松田 浩輝、山尾 僚、徳田 誠	オオイスダエの防御形質多型に伴うフェノロジー変異は同所的な生殖隔離を促進するか	2025年3月15日～18日	日本、北海道	ポスター発表

矢野 文士	*矢野文士, 古川晶啓, 尾崎一天, 澤島拓夫, 徳田 誠	幼生生殖タマバエの野外における利用資源とその特徴および発生消長	2025年3月20日～22日	日本, 千葉	ポスター発表
矢野 文士	*鍾ヶ江 葵, 矢野 文士, 奥園 元晴, 大塚 陽香, 日南 瑠, 徳田 誠	有明海の潮間帯に生息するクシヒゲハイロヒメシヤクの生態およびシシメンソウ立ち枯れとの関連	2024年12月8日	日本, 福岡	口頭発表
矢野 文士	*山崎 華子, 矢野 文士, 徳田 誠	多良山系におけるヤマネの活動の季節性: 10年間の自動撮影カメラデータの解析	2025年2月8日	日本, 佐賀	口頭発表
矢野 文士	*赤星 裕良, 矢野 文士, 太田 一樹, 徳田 誠	植食者はなぜ植物上で一定密度以上にならないのか: アブラムシを用いた検証実験	2025年3月15日～18日	日本, 北海道	ポスター発表
矢野 文士	*森 理乃, 矢野 文士, 側垣 共生, 宗 祥史, 大塚 陽香, 徳田 誠	佐賀平野および有明海北部における越冬期のカモ類の食性	2025年3月15日～18日	日本, 北海道	ポスター発表
矢野 文士	*澤島 拓夫, 尾崎 一天, 古川 晶啓, 矢野 文士, 徳田 誠	Heteropeza属幼生生殖タマバエにおける完全変態モードの幼虫形態	2025年3月20日～22日	日本, 千葉	ポスター発表

★農水圏資源環境科学専攻(地域資源環境工学連合講座)★

●著書・論文等

氏 名	著者名(共著の場合は全員の氏名、ファーストオーダーに*印) authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻(号)、頁 vol./page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、紀要、その他 paper/book/review/bulletin/others
ブランス ビュマル ルワンパティラナ	PP Ruwanpathirana, Kazuhito Sakai, GY Jayasinghe, Tamotsu Nakandakari, Kozue Yuge, WMCJ Wijekoon, ACP Priyankara, MDS Samaraweera, PLA Madushanka	Evaluation of Sugarcane Crop Growth Monitoring Using Vegetation Indices Derived from RGB-Based UAV Images and Machine Learning Models	Agronomy – MDPI	1499), 2059	9-Sep-24	paper
ブランス ビュマル ルワンパティラナ	P.P. Ruwanpathirana*, Kazuhito Sakai, Tamotsu Nakandakari and Kozue Yuge	Evaluating the Effectiveness of the Biodegradable Superabsorbent Polymer (Fasal Amrit) on Soil Hydrological Properties: A Laboratory Rainfall Simulation Study	Agronomy – MDPI	14(11), 2467	23-Oct-24	paper
アケメ シリル ソンジュメ	Akeme Cyril Njume*, Yumika Naomasa, Yoshiaki Shinzato, Muneshi Mitsuoka, and Eizo Taira	Laboratory analysis of soluble solids content in sugarcane juice from direct and shredded extraction methods using NIR spectrometer	Journal of Food Composition and Analysis	138 (107009)	23-Nov-24	Paper
アケメ シリル ソンジュメ	Akeme Cyril Njume*, Yoshiaki Shinzato, Muneshi Mitsuoka, Yuya Aoyago, E Taira	Evaluation of unified calibration model in predicting pol content in sugarcane juice extracted by two extraction methods	Engineering in Agriculture, Environment and Food (EAEF)		3 February, 2025	Paper
田崎 小春	田崎小春*, 徳本家康, 小宮秀治郎, 登尾浩助	人エマクロバア内の土壌ガス濃度計測システムの構築および評価 - 局所耕うん法への適用 -	土壌の物理性	No. 157, p. 33-42	2024/7/20	論文
田崎 小春	取出伸夫*, 田崎小春, 三口貴久代, 徳本家康	Ca2+ - Na+ イオン交換を伴う土中の溶質移動 II. 溶液濃度と組成の及ぼす影響	土壌の物理性	No. 157, p. 45-58	2024/7/20	解説
堀榮 美希	*堀榮美希・平良英三・宮城もね・光岡宗司	近赤外分光法による製糖白下サンプルの検量モデル開発に関する研究	九州農業食料工学会誌	第74号、7-11	令和6年8月	論文
堀榮 美希	*堀榮美希・幸地利輝・石嶺邑弥・白川徹・田中宗浩・鹿内健志・平良英三	透過型FT-IRによるサトウキビ搾汁液中のスクロース定量法の開発	農業食料工学会誌	第87巻2号、	令和7年3月	論文

●口頭発表・ポスター発表・講演

氏 名	共同研究者氏名(全員の氏名、口頭・ポスター発表者に*印) members(*presenter)	口頭・ポスター発表題目 oral/poster program title	開催期間(西暦) period	開催地: 国名、都市名 place: country, city	口頭発表・ポスター発表oral/poster
ブランス ビュマル ルワンパティラナ	P.P. Ruwanpathirana*, Kazuhito Sakai, Tamotsu Nakandakari and Kozue Yuge	Evaluate the Effect of Biodegradable Super Absorbent Polymers (SAPs) on Soil Hydro-physical Properties: Special Reference to Water Conservation in Agriculture	November 18 ~ 19, 2024	Bangkok, Thailand	Poster
アケメ シリル ソンジュメ	Akeme Cyril Njume, Yumika Naomasa, Yoshiaki Shinzato, and Eizo Taira*	Laboratory analysis of brix in sugarcane juice from different extraction methods using NIR spectroscopy	September, 2024	Indonesia, Bali	Oral presentation
アケメ シリル ソンジュメ	Akeme Cyril NJUME, Yoshiaki SHINZATO, and Eizo TAIRA*	Development of a unified calibration model for two milling methods to determine pol in sugarcane juice	September, 2024	Japan, Miyazaki	Oral presentation
アケメ シリル ソンジュメ	Akeme Cyril Njume, Yoshiaki Shinzato, and Eizo Taira*	PREDICTION OF POL CONTENT IN SUGARCANE JUICE EXTRACTED BY DIVERSE EXTRACTION TECHNIQUES USING LOCALLY WEIGHTED REGRESSION	June 8-12, 2025	Rome, Italy	Poster
田崎 小春	田崎小春*, 取出伸夫, 三口貴久代, 徳本家康	土中の窒素の形態変化と荷電バランスを考慮した植物根の能動吸収	2024/9/10～2024/9/12	日本, 弘前市	口頭発表
田崎 小春	田崎小春*	水田土中の有機物分解に伴う物質の形態変化と反応移動のモデル化	2024/10/19	日本, 神奈川県川崎市	招待講演
田崎 小春	Koharu Tasaki*, Nobuo Toride, Kikuyo Mikuchi, Ieyasu Tokumoto	Fate and Transport model for NH4+ and NO3- with active root uptake in aerobic and anaerobic paddy soils.	2024/10/23 - 2024/10/25	Taiwan, Taichung	ポスター発表
ナハラツネ ワサリ ムテイヤンセラゲ クロイド サナナ ナハラツネ	Dr. Munehiro Tanaka	Methane fermentation characteristics of grass biomass	Sep-24	Miyazaki, Japan	oral
堀榮 美希	*堀榮美希・幸地利輝・石嶺邑弥・白川徹・平良英三	FT-IRによるサトウキビ搾汁液中のスクロース定量法の開発	2024年	日本, 宮崎県宮崎市	口頭発表
堀榮 美希	*Miki Horie, Riki Kouchi, Yuya Ishimine, Tetsu Shirakawa, Eizo Taira	Basic study on a calibration model for sucrose content in sugarcane juice using FT-IR	2024年	Indonesia, Bali	ポスター発表
升田 直希	*升田 直希, 宮本 英揮	機械学習を活用した現地気象データに基づく粘質土中の水分量予測	2024年9月17日～20日	日本, 大阪府堺市	ポスター発表
升田 直希	*升田直希, 平嶋雄太, 宮本英揮	気象オープンデータを活用した干拓地における土壌水分予測	2024年10月19日	日本, 神奈川県川崎市	ポスター発表
アベンシハ アチゲ ドナ カルバ ニコサンサラ アベンシハ	Kalpani Abeyasinghe, Prof. Munehiro Tanaka, Cuong Dong, Saeki shuto	Relationships between Tomato Growth Indices and Environmental Factors for Greenhouse Cultivation	2024 september	Miyazaki University, Japan	Oral presentation

★農水圏資源環境科学専攻(水産資源環境科学連合講座)★

●著書・論文等

氏 名	著者名(共著の場合は全員の氏名、ファーストオーサーに*印) authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻(号)、頁 vol./page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、紀要、その他 paper/book/review/bulletin/others
関 主樹	*Tamaki Seki, Motoaki Katsura, Masatoshi Yamasaki, Kazuki Yamashita, Emiko Kokushi, Seichi Uno	Effects of diphenhydramine exposure on reproduction of mature Japanese medaka (<i>Oryzias latipes</i>)	Chemosphere	358,142,163	2024年6月	論文
関 主樹	*関 主樹, 松尾 純平, 川上 泰佑, 國師 恵美子, 宇野 誠一	セルトラリン暴露によるヒメダカ (<i>Oryzias latipes</i>) 体内の代謝攪乱に基づいた影響評価	環境毒性学会誌	28, 1-11	2025年2月	論文
モハメド アロムギル ホセン	Md Alomgir Hossen*, Wataru Doi and Jun Ohtomi	Ovarian maturation, size at sexual maturity, and spawning season of jack knife shrimp <i>Haliporoides sibogae</i> (Decapoda: Solenoceridae) in Kagoshima Bay, southern Japan	Fisheries Science	90: 733-743		paper
モハメド アロムギル ホセン	Md Alomgir Hossen*, Wataru Doi and Jun Ohtomi	Recruitment, growth pattern and longevity of jack-knife shrimp <i>Haliporoides sibogae</i> (Solenoceridae) in Kagoshima Bay, southern Japan	Aquaculture Science			paper
Hardin Aaron Jn Pierre	Hardin Aaron Jn Pierre1, Tomonari Kotani1, Arnold Ebuka Irabor2	Experimental measurement of enzyme activity during initial crustacean growth using the ornamental shrimp, <i>Neocaridina denticulata</i> (De Haan, 1844) as a model and changes in activity with growth	Crustacean Research			
福上 周作	Shusaku Fukugami*, Masatoshi Yamasaki b, Emiko Kokushi b, Seichi Uno b	Influence of CYP1A and AhR modulation on polycyclic aromatic hydrocarbon-induced developmental defects in Japanese medaka	Aquatic toxicology	280, 107267	Mar-25	論文
是枝 伶旺	是枝伶旺*・百瀬 樹・本村浩之	薩摩半島から得られたミナミヒメハゼの記録、ヒメハゼ属の一種 <i>Favonigobius</i> sp. sensu Matsui et al. (2014) の国内における分布状況、および両種の標徴に関する新知見	Ichthy, Natural History of Fishes of Japan	40	2024年1月2日	論文
是枝 伶旺	是枝伶旺*・三木涼平・本村浩之	宮崎県から得られた九州初記録のキマダラハゼ	Ichthy, Natural History of Fishes of Japan	45	2024年6月8日	論文
是枝 伶旺	中村亮太*・大井真人・柴田峻一郎・是枝伶旺・本村浩之	沖永良部島初記録の魚類7種	Ichthy, Natural History of Fishes of Japan	45	2024年6月8日	論文
是枝 伶旺	前田知範*・久木田直斗・是枝伶旺・本村浩之	鹿児島県と宮崎県から得られた九州沿岸初記録のアカフジテンジクダイ	Ichthy, Natural History of Fishes of Japan	46	2024年7月18日	論文
是枝 伶旺	古橋龍星*・赤池貴大・是枝伶旺・橋本慎太郎・樋口聡文・金井聖弥・潮上太郎・中村亮太・清水直人・本村浩之	与那国島から得られた魚類43種の記録	Ichthy, Natural History of Fishes of Japan	47	2024年8月10日	論文
是枝 伶旺	Hashimoto, S.*, R. Koreeda, M.R. Izarenah, Y.G. Seah and H. Motomura.	First record of <i>Priacanthus blochii</i> (Actinopterygii: Eupercaria: Priacanthidae) from Malaysia	Acta Ichthyologica et Piscatoria	54	2024年10月25日	論文
是枝 伶旺	Koreeda, R.*, Y.G. Seah and H. Motomura	First Records of the Vanishing Silhouette Goby <i>Silhouettea evanida</i> (Pisces: Actinopterygii: Gobiidae) from the South China Sea, with Notes on Reproductive Behavior of the Species	Thalassas: An International Journal of Marine Sciences	41	2024年11月7日	論文
是枝 伶旺	Yamashita, R.*, T. Komai and R. Koreeda	<i>Potamalpheops yamakawai</i> n. sp., representing the first record of the genus from Japan (Decapoda: Caridea: Alpheidae)	Zootaxa	5555	2024年12月17日	論文
古橋 龍星	阿部健志郎*・清和凌河・坂井陽一・古橋龍星・本村浩之	口永良部島から得られた南限更新記録 2 種を含む魚類 57 種の記録	Ichthy, Natural History of Fishes of Japan	45: 1~14	2024年6月1日	論文
古橋 龍星	古橋龍星*・赤池貴大・是枝伶旺・橋本慎太郎・樋口聡文・金井聖弥・潮上太郎・中村亮太・清水直人・本村浩之	与那国島から得られた魚類 43 種の記録	Ichthy, Natural History of Fishes of Japan	47: 9~20	2024年8月10日	論文
古橋 龍星	石丸 淳・古橋龍星・本村浩之	日本産マーカスミノカエルウオの追加記録ならびに国内における本種の分布状況	Ichthy, Natural History of Fishes of Japan	48: 47~54	2024年10月28日	論文
古橋 龍星	古橋龍星・久高健飛・本村浩之	ペラ科イラ属の標準和名ミナベイラはキスジイラの新参異名	Ichthy, Natural History of Fishes of Japan	51: 25~35	2025年1月19日	論文
古橋 龍星	古橋龍星・本村浩之	奄美大島から得られた標本に基づく日本初記録のニザダイ科魚類 <i>Acanthurus auranticavus</i> マンナイクロハギ(新称)	魚類学雑誌	71(2):163~171	2024年6月25日	論文
古橋 龍星	Barry C. Russell*・Hiroyuki Motomura Ryusei Furuhashi	The taxonomic status of the lizardfishes <i>Saurida elongata</i> (Temminck and Schlegel 1846) and <i>S. eso</i> Jordan and Herre 1907 with comments on the validity of <i>S. argyrophanes</i> (Richardson 1846)	Ichthyological Research		2024年12月13日	論文
幸 大二郎	*幸大二郎・津野義大・遠藤広光・本村浩之	オイランヨウジとカスミオイランヨウジの標徴に関わる新知見と日本からの追加記録	Ichthy, Natural History of Fishes of Japan	43, 11-19	2024年4月12日	論文
幸 大二郎	*幸大二郎・萩原清司・本村浩之	奄美大島から得られた北西太平洋初記録のヨウジウオ科魚類 <i>Festucalex wassi</i> Dawson, 1977 ミナミアマクサヨウジ(新称)	Ichthy, Natural History of Fishes of Japan	47:598	2024年8月6日	論文
幸 大二郎	*幸大二郎・遠藤広光・本村浩之	高知県沖の島から得られた北西太平洋初記録のヨウジウオ科魚類 <i>Festucalex gibbsi</i> Dawson, 1977 ギブスアマクサヨウジ(新称)	Ichthy, Natural History of Fishes of Japan	48:19?21	2024年10月9日	論文
幸 大二郎	*Daijiro Yuki, Hiromitsu Endo, Hiroyuki Motomura	First Japanese Record of <i>Corythoichthys intestinalis</i> (Teleostei: Syngnathidae) from the Ryukyu Islands	Species Diversity	29:247~253	3-Jul-24	論文
ロサン カベヘ	*Cabebe-Barnuevo R, Mochizuki K, Motomura H. (2024).	Monophyly and re-definition of the Indo-Pacific scorpionfish genus <i>Parascorpaena</i> Bleeker 1876 (Scorpaenidae).	Ichthyological Research	1~12		Paper
ロサン カベヘ	*Cabebe-Barnuevo R, Motomura H.	Recently published Red Sea record of <i>Parascorpaena mossambica</i> (Peters, 1855) (Teleostei: Scorpaenidae) based on misidentification of <i>Sebastapistes strongia</i> (Cuvier, 1829)	Biogeography	26/17~20		Paper

ロクサン カヘ`	*Cabebe-Barnuevo, R, Wibowo K, Motomura H.	Redescription of <i>Parascorpaena moultoni</i> (Whitley, 1961) (Actinopterygii, Scorpaenidae), with new distribution records for the species.	ZooKeys	1219/271~285		Paper
ロクサン カヘ`	*Cabebe-Barnuevo R, Motomura H	<i>Sebastapistes monospina</i> , a new species of scorpionfish (Teleostei: Scorpaenidae) from the South Pacific Ocean	Ichthyological Research	1020/1~8		Paper
ロクサン カヘ`	*Cabebe-Barnuevo R, Motomura H	Northern distribution limit of <i>Parascorpaena poseidon</i> Chou & Liao, 2022 (Scorpaeniformes: Scorpaenidae) extended to mainland Kagoshima, Japan, with notes on morphological variation	Biogeography	27/25~19		Paper
ロクサン カヘ`	*Cabebe-Barnuevo R, P?nela DF, Delloro Jr. ES, Babaran RP, Motomura H, Malay MC	Cartilaginous fish diversity in the Western Visayas, Philippines, including two putative unidentified species and the first record of <i>Carcharhinus plumbeus</i> (Elasmobranchii: Carcharhiniformes: Carcharhinidae)	Acta Ichthyologica et Piscatoria	55/1~26		Paper
佐々木 拓	*Taku Sasaki, Hideaki Matsui, Kuwabara Yusuke, Saichiro Yokoyama, Manabu Ishikawa, Tomonari Kotani	Euryhaline copepod <i>Pseudodiaptomus inopinatus</i> changed the prey preference of red sea bream <i>Pagrus major</i> larvae	Fisheries science	90,281-294	2024年1月	論文
出羽 優風	Yuna Dewa* and Hiroyuki Motomura	First records of two triplefins, <i>Enneapterygius rhotion</i> and <i>Enneapterygius olivaceus</i> (Actinopterygii: Blenniiformes: Tripterygiidae), from Australia and Vanuatu	Acta Ichthyologica et Piscatoria	54: 261-268	2024年10月31日	論文
出羽 優風	Yuna Dewa* and Hiroyuki Motomura	<i>Enneapterygius pallidoserialis</i> , a junior synonym of <i>Enneapterygius erythrosoma</i> (Perciformes: Tripterygiidae)	Species Diversity	29: 409-413	2024年11月25日	論文
出羽 優風	出羽優風*・本村浩之	鹿児島県本土と宇治群島初記録のゴマフヘビギンボ、および本種の標準和名に関する再検討	Ichthy, Natural History of Fishes of Japan	52: 46-53	2025年2月16日	論文
出羽 優風	出羽優風*	池田湖の外來魚		51: 9-10	2025年1月8日	鹿児島大学総合研究博物館 ニュースレター
出羽 優風	出羽優風*	オーストラリアでの魚類標本調査を振り返って		52:08:00	2025年2月25日	鹿児島大学総合研究博物館 ニュースレター
橋本 慎太郎	Shintaro Hashimoto * Hiroyuki Motomura	A new species of bigeye, <i>Priacanthus gracilis</i> (Perciformes: Priacanthidae), from eastern Australia	Ichthyological Research	72:85~97	22-Apr-24	
橋本 慎太郎	Shintaro HASHIMOTO * Reo KOREEDA Md Repin IZARENAH Ying Giat SEAH Hiroyuki MOTOMURA	First record of <i>Priacanthus blochii</i> (Actinopterygii: Eupercaria: Priacanthidae) from Malaysia	Acta Ichthyologica et Piscatoria	54, 243~247	25-Oct-24	
橋本 慎太郎	橋本慎太郎*・中村潤平・本村浩之	九州南部から琉球列島にかけて確認されたハタ科魚類の交雑個体(クエ×タマカイとアカマダラハタ×タマカイ)の記録	日本生物地理学会会報	79. 9~18	令和6年12月20日	

●口頭発表・ポスター発表・講演

氏 名	共同研究者氏名(全員の氏名、口頭・ポスター 発表者に*印 members(*presenter))	口頭・ポスター発表題目 oral/poster program title	開催期間(西暦) period	開催地:国名、都市名 place:country,city	口頭発表・ポスター発表oral/poster
福上 周作	福上周作*, 山崎雅俊、國師恵美子、宇野誠一	ビレン暴露によるヒメダカ胚の頭部軟骨形成に対する影響	2024/07/02-07/05	広島市	口頭発表
松尾 純平	松尾純平*, 山崎雅俊、國師恵美子、仲山慶、宇野誠一	クサフグ胚に対する重油汚染水およびアルキル化PAHsの影響評価	2024.07.02-07.05.	日本、広島県広島市	口頭発表
今村 和貴	今村和貴*, 宇野誠一、國師恵美子、山崎雅俊、福上周作、川上泰佑、遠藤智司	伊勢湾底質中PAHsの底生生物に対する影響の寄与に関する研究	2024年7月2日~7月5日	広島	口頭発表
是枝 伶旺	是枝伶旺*, 前田健・本村浩之	琉球列島から得られたダイダイソミズハゼに近似するミミズハゼ属の1未記載種	2024年9月6日-9日	福岡市	口頭発表
古橋 龍星	古橋龍星*, 本村浩之	Synodus variegatus 類似種群(エソ科アカエソ属)の分類学的再検討	2024年9月6日~9日	福岡市	口頭発表
幸 大二郎	Daijiro Yuki*, Hiromitsu Endo, Hiroyuki Motomura	Taxonomic Review of "Corythoichthys flavofasciatus" (Syngnathiformes: Syngnathidae)	2024.5.27	マレーシア	口頭発表
幸 大二郎	幸大二郎*, 本村浩之	アマササヨウジ属魚類の分類学的研究	2024.9	日本	口頭発表
ラナ ケイ エム シャキール	K M Shakil Rana*, Takanori Sonoda, Susumu Ohtsuka, Tomonari Kotani, Daisuke Ueno, Satoshi Tasumi	Tracking chemosensory genes in sea louse Caligus fugu by expression profiling using de novo assembled transcriptome, an attempt to comprehend host recognition mechanism of the parasite	2024	Hiroshima, JAPAN	Oral
ラナ ケイ エム シャキール	K M Shakil Rana*	Poster	2024	Kagoshima	Poster
ロサン カベ`へ`	Cabebe-Barnuevo R, Mochizuki K, Motomura H.	Systematic classification and molecular phylogeny of the genus Parascorpaena Bleeker 1876 (Teleostei: Scorpaenidae)	28-29 May 2024	Malaysia, Penang	Oral
ロサン カベ`へ`	Cabebe-Barnuevo R, Mochizuki K, Motomura H.	Morpho-molecular distinction of the Indo-Pacific Scorpionfish genus Parascorpaena (Scorpaenidae: Scorpaenini)	10-14 July 2024	USA, Pittsburgh	Oral
ロサン カベ`へ`	Cabebe-Barnuevo R, Motomura H.	Preliminary taxonomic review of the Parascorpaena moadamsi complex from the Pacific Ocean	6-9 September 2024	Japan, Fukuoka	Oral
佐々木 拓	*佐々木拓, 的場颯太, 安樂和彦, 小谷知也	紫外光がマダイ仔魚の摂餌を促進させる	2024/9/24-2024/9/27	日本、京都	ポスター発表
佐々木 拓	*佐々木拓, 早坂央希, 安樂和彦, 田角聡志, 小谷知也	マダイ仔魚の成長に伴うオプシン遺伝子の種類と発現量の変化	2025/3/26-2025/3/29	日本、神奈川	口頭発表
佐々木 拓	*小谷知也, 大海聡一, 佐々木拓, 石川学, 石堂佑典	ワムシを材料とした配合飼料の改良とハマチ・ヒラメへの使用	2024/9/24-2024/9/27	日本、京都	口頭発表
佐々木 拓	*松井英明・内山 卓・佐々木 拓・石川 学・小谷知也	シオミズツボフムシBrachionus plicatilisのDPA量に及ぼすEPA強化時間の影響	2025/3/26-2025/3/29	日本、神奈川	ポスター発表
出羽 優風	Yuna Dewa* and Hiroyuki Motomura	Species diversity of the triplefin genus Enneapterygius (Perciformes: Tripterygiidae) in Japan	2024年5月28-29日	マレーシア・ペナン	Oral
出羽 優風	Yuna Dewa*, Nozomu Muto, and Hiroyuki Motomura	Specimens previously identified as Helcogramma fuscipictoris (Tripterygiidae) include two distinct species, based on morphological and molecular analyses	2024年7月10日-14日	アメリカ・ピッツバーグ	Oral
出羽 優風	出羽優風*, 本村浩之	セグロヘビギンボ類似種群の分類学的研究	2024年9月6日-9日	福岡県福岡市博多区	口頭発表
出羽 優風	檜垣健介*, Seah Ying Giat・Sheikh Abdul Kadir Siti Tafzilveriam・Mat Jaafar Tun Nurul Aimi・木村清志・中江雅典・松沼瑞樹・日比野友亮・小林大純・中村潤平・松本達也・Cabebe-Barnuevo Roxanne・古橋龍星・是枝伶旺・出羽優風・本村浩之	マレー半島東岸クアンタンの魚類多様性	2024年9月6日-9日	福岡県福岡市博多区	ポスター発表
橋本 慎太郎	本村浩之	琉球列島から得られた日本未記録のキントキダイ属魚類Priacanthus alalauaならびに日本産同属魚類の標徴の再検討	2024/09/06-2024/09/09	福岡工業大学	口頭発表
マキビチ カリシアナ マラマ	Kalisiana Marama Matakiviti, Yoshihiro Harada, Masafumi Kodama, Toru Kobari, Tomohiro Komorita, and Gen Kume	Feeding habits of blacktip grouper (Epinephelus fasciatus) around Koshikijima Island, southern Japan	19-22 November, 2024	Hakodate, Japan	poster
森久保 諭	森久保諭*, 高橋のどか・熊澤頼博・田熊保彦・榎本大佑・西村崇・神野良誠・奥西将之・前田広人	カドミウムを使用しない窒素化合物分析法の環境水分析への応用	2024/9/24-09/27	日本、京都	ポスター発表
森久保 諭	高橋のどか*, 森久保諭・熊澤頼博・西村崇・神野良誠・田熊保彦・榎本大佑・奥西将之・前田広人	カドミウムを使用しない窒素化合物分析法の開発	2024.9.24-27	日本、京都	ポスター発表
森久保 諭	森久保諭*, 高橋のどか・西村崇・熊澤頼博・田熊保彦・榎本大佑・神野良誠・奥西将之・前田広人	カドミウムを使用しない窒素化合物分析法の環境水・排水への応用	2025.3.17-19	日本、札幌	ポスター発表
森久保 諭	高橋のどか*, 森久保諭・西村崇・熊澤頼博・神野良誠・田熊保彦・榎本大佑・奥西将之・前田広人	銅亜鉛還元コイルを用いたカドミウムを使用しない窒素化合物分析法の開発	2025.3.17-19	日本、札幌	ポスター発表
森久保 諭	高橋のどか*, 森久保諭・熊澤頼博・西村崇・神野良誠・田熊保彦・榎本大佑・奥西将之・前田広人	カドミウムを使用しない窒素成分分析法の開発と実試料分析への応用	2024.9.20	日本、大阪	口頭発表
森久保 諭	高橋のどか*, 森久保諭・熊澤頼博・西村崇・神野良誠・田熊保彦・榎本大佑・奥西将之・前田広人	カドミウムを使用しない窒素成分分析法の開発	2024.9.26-27	日本、横浜	口頭発表

◇研究室紹介

農水圏資源環境科学専攻 水産資源環境科学連合講座

鹿児島大学水産学部 水産技術研究室

江幡 恵吾

水産技術の分野で漁船漁業や沿岸漁場を取り巻く様々な課題を解決する研究に取り組んでいます。

国産天然魚を食料として供給する漁船漁業では、燃油価格の高騰に加えて、漁業に使用する資材の価格も上昇しており、操業にかかる経費が増えています。しかしながら、産地の魚価はそれに見合って高くなるわけではないため、漁業経営はますます困難になっているのが現状です。

様々な食べ物がある中で、国産天然魚の特徴は「旬」と「地域ごとの違い」がはっきりしていることです。同じ海域でも季節によって獲れる魚は変わり、また、同じ日でも地域によって異なる種類の魚が水揚げされます。水産物は、わたしたちの健康に欠かせないたんぱく源であると同時に、食卓を豊かにしてくれる大切な食材でもあります。

漁船漁業のコストを軽減する研究として、底曳網の網地を改良し、従来とほぼ同等の漁獲量を維持しながら、漁具に作用する流水抵抗を減らして燃料消費量を抑える技術を開発してきました。また、底曳網を曳網している間は、漁船の操縦以外の作業がないため、漁業者の多くは休憩時間になります。しかしその間、網の中に入った魚は水流にさらされてストレスを受け、品質が下がってしまいます。漁業者の作業環境と漁獲物の鮮度の両方を考慮した最適な曳網時間を見つけることが重要です。実際の商業漁船では、曳網時間を変化させて漁獲物の鮮度を評価することは困難であるため、本学の練習船「南星丸」を用いて、試験操業を重ねることで曳網時間とエビ類の鮮度状態の関係を明らかにすることができました。

近年では沿岸漁場における問題として、陸域から流出したプラスチックごみによる海洋汚染が挙げられます。家庭のごみは、指定された日にごみ収集場所に出しておけば回収してもらえますが、沿岸漁業で回収されたごみは、漁業者自らあるいは漁業協同組合が処分費を負担して処理しなければならないのが現状です。環境省の支援を受けて令和5年度から開始した調査では、鹿児島沿岸で行われている「ごち網」と呼ばれる漁法によって、海底から多くのごみが回収されており、その多くが袋やシート状のプラスチックであることが分かってきました。こうした海洋ごみを集めるために専用の船を準備するには大きな費用がかかり、また、プラスチックごみが沖合に移動したり、劣化によってマイクロプラスチックに細分化されたりすると、その回収さらに困難を極めます。日常的に沿岸で漁業を営む漁業者にとっては、漁獲物と一緒に網の中に入ってくる海洋ごみは船上での漁獲物の選別作業の邪魔になるうえ、持ち帰って処分するのも手間になります。しかし一方で、沿岸漁業を通じて海底に蓄積したプラスチックごみを陸に持ち帰ることは、海洋環境を保全することにもつながっています。こうした取り組みを研究としてまとめ、社会に発信することで、海洋ごみ問題への関心を高め、解決につなげていきたいと考えています。



ごち網で回収された海洋ごみ

◇留学生の近況



My name is: Vitus Dwi Yudianto Budi Ismadi, born in Semarang-Central Java, Indonesia, June 15, 1959. After graduating from high school, I continued my education at Diponegoro University - Semarang, graduating in 1983 in Animal Science. After becoming a lecturer at a college in the same alma mater, 1985, various activities participated in training in the field of Food and Nutrition, at Gadjah Mada University - Yogyakarta, Padjadjaran University and Bandung Institute of Technology - Bandung. This college is a category of Leading / well-known colleges in Indonesia. Postgraduate education Master's degree (MS) Program graduated in 1990 at Padjadjaran

University-Bandung. After going through various activities on the Diponegoro University campus, it would be nice if I could follow postgraduate education abroad. This ideal and hope turned out to come true with the acceptance of a Scholarship from the Japanese Government through Monbusho (at that time, 1992-1998) following the Postgraduate Program at Department of Biochemical Sciences and Biotechnology, Faculty of Agriculture - Kagoshima University, Japan. Before joining the Master Program, first follow the Japanese Language Program at Osaka Gadaigaku Ryugakusei for 6 months. Departure to Kagoshima is a joyful hope in realizing a dream to complete studies at Department of Biochemical Sciences and Biotechnology Faculty of Agriculture Kagoshima University. The Master Program graduated in 1995 under the guidance of Prof. Dr. Yuichiro. TOMITA., Dr. Kunioki HAYASHI., and Dr. Takayoshi AOKI with thesis title: "CHANGES IN MUSCLE PROTEIN TURNOVER AND HEAT PRODUCTION BY ENVIRONMENTAL TEMPERATURE IN BROILER CHICKEN AND ITS MECHANISM". The Doctoral Program graduated in 1998 under the guidance of Prof. Dr. Kunioki HAYASHI., Prof. Dr. Yoshizane MAEDA., Prof. Dr. Teruyoshi YANAGITA., Prof. Dr. Isao CHINEN., Prof. Dr. Nobuhiro FUKUDA with the title of his dissertation: "EFFECT ENVIRONMENTAL TEMPERATURE ON GROWTH AND METABOLISM IN BROILER CHICKENS".

After completing his studies at Department of Biochemical Sciences and Biotechnology, Faculty of Agriculture - Kagoshima University, I successfully held various positions both Structural and Functional. Position experience at Diponegoro University level that has been held so far includes Head of Feed and Feed Chemistry Laboratory, Animal Nutrition and Feed Department, Faculty of Animal Husbandry, 1999-2003, Head of Animal Nutrition and Feed Department - Faculty of Animal Husbandry 2003 - 2011, Head of Agribusiness Masters Study Program - Faculty of Animal Husbandry and Agriculture 2011 - 2015, Deputy Director of the Directorate of Learning Development and Academic Cooperation, Diponegoro University 2016 -2019, Deputy Chairperson of Commission D of the Professor Council-Academic Senate, Diponegoro University 2015 - 2020, Chairperson of Commission D of the Professor Council - Academic Senate, Diponegoro University 2020 - 2025. National level includes being a Member of the Feed Commission at the Ministry of Agriculture, Republic of Indonesia and Member of the Lecturer Academic Position Assessment Assessor Team at the Directorate of Resources, Directorate General of Higher Education, Republic of Indonesia. Assessor of the National Professional Certification Agency. Various seminars, research and community service activities have been carried out. The results of the activities have been published in various Accredited National Journals, International Journals and reputable International Journals. There are 115 publications, 3 Patents, 4 Intellectual Property Rights, 6 books. During the next trip, there were 3 visits to the Department of Biochemical Sciences and Biotechnology, Faculty of Agriculture- Kagoshima University through the Par B Program (2015) and World Class University (2018 and 2022) with a program funded by the government of the Republic of Indonesia. Likewise, there was a scientific visit by Professor Akira OHTSUKA (guest lecturer / Visiting Professor) to the Department of Animal Husbandry, Faculty of Animal Husbandry and Agriculture - Diponegoro University on October 31 until November 11, 2019. AIMS : 1. Implementing academic programs

based on : research, teaching, traveling, and innovation, 2. Increasing institutional competitiveness towards class university through a partnership with program with foreign universities / institutions and 3. Socialization and internationalizations. OUTPUTS : 1. Participate actively in the guidance of the preparation of international scientific publications manuscripts, from the preparation to submission. 2. Special assistance to professors to be active in conducting research activities directly. 3. Increasing the reputation of Faculty of Animal Agricultural Sciences, Diponegoro University through academic internationalization standart.

◇修了生より



Greetings from Indonesia!

I am Indah Widiastuti, Associate Professor of Sriwijaya University, South Sumatra, Indonesia. I am honored to share my journey as an alumnus of The United Graduate School of Agricultural Sciences, Kagoshima University (UGSAS-KU) – a life-changing chapter that has deeply influenced my career and personal development.

The UGSAS-KU Ph.D. Program, conducted in collaboration with Saga University, University of the Ryukyus, and Kagoshima University, offers far more than academic achievement. It provides a transformative experience for aspiring scientists to develop advanced expertise, research ethics, and a global mindset in the field of agriculture and fisheries sciences.

My home university during the program was Saga University, where I had the opportunity to work in a dynamic academic environment supported by dedicated faculty and diverse research facilities. The UGSAS-KU program gave me a strong academic foundation, but just as importantly, it shaped my personal and professional character.

Living and studying in Japan was a life-changing adventure. Adjusting to a different culture, language, and lifestyle was challenging at first, but it quickly became one of the most rewarding aspects of my Ph.D. journey. Japan's safe and welcoming environment, along with the strong support system for international students, helped me feel at home.

I also had the chance to build international friendships with fellow Ph.D. students from across Asia and beyond. These connections not only expanded my worldview but also enriched my academic work through cross-cultural collaboration and exchange of ideas.

A major influence during my doctoral studies was my supervisor, Professor Tsukasa Inaoka, Dr. Daisuke Ueno and Prof. Jirou Koyama. Their mentorship went far beyond academic guidance—they challenged me to think critically, to be thorough in my research, and to communicate my findings clearly and confidently.

Prof. Inaoka's constant support, patience, and commitment to my academic and personal growth helped shape me into the lecturer I am today. I apply many of the values and methods I learned under his supervision in my own teaching and mentoring style.

Our relationship has continued long after my graduation. We've maintained a strong professional connection—Prof. Inaoka and students has even visited Indonesia for collaborative fieldwork, and I've been fortunate to bring my own students to Japan for a short academic exchange. Although Professor Inaoka has now retired, our collaboration continues strongly through ongoing academic partnership with Prof. Miho Fujimura. These continued exchanges reflect the enduring bond created through UGSAS-KU and the power of international cooperation.

The UGSAS-KU program gave me more than a degree—it gave me the confidence and qualifications to return home and become a lecturer who can guide students not only with knowledge, but also with a spirit of curiosity, resilience, and global awareness. Now, I share the lessons I learned in Japan with my own students, and I encourage them to pursue international experiences that can change their lives, just as mine was changed.

Choosing UGSAS-KU and Saga University for my Ph.D. journey was a decision that opened many doors. It equipped me with solid research skills, lifelong international friendships, and the mentorship of a truly inspiring professor. I remain proud to be a part of the Rendai alumni community and am grateful for everything this program has given me.

◇ 学会賞等受賞



所属：応用生命科学専攻
先端応用生命科学連合講座
佐賀大学

職名：博士 3 年

氏名：矢埜 紅音

学 会 賞 名： 1. IUPAB2024 Student and Early Career Researcher Poster Award

2. 第 63 回電子スピンサイエンス学会年会 優秀発表賞

受賞研究題目： 1. Measurement of structural flexibility of enzymes using spin labeling-ESR.

2. スピンラベル-ESR 法を利用した酵素の構造柔軟性の温度変化の実測

受賞年月日： 1. 2024 年 6 月 28 日

2. 2024 年 11 月 3 日

低温適応酵素は構造に高い柔軟性を有し、そのため低温でも活性を維持でき、相同的な中温酵素や耐熱性酵素と比較すると高活性であると考えられています。一方で柔軟な構造を有するがために低温適応酵素の熱安定性は低く、比較的低い温度で失活してしまいます。そのため産業利用においては低い熱安定性が懸念され、長く研究対象から外れていました。しかし、近年になり安定性の高い低温適応酵素が報告されつつあり、これまでの学説では低温適応と高安定性を同時に達成する機構を説明できないことが指摘されていました。そこで私たちは、酵素の活性と安定性は構造の柔軟性と相関があることに注目し、熱安定性の高い低温適応酵素の分子機構を構造柔軟性の観点から解き明かすことを目指しました。

本発表では、南極海水から採取された好冷菌 *Pseudoalteromonas* sp. AS-131 が持つ熱安定性の高い低温適応酵素 (PsGK) について、部位特異的スピンラベル電子スピン共鳴法 (SDSL-ESR) を利用して酵素の構造柔軟性の温度変化を実測した結果を報告しました。SDSL-ESR は、酵素中のスピンラベル剤の付加した部位の溶液中での構造柔軟性が実測できる手法です。これに加え、液体窒素、圧縮空気とヒーターを併用した精密な温度コントロールにより、5~50℃における柔軟性の温度変化の実測に成功しました。その結果、PsGK は酵素全体のアミノ酸組成は柔軟性に寄与する特徴は見られなかったにもかかわらず、相同的な中温酵素と比較して柔軟な構造を有していることが明らかになりました。特に、構造変化や触媒活性に重要な部位の柔軟性が高く、これらは PsGK の低温適応や高活性に寄与していると示唆されました。これらの成果については現在論文投稿中です。

最後に本研究は JSPS 科研費 (21K18937、21H04816、24KJ1837) の助成を受けたものです。また本研究の一部は文部科学省「マテリアル先端リサーチインフラ」事業(課題番号 JPMXP1222MS1005b、JPMXP1223MS1004、JPMXP1223MS1073) の支援を受け、自然科学研究機構 分子科学研究所で実施されました。受賞に際しまして、ご指導いただいた堀谷正樹准教授をはじめとする指導教員の先生方、ESR 測定をご支援いただいた分子科学研究所機器センターの皆様に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。



所属：農水圏資源環境科学専攻
生物環境保全科学連合講座
琉球大学所属

職名：3年

氏名：菅原 早紀

学 会 賞 名：第19回 種生物学会ポスター賞

受賞研究題目：西表島に生息するヤエヤマセマルハコガメによる種子散布

受賞年月日：2024年12月7日

沖縄県西表島に生息するヤエヤマセマルハコガメの糞分析を行ったところ、本種による種子散布の証拠を捉えることができました。学会では、ハコガメの糞からどのような植物種の種子が見つかり、発芽したのかを発表しました。

本研究にご協力いただいた琉球大学熱帯生物圏研究センターの皆様・西表島民の皆様に、この場を借りて御礼申し上げます。

<要旨内容>

西表島と石垣島の森林とその周辺には、国指定の天然記念物であるヤエヤマセマルハコガメ *Cuora flavomarginata evelynae* (以下ハコガメ) が生息している。菅原・川窪 (2021) によれば、岐阜県の河川域に生息するカメ類の種子散布が確認されている。したがって、森林地帯などの陸域に生息するハコガメが、種子散布者として重要な生態的役割を果たしている可能性は、十分に考えられる。そこで、本研究では、ハコガメによる種子散布の有無をはっきりさせるため、糞分析および発見種子の発芽試験を行った。

島内の公道上や琉球大学西表研究施設内で活動しているハコガメを、2024年3月23日から9月30日までの間に、108日間観察した。期間中に観察したハコガメのうち、141個体（総捕獲回数174回）は捕獲を行い、糞や体表面に付着した種子を採集した。捕獲したハコガメは、マーキングによる個体識別を行った。研究室へ持ち帰った糞は、糞分析を行い、糞内容物を分類した。糞や体表面から発見した種子は、発芽試験を行った。

その結果、ハコガメの糞からは、11科22種以上におよぶ植物種の種子や果実が見つかった。これら種子のうち、7科9種以上の種子は、発芽能力が確認された。また、ハコガメの体表面からは、4科6種以上の植物種の種子や果実が見つかった。これら種子のうち、3科3種の種子は発芽能力が確認された。

西表島のヤエヤマセマルハコガメは、被食と付着による種子散布者として、島の森林更新を担っていると考えられた。現在は、糞分析や発芽試験の他に、インターバル撮影やルートセンサスによるハコガメの行動調査を行っている。今後は、これらのデータを解析し、ハコガメが、いつ・どんな時に・どのような頻度で種子散布しているのかを、明らかにしたいと考えている。



所属：農水圏資源環境科学専攻
生物環境保全科学連合講座
佐賀大学配属

職名：3 年

氏名：宗祥史

学 会 賞 名：ポスター賞

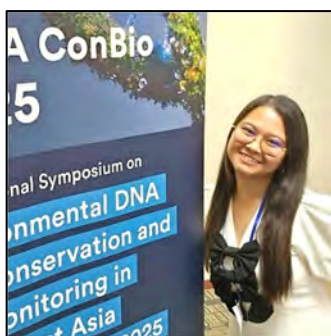
受賞研究題目：生物多様性の未知の“黄金郷“はどこに？：植物の蕾に潜む膨大なタマバエ類の多様性の確認

受賞年月日：2025 年 3 月 22 日

以下の研究内容を発表しました。

陸上で最も繁栄し、様々な環境で重要な役割を担う昆虫類の多様性を理解することは、生物の進化と多様化過程の解明や、生態系保全の観点から重要である。近年の研究から、最も種多様性が高いことが示唆されているハエ目タマバエ科は、DNA バーコーディングにより世界で約 180 万種が存在すると推定された。しかし、現在記載されているタマバエの種数は約 7000 種であり、推定種数の 99%以上が未解明である。既知のタマバエ科の約 70%は植食性で虫えいを形成する。虫えいは目立つ存在であるにもかかわらず、タマバエの種の解明率はわずかである。演者らは、これまで見過ごされてきたタマバエの種多様性がどこかに存在すると考えた。近年、植物の蕾に虫えいを形成せずに潜むタマバエがいくつか報告されている。そこで、本発表では多くのタマバエ種が芽や葉、茎に虫えいを形成することが知られているヨモギに着目し、日本各地でヨモギの蕾を採集し、その種多様性を解析した。その結果、20 種 (OTUs) 以上の未記載種と考えられるタマバエが確認され、これらは従来から知られているヨモギの虫えい形成性タマバエと属構成が大きく異なった。また、日本におけるヨモギの蕾を利用するタマバエの種数は最大 80 種に達すると推定された。

コアタイムには多くの研究者と意見交換をすることができ、今後の自身の研究にとって大変有意義な時間となりました。



Affiliation: The United Graduate School of Agricultural
Sciences Kagoshima University

Course: Resource and Environmental Science of Agriculture,
Forestry and Fisheries

Allied University: University of the Ryukyus

Year: Doctoral student, 3rd year

Name: Pananganan, Bernadeth Grace Suerte

1. Award title: Outstanding Poster Award

Research title: Exploring Fish Biodiversity in Urauchi River Mangroves: An eDNA
Metabarcoding Study of Longest River in Okinawa, Japan

Date of award: December 3, 2025

2. Award title: Best Student Oral Presentation

Research title: Exploring Fish Biodiversity in Urauchi River Mangroves: An eDNA
Metabarcoding Study of Longest River in Okinawa, Japan

Date of award: 19 February 19, 2025

Overview of the study

The Urauchi River, the longest river in the Ryukyu Archipelago on Iriomote Island, a UNESCO World Natural Heritage site, supports a diverse range of ecosystems and is home to numerous endemic and endangered fish species. Despite its ecological significance, comprehensive biodiversity assessments using advanced molecular techniques have been limited. This study employs environmental DNA (eDNA) by surface water sampling across 11 locations along the river gradient, spanning from the waterfall to the river mouth, conducted in 2021 and 2024. eDNA was captured using Sterivex filters, extracted with Qiagen PWS, and sequenced using MiFish primers on the Illumina NovaSeq 6000 platform (PE150). Data analysis, performed with the QIIME 2 pipeline, identified 352 Molecular Operational Taxonomic Units (OTUs) across 70 families and 186 genera, including six Critically Endangered (CR), three Endangered (EN), five Vulnerable (VU), and two Near Threatened (NT) species, as classified in the Ministry of the Environment, Japan (2020). Notably, mangrove-associated areas exhibited a particularly high richness of OTUs, underscoring their vital role in supporting fish biodiversity in transitional zones. Multivariate analyses revealed significant correlations between environmental variables and fish eDNA patterns, with salinity, temperature, elevation, and vegetation identified as key environmental drivers shaping fish assemblages in the Urauchi River. These findings demonstrate the effectiveness of eDNA metabarcoding in revealing biodiversity patterns in the Urauchi River, emphasizing the importance of protecting mangrove ecosystems and establishing long-term monitoring to track biodiversity changes amid development and climate change. Future research should focus on seasonal monitoring and additional environmental variables to enhance understanding of ecosystem dynamics.

1. First Award: Our study, *"Exploring Fish Biodiversity in Urauchi River Mangroves: An eDNA Metabarcoding Study of the Longest River in Okinawa, Japan,"* was awarded with the Outstanding

Poster Award at the 7th Annual Meeting of the Environmental DNA (eDNA) Society, held from December 3–5 in Tsukuba, Japan. This research was a collaborative effort with co-authors Marizka G. Juliano, Maria Daniela Artigas Ramirez, Yukinobu Isowa, and Tadashi Kajita. The conference gathered over 250 participants from various countries and featured 80 poster presentations, contributed and organized sessions, and industry-sponsored seminars. Centered around addressing global biodiversity loss and the management of invasive species, the event underscored the critical and timely role of eDNA research in conservation science. Being recognized among such a distinguished community of researchers is both a humbling and inspiring experience.



2. Second award: Our research, *"Exploring Fish Biodiversity in Urauchi River Mangroves: An eDNA Metabarcoding Study of the Longest River in Okinawa, Japan,"* received the Best Student Oral Presentation Award at the 2025 International Symposium on Environmental DNA for Conservation and Biomonitoring in Southeast Asia (eDNAConBio), held on February 18–19, 2025. The event took place at the University of Nottingham Teaching Centre in Kuala Lumpur, Malaysia. eDNAConBio 2025 served as a dynamic platform for presenting cutting-edge research on environmental DNA, with a strong focus on translating scientific findings into actionable policies. The symposium gathered researchers, environmental managers, and decision-makers to discuss the integration of eDNA tools into biodiversity monitoring and sustainable ecosystem management across Southeast Asia. It was held in conjunction with the 10th International Workshop on Mangrove Biodiversity Studies via eDNA Metabarcoding, conducted from February 21–23, 2025, further enriching opportunities for idea exchange and collaboration.



We express our profound gratitude to Professor Tadashi Kajita for his overall supervision, our lab members for their support, and acknowledge funding from various sources: the TBRC Grant "Project Type" (2019–2020), the Japan Society for the Promotion of Science (JSPS) Core-to-Core Program (JPJSCCB20200007 and JPJSCCB20240006), the Japan Science and Technology Agency (JST) SICORP Program (e-ASIA JPMJSC21E5), and the JSPS KAKENHI Fund for the Promotion of Joint International Research (21KK0115).



所属:農水圏資源環境科学専攻
水産資源環境科学連合講座
鹿児島大学

職名:博士課程3年生

氏名:古橋龍星

学会賞名:2024年度日本魚類学会最優秀口頭発表賞

受賞研究題目:*Synodus variegatus* 類似種群(エソ科アカエソ属)の分類学的再検討

受賞年月日:2024年9月8日

エソ科アカエソ属 *Synodus* Scopoli, 1777 のうち、*Synodus variegatus* (Lacepède, 1803)類似種群はインド・太平洋域に分布し、側線鱗数が56以上であること、側線上方横列鱗数が4.5–5.5(稀に3.5)であること、腹膜の黒色点数が7–13であること、口蓋骨歯前方の歯が後方の歯より明らかに長いこと、一部の種は頬部が完全に被鱗しないこと、および前鼻孔皮弁を後方に倒した際に皮弁の先端が後鼻孔後端に達しないか大きく越えないことによって特徴づけられます。本類似種群には *S. capricornis* Cressey and Randall, 1978、ミナミアカエソ *S. dermatogenys* Fowler, 1912、*S. falcatus* Waples and Randall, 1988、*S. fasciipelvicus* Randall, 2009、*S. houlti* McCulloch, 1921、オグロエソ *S. jaculum* Russell and Cressey, 1979、アカエソ *S. ulae* Schlutz, 1953、およびヒトスジエソ *S. variegatus* の8有効種とこれまで新参異名または疑問名として扱われていた *S. amaranthus* Waples and Randall, 1988、*S. englemani* Schlutz, 1953、*S. janus* Waples and Randall, 1988、*S. lucius* (Temminck and Schlegel, 1846)、および *S. varius* (Lacepède, 1803)の5名義種が内包されます。しかし、これらの中には種の有効性が議論されないまま長年有効種と扱われている種(*S. houlti*)や詳細な比較検討がなされず異名とされた種(*S. amaranthus*、*S. janus*)などが含まれており、包括的な再検討が必要とされていました。そこで、本研究では *S. variegatus* 類似種群に帰属する標本について形態的・遺伝的に精査し、本類似種群の分類学的再検討を行いました。その結果、本類似種群には9有効種と3未記載種の計12種が内包されることが明らかになりました。これらについて本発表では新知見が得られた種を中心に各種における標徴や識別形質、および分布について概説し、本類似種群の包括的な分類学的整理を行いました。

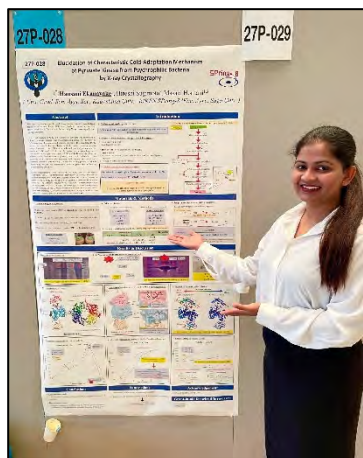
本研究発表は2024年9月6–9日に福岡工業大学にて開催された2024年度日本魚類学会年会において行われ、同期間中に優秀発表者の選定ならびに授賞式が執り行われました。



ヒトスジエソ *Synodus variegatus*



アカエソ *Synodus ulae*



Course: Biological Science and Technology

University: Kagoshima University

Year: 2nd year Doctoral student

Name: Nishadi Hansani Ekanayake

Award title: IUPAB2024 Student and Early Career Researcher Poster Award

Research title: Elucidation of Characteristic Cold-Adaptation Mechanism of Pyruvate Kinase from Psychrophilic Bacteria by X-ray Crystallography

Date of award: 28th of June 2024

Psychrophilic bacteria can grow well at cold temperatures, and their key determinant of cold adaptation lies in the function of proteins that drive microbial metabolism and cell cycle. While it is assumed that the proteins from psychrophiles must be adapted to the cold temperatures, the mechanism of cold adaptation of enzymes remains to be clarified. This study aimed to elucidate the cold adaptation mechanisms and allosteric regulations of pyruvate kinase (PK) from psychrophilic bacteria by X-ray crystallography. PK is a key allosteric enzyme in the glycolytic pathway. PK catalyzes the irreversible transphosphorylation of phosphoenolpyruvate (PEP) and ADP to pyruvate and ATP. Our understanding of the structural information, mechanism of cold adaptation and allosteric regulation of PK from psychrophilic *Pseudoalteromonas* sp. AS-131 (PsPK) which lives in the Antarctic Ocean is still limited.

Thus, PsPK was expressed in *E. coli* and recombinant PsPK was purified and subsequently was crystallized. X-ray crystallography was performed at BL-45XU, SPring-8 center.

Our results showed both monomeric and tetrameric structures of PsPK consisting of allosteric and catalytic domains. In addition, analyses on catalytic domain of PsPK confessed that the active site residues have been conserved as same as previously reported PK models. Besides, the allosteric effector, FBP binding loop features a glutamic acid residue which has been associated with non-allosteric enzymes and creates an electrostatic hindrance impeding FBP binding. Subsequently, the temperature dependence of activity showed an optimum temperature of 45°C. However notable residual activity was observed up to 55°C. Investigation into thermal stability revealed a sharp decline in PsPK activity at 60°C, suggesting a potential denaturation threshold.

Furthermore, the study is currently being extended to investigate the temperature dependence of allosteric regulation in PsPK in the presence of effectors, alongside a mutation analysis of the FBP-associated glutamic acid residue within the effector-binding loop that impairs FBP responsiveness.

Specially, I gratefully acknowledge Associate Professor Masaki Horitani, along with the supervisors and SPring-8 BL41XU and BL45XU staff, for their continued support.



所属：応用生命科学専攻
先端応用生命科学連合講座
佐賀大学

職名：博士 2 年

氏名：辻さやか

学 会 賞 名：1. IUPAB2024 Student and Early Career Researcher Poster Award

2. 日本農芸化学会西日本支部大会 優秀発表賞

3. 第 57 回酸化反応討論会 ポスター発表奨励賞

受賞研究題目：1. Structural basis of bifunctionality of mimosine synthase in plants

2. X 線結晶構造から見る亜熱帯性植物ギンネムの生存戦略

～ギンネム由来ミモシン合成酵素は何故ミモシン合成能を獲得できたのか？～

3. 2 機能性システイン合成酵素におけるミモシン生合成触媒能獲得の分子機構

受 賞 年 月 日：1. 2024 年 6 月 28 日

2. 2024 年 9 月 20 日

3. 2024 年 11 月 17 日

世界中の亜熱帯地域に自生している植物ギンネムは、豊富な栄養素を含み世界最大のバイオマス源であることから多様な利用法が検討されています。しかしながら、ギンネムは非タンパク質性アミノ酸の 1 種である毒性ミモシンを含んでおり、これがギンネムの産業利用の障壁となっています。先行研究から、ミモシンはシステイン合成酵素から派生したミモシン合成酵素によって生合成されることが明らかになっていました。しかしながら、ミモシン合成酵素がどのようにしてミモシン生合成能を獲得できたのかは分かっていませんでした。

本研究ではこの謎を構造生物学的見地から解明するため、X 線結晶構造解析を利用して基質結合前や反応途中で現れる「反応中間体」が結合したミモシン合成酵素の高分解能結晶構造を決定しました。そこで既知のシステイン合成酵素と構造比較を行った結果、これらは高い構造類似性を示す一方で、ミモシン合成酵素はシステイン合成酵素には無い新たな基質輸送チャネルを有していることが明らかになりました。また、ミモシンを生合成できない変異体についても同様に構造解析を行いました。変異体はこのチャネルを消失していました。これらのことから、祖先型システイン合成酵素の進化によるミモシン生合成能の獲得には新規の基質輸送チャネルの形成が深く関わっていることが示唆されました。

最後に、本研究は JSPS 科研費（21K18937、21H04816、23H02143）の助成を受けたものです。また、放射光実験は公益財団法人高輝度光科学研究センター（JASRI）の承認（課題番号：2021B2552、2022A2718、2023A2752）を得て、SPRING-8 の BL45XU にて実施されました。受賞に際しまして、ご指導いただいた堀谷正樹准教授をはじめとする指導教員の先生方、共同研究者の皆様に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。



所属：農水圏資源環境科学専攻・生物環境保全科学・佐賀大学

職名：博士課程2年

氏名：矢野 文士

学会賞名：第72回日本生態学会大会 植物個体群・景観分野 ポスター賞最優秀賞
第69回日本応用動物昆虫学会大会 ポスター賞

受賞研究題目：オオイヌタデの防御形質多型に伴うフェノロジー変異は同所的な生殖隔離を促進するか
幼生生殖タマバエの野外における利用資源とその特徴および発生活長

受賞年月日：2025年3月15日、3月22日

4億年以上続く植物と植食者の相互作用、そして共進化は、植物の多様化や植食者の適応放散に貢献したとされ、そのメカニズムは生態学における興味深い研究課題です。本発表の研究対象であるオオイヌタデには、葉にトライコームと呼ばれる繊毛をもつ有毛型とまたない無毛型が存在し、このトライコームは、植食者である昆虫の摂食を阻害する物理防御として機能することが分かっています。本発表では、オオイヌタデの有毛型と無毛型の栽培実験を行うことで、トライコームの有無以外の形質の変異について調査しました。その結果、有毛型の方が無毛型よりも開花時期が遅いこと、また、初期成長も遅く、種子数も少ないことが明らかになりました。今回の実験により、オオイヌタデの防御と成長・繁殖の間にはトレードオフの関係があり、さらに、そのトレードオフによって生じるフェノロジーの変異は、生殖隔離を誘発し、種分化へと繋がる可能性をもつという新たな知見が提供されました。

昆虫は、陸上生態系において最も既知種数が多い分類群です。近年の研究では、ハエ目タマバエ科の推定種数が180万種であるとも言われ、昆虫の中で最大であることが分かってきました。しかし、既知種数は約7000種であり、大部分が未解明のままです。本発表では、菌食性タマバエの中でも、幼生生殖と呼ばれる特殊な繁殖様式をもつ種を対象に研究を行いました。幼生生殖とは、幼虫や半蛹の体内で卵巣が発達し、単為生殖的に次世代が生まれる繁殖様式です。今回は、自然環境下における生態に着目し、利用している資源やその特徴、発生活長の解明に取り組みました。調査の結果、幼生生殖タマバエの幼虫は、林床の枯れ木を主に利用しており、幼虫が確認された枯れ木の腐朽段階は様々で、また、腐朽型は地点によって異なりました。さらに、幼虫は、枯れ木内に周年生息していることも明らかになりました。今後、より詳細な研究を行うことで、タマバエだけでなく、昆虫全体の繁栄や多様性について探求することができると考えています。

最後に、受賞に際し、日頃からご指導いただいております徳田誠教授をはじめとする指導教員の先生方、共同研究者の皆様、支えてくださっている研究室のメンバー、お世話になっている皆様に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。





Belong: Resource and Environmental Science of Agriculture, Forestry and Fisheries

University of the Ryukyus

Year: D1

Name: AKEME CYRIL NJUME

Award title: Best International Presenter

Research title: **Development of a unified calibration model for two milling methods to determine pol in sugarcane juice**

Date of award: 2024/09/02

Akeme Cyril Njume^{1,2*}, Yoshiaki Shinzato², & Eizo Taira²

¹UGSAS, Kagoshima University & ²Faculty of Agriculture, Ryukyus University

Introduction

Different extraction methods yield varying amounts of juice content. Brix and pol are used as quality indicators to determine sugarcane harvest maturity to plan for harvest season. However, multiple juice extraction methods (JEM) are used in a region to determine harvest timing. Consequently, some sugarcanes are harvested prematurely or after deterioration, resulting in reduced sugar yield. Moreover, traditional chemical methods to determine pol is costly, time-consuming, and use toxic chemicals. In contrast, near-infrared (NIR) spectroscopy is accurate, fast, and non-chemical method that allows for the measurement of multiple parameters simultaneously, including brix, pol, and purity for a sample. The objectives of this study were to compare the pol differences between the direct extraction method and shredded extraction method (SEM) using chemical measurement and to develop a unified NIR calibration model for both methods to plan for harvest season.

Materials and methods

A total of 212 sugarcane samples were collected from Okinawa and Kagoshima prefectures, and grouped into DEM and SEM. For SEM, 106 samples were crushed into small sizes using a cutter grinder and the shredded cane was pressed using a hydraulic press (HP) at 25.5 MPa. For DEM, clean cane samples were directly pressed using HP at 25.5 MPa. Cane juice was clarified with lead acetate and spectra data were acquired using an NIR spectrophotometer (400-2500 nm, FOSS DS2500, Denmark). Immediately after, a digital polarimeter and a refractometer simultaneously measured pol and brix content, respectively. Measurements were done in duplicates at 25°C. Partial least square regression (PLS-R) model was developed from second derivative preprocess spectra. Data were analyzed using MATLAB software. DEM and SEM samples were divided into a Calibration (Cal) set (75%) and a validation (Val) set (25%). Cal sets were grouped to form a unified calibration model and the model was validated with Val sets from DEM and SEM using PLSR and accuracy was evaluated based on SEP and Bias.

Results

NIR juice absorbance depicted chlorophyll, O-H, C-H, and N-H absorptions. DEM yielded a 0.67% higher pol than SEM, with a significant difference of $p < 0.05$. The lower pol in SEM juice was attributed to excessive rupturing of the parenchyma cells in the phloem tissues of the fibers. The unified PLS calibration model identified juice differences with biases of -0.32% (DEM), and 0.35% (SEM), Figure 1.

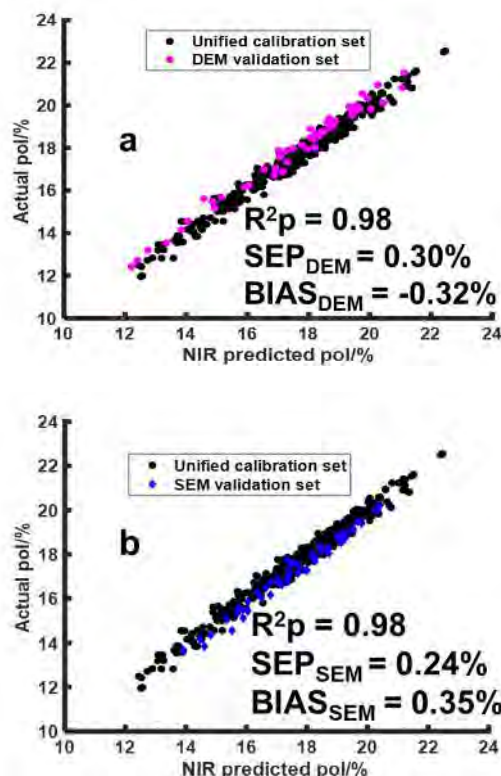


Figure 1. Unified calibration model validating DEM (a) & SEM (b) sugarcane juice

Conclusion

Unified calibration model predicted pol content in cane juice with SEP of 0.30% and 0.24% for DEM and SEM, respectively. These results indicate that JEMs yield varying amounts of pol in the juice. Therefore, farmers and sugar millers should consider the extraction method used when planning for the harvesting season.



所属：農水圏資源環境科学専攻
水産資源環境科学連合講座
鹿児島大学

職名：2 年

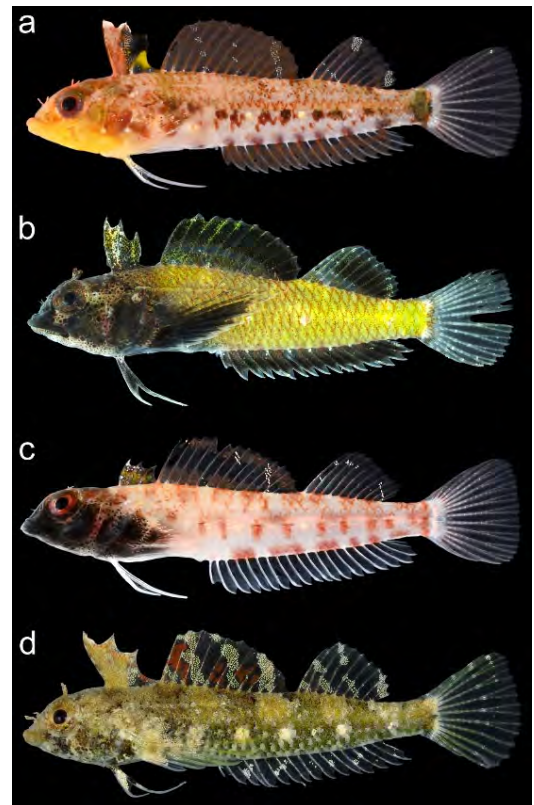
氏名：出羽優風

学 会 賞 名：Best Student Oral Award （最優秀学生口頭発表賞）

受賞研究題目：Species diversity of the triplefin genus *Enneapterygius* (Perciformes: Tripterygiidae) in Japan

受賞年月日：2024 年 5 月 29 日

ヘビギンボ属 *Enneapterygius* Rüppell, 1835 はインド・太平洋の熱帯から温帯域にかけて広く分布し、主に浅い岩礁域やサンゴ礁域に生息する小型魚類です。ヘビギンボ属はヘビギンボ科を構成する各属のうち最も種多様性に富むグループで、現在 67 有効種が知られており、日本国内ではこのうちの 20 種が記録されています。日本国内では林（2013）が日本産のヘビギンボ科魚類の総括を行って以降、本属魚類の 2 新種 1 初記録種が報告されています。しかし、現在にいたるまで南日本を中心に本種の未同定種が多く記録されており、種レベルでの分類学的整理が急務であることが示されていました。また、本属魚類の各種の識別的特徴として用いられる特徴の多くは雄の標本においてのみ確認されるものであり、日本産の本属魚類に限っても既報の検索表に基づき各種の雌を識別することは困難な状況にありました。そのため、本研究では日本産ヘビギンボ属魚類の分類学的再検討を行い、各種の標徴および国内における分布状況を明らかにすることを目的としました。本研究では国内外の研究機関に所蔵されているヘビギンボ属 716 標本を使用し



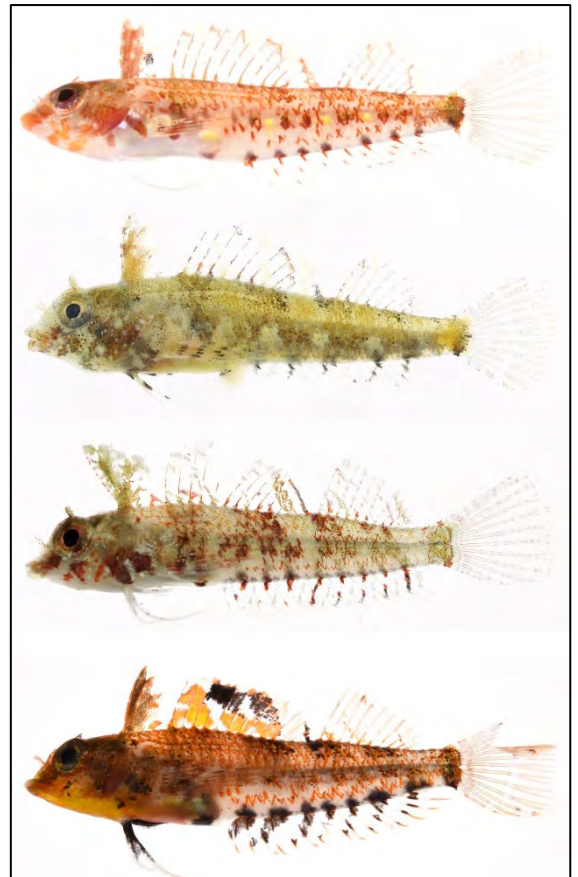
日本国内から確認された 4 未記載種

て形態観察を行うとともに、一部の種については遺伝子解析を行い、ミトコンドリアゲノムの 12S rRNA ならびに COI 部分塩基配列領域を決定し、比較を行いました。これらの調査の結果、これまでに台湾からのみ記録されていた *Enneapterygius erythrosoma* が初めて日本国内から報告されました。さらに、本研究により、日本国内から既知種と明瞭に識別される 4 未記載種 [*Enneapterygius* sp. 1 (分布域：屋久島), *E. sp. 2* (奄美群島・沖縄諸島), *E. sp. 3* (琉球列島), *E. sp. 4* (屋久島・沖縄諸島)] が確認されました。以上の結果から日本国内から確認されたヘビギンボ属の総種数は 25 となりました。これらの成果は 2024 年 5 月 28-29 日にマレーシア・ペナンで開催された第 7 回アジア魚類国際会議（The 7th International Conference of the Asian Society of Ichthyologists 2024）で発表されました。

学 会 賞 名：2024 年度日本魚類学会 優秀口頭発表賞
受賞研究題目：セグロヘビギンポ類似種群の分類学的研究
受賞年月日：2024 年 9 月 9 日



ヘビギンポ科ヘビギンポ属魚類 *Enneapterygius* Rüppell, 1835 はインド・太平洋の熱帯域から温帯域にかけて広く分布する小型の底生性魚類で、同海域から現在 68 有効種が知られています。このうち、セグロヘビギンポ *Enneapterygius tutuilae* 類似種群は比較的小型であること、前方有孔側線鱗数が 5–13 と少ないこと、後方欠刻側線鱗数が 18–29 と多いこと、高い第 1 背鰭をもつこと、胸鰭軟条が不分枝であること、および第 2 背鰭に黒色域をもつことなどから特徴づけられます。本類似種群は *Enneapterygius altipinnis* Clark, 1980 (紅海)、*Enneapterygius kosiensis* Holleman, 2005 (南アフリカ)、*Enneapterygius mirabilis* Fricke, 1994 (西太平洋)、セグロヘビギンポ *Enneapterygius tutuilae* Jordan and Seale, 1906 (インド・太平洋)、およびホタテヘビギンポ *Enneapterygius velatus* Tashiro, Senou and Motomura, 2018 (日本) の 5 有効種、および *E. tutuilae* の新参異名とされている *Tripterygium callionymi* Weber, 1909 と *Enneapterygius waigiensis* Herre, 1935 の 2 名義種により構成されます。本類似種群の 7 名義種のうち、広域分布種の *E. tutuilae* は先行研究により色彩に多型があることが報告されており、複数種を内包する可能性が示唆されていました。そのため、本研究においてインド・太平洋から得られた *E. tutuilae* に同定される標本を精査した結果、*E. tutuilae* を含む既報の 7 種と形態的に異なる 4 未記載種 (*Enneapterygius* spp. 1–4) が確認されました。これら 4 未記載種は腹部の被鱗域の有無、前方有孔側線鱗数や胸鰭長、腹鰭第 2 軟条長をはじめとする複数の計数・計測形質の組み合わせにより識別されます。さらに、ミトコンドリアゲノムの COI 領域を対象とした遺伝子解析の結果からも 4 未記載種の存在が支持されました。本研究の成果は、2024 年 9 月 6–9 日にかけて福岡市で行われた第 58 回日本魚類学会年會にて発表されました。



セグロヘビギンポ類似種群の 4 未記載種

◇寺田教授が日頃より研究調査の一環として取り組んでいる環境省事業の「モニタリングサイト 1000 沿岸域（磯・干潟・アマモ場・藻場）調査」において、その多大な貢献に対し、感謝状が贈られました。



◇連大行事と活動

連合農学研究科学位記授与式

令和6年9月27日に令和6年度前期学位記授与式、令和7年3月7日に令和6年度後期学位記授与式が挙行されました。

授与式後は、修了生の指導教員らとともに新たな博士の誕生を喜びました。

学位記授与式（前期）

【課程博士6名】

- ・日本人2名
- ・外国人留学生4名（バングラデシュ1名、中国1名、スリランカ2名）



学位記を手渡す

鹿児島大学大学院連合農学研究科
北原 兼文研究科長



修了生を代表して謝辞を述べる
西谷さん

学位記授与式（後期）

【課程博士 14 名】

- ・日本人 6 名
- ・外国人留学生 8 名（ベトナム 2 名、ソロモン 1 名、バングラデシュ 1 名、ミャンマー 1 名、タイ 1 名、スリランカ 1 名、インドネシア 1 名）

【論文博士 2 名】

バングラデシュ 2 名



修了生を代表して謝辞を述べる
大江さん



全員で記念撮影

連合農学研究科入学式

令和 6 年 10 月 4 日に令和 6 年度入学式（後期）、令和 7 年 4 月 11 日に令和 7 年度入学式（前期）が
行われました。

令和6年度入学式（後期）

- ・外国人留学生3名
(スリランカ2名、インドネシア1名)



入学生を代表して宣誓する

エカナヤ ジャヤスンダラ ムディヤンセラゲ
サマディ カビンディヤ ディサナヤさん



北原連合農学研究科長による
告辞

令和7年度入学式（前期）

- ・日本人 18 名
- ・外国人留学生 15 名（スリランカ 2 名、中国 7 名、フィリピン 2 名、モザンビーク 1 名、ウガンダ 1 名、カメルーン 1 名、パキスタン 1 名）



入学生を代表して宣誓する

ナンプンダ ジュニア ジョセフ マテウスさん



井戸 章雄学長による告辞

令和6年度 全国連合農学研究科協議会

大学院連合農学研究科における教育及び運営等に関する諸問題を協議し、連合農学研究科の充実と発展を図ることを目的として、全国連合農学研究科協議会（以下「協議会」という。）が置かれている。

協議会は、構成大学全体会議と研究科長会議を包含し、構成大学全体会議は年1回、研究科長会議は年2回開催することとされ、さらに、研究科長会議は特に必要な場合は臨時に開催することができる。とされている。

開催時期は、基本的に6月に構成大学全体会議と研究科長会議を東京農工大学大学院連合農学研究科が幹事となり開催し、研究科長会議は10月又は11月に東京農工大学以外の5連大の持ち回りにより開

催している。

なお、令和 6 年度の秋の同研究科長会議は、鳥取大学の当番で実施され、活発な意見交換があった。

全国連合農学研究科協議会規約

(昭和60年 5月28日制定)

(目的)

第1条 大学院連合農学研究科における教育及び運営等に関する諸問題を協議し、連合農学研究科の充実と発展を図ることを目的として、全国連合農学研究科協議会（以下「協議会」という。）を置く。

(組織)

第2条 協議会は、次の二種の会議を包含し、それぞれの会議は次の職にある者をもって組織する。

- 一 構成大学全体会議：各連合農学研究科の研究科長・専任教官及び各構成大学の農水産学部長（単科大学長を含む。）
- 二 研究科長会議：各連合農学研究科の研究科長及び専任教官

(委員以外の者の出席)

第3条 協議会が必要と認めたときは、議題により関係者の出席を求めることができる。

(会議の開催)

第4条 協議会の開催は、次のとおりとする。

- 一 構成大学全体会議は、国立大学農学系学部長会議の開催に合わせて、年1回開催する。
- 二 研究科長会議は、年2回開催する。ただし、特に必要がある場合は、臨時に開催することができる。

(庶務)

第5条 協議会の庶務は、東京農工大学大学院連合農学研究科が各構成大学の協力を得て処理する。

(雑則)

第6条 この規約に定めるもののほか、協議会の運営に関して必要な事項は、協議会が定める。

附 則

この要項は、昭和60年5月29日から実施する。

附 則（昭和63年7月1日）

この要項は、昭和63年7月1日から施行する。

附 則（平成3年6月7日）

この要項は、平成3年6月7日から施行する。

附 則（平成6年6月8日）

この規約は、平成6年6月9日から施行する。（連合農学研究科間連絡会議要項の改正。）

附 則（平成8年6月7日）

この規約は、平成8年6月8日から施行する。

附 則（平成11年6月4日）

この規約は、平成11年6月5日から施行する。

連合一般ゼミナール「農学共通講義」

「農学共通講義」は、全国6つの連合農学研究科が合同で行う集中講義形式授業であり、年2回（前期：日本語、後期：英語）開講される。SINETによる「多地点制御遠隔講義システム」を活用し、6連合農学研究科が連携し、高い専門性、幅広い分野の講師を年度ごとに選定して開講している。

本特別講義は、前期連合一般ゼミナール、後期連合一般ゼミナールとして平成21年度から、全国6連合農学研究科連携のもと、選択科目として開講されたもので、全3日間で90分授業を12コマ用意している。

開催にあたっては、6連合農学研究科の持ち回り担当にて、後期（英語）及び前期（日本語）を1サイクルとしている。

当該ゼミナールの講義名、修得コマ数及び付与単位に関しては、各連合農学研究科に委ねられており、本研究科においては、前期（日本語）に関しては「農学共通講義Ⅰ（日本語）」、後期（英語）に関しては「農学共通講義Ⅱ（英語）」として開講している。また、単位に関しては4コマ修得で0.5単位、8コマ以上で1単位としている。

令和6年度前期（日本語）は岩手大学担当にて、令和6年6月19日（水）～21日（金）まで実施され、鹿児島連大からは講師として、熊谷百慶鹿児島大学助教と下地博之琉球大学准教授が講師を務めた。また、令和6年度後期（英語）は東京農工大学担当にて、令和6年11月13日（水）～15日（金）まで実施され、鹿児島連大からは講師として、侯徳興鹿児島大学教授と堀谷正樹佐賀大学教授が講師を務めた。

前期日本語の講義はすべて日本語で、後期英語の講義はすべて英語で行われるもので、専門的知識を修得するとともに、他連大の学生と講義を共有することにより幅広い視野を持てるものと期待している。

本特別講義は、SINETを利用して6連合農学研究科が同時受講する。

6連合農学研究科は、次のとおりである。

- （１）岩手大学大学院連合農学研究科
（岩手大学、弘前大学、山形大学）
- （２）東京農工大学大学院連合農学研究科
（東京農工大学、茨城大学、宇都宮大学）
- （３）岐阜大学大学院連合農学研究科
（岐阜大学、静岡大学）
- （４）鳥取大学大学院連合農学研究科
（鳥取大学、島根大学、山口大学）
- （５）愛媛大学大学院連合農学研究科
（愛媛大学、香川大学、高知大学）
- （６）鹿児島大学大学院連合農学研究科
（鹿児島大学、佐賀大学、琉球大学）



中間発表会

本研究科概要には、本研究科のアドミッション・ポリシーを掲載するとともに、各専攻・連合講座毎に、学生が身に付ける学力、資質・能力や養成しようとする人材像等についての方針が記述されている。これらについては本研究科のホームページにも掲載し、広く学内外に周知している。学生の指導は、学生1名に対し、主指導教員1名と副指導教員2名の計3名の指導教員があたっているが、1年次の学生については「中間報告会」、2年次の学生については研究成果の「中間発表会」を行い、その達成状況を検証している。特に、2年次学生による中間発表会には、多地点遠隔講義システム（SINET）により、各構成大学に配信され、学部生、修士学生及び教職員だれでも聴講することができるため、特に学生においては、他の学生の研究進捗状況を知る手段となり、自己研鑽の最適の要素となるものである。

中間報告会後の研究指導報告書には、1) 研究経過及び指導内容、2) 研究の進捗状況（学会誌への投稿状況及び3年以内に学位論文が提出できる可能性）、3) アドミッション・ポリシーについて（アドミッション・ポリシーに当該学生が沿っているか）の項目を設け、「中間発表会」終了報告書には、1) 研究の進捗状況（学会誌への投稿状況及び3年以内に学位論文が提出できる可能性）、2) 今後の指導方針の項目を追加し、研究教育指導達成状況をより具体的に把握できるようになっている。

ティーチング・アシスタント（TA）研修会

本研究科では在学生を修士課程及び学士課程の教育補助者（ティーチング・アシスタント：TA）、あるいは研究補助者（リサーチ・アシスタント：RA）として採用し、教育研究指導者としてのトレーニングの機会を提供している。

平成 18 年度から TA の手引きを作成し、任務遂行のために必要な基本事項の周知を図ると共に TA 活動実施報告書の提出を義務づけている。さらに平成 19 年度からは教育者の資質を効果的に向上させるシステムの一環として、TA 活動の実態をより詳しく把握するため、アンケート形式の TA 活動評価調査を開始した。TA を行った本人が提出する活動報告書ならびに TA による指導を受けた学生を対象とした活動評価調査の結果は、集計後、TA を行った本人達へフィードバックしている。

さらに、平成 20 年度からは各構成大学にて、本研究科学生を対象とした TA 研修会を連大主催で開催し、「TA は大学の非常勤職員の扱いとなり、教職員と同じ立場である」という点も、強く認識してもらうよう図っている。

平成 19 年度から令和 6 年度のアンケート形式の TA 活動実施報告書によれば、TA を行ったことにより、将来学生を指導する際のトレーニングとして「とても役に立った」とする意見が圧倒的であり、「まあまあ役に立った」を含めると 9 割以上の学生が TA 制度について有意義であると感じている。

次表は、平成 30～令和 6 年度の TA, RA の採用状況である。ここ数年の TA の減少傾向は、入学者の減少によるものである。

TA と RA の構成大学別年度採用数

年度	30		R1		R2		R3		R4		R5		R6	
職種 構成大学	TA	RA	TA	RA	TA	RA	TA	RA	TA	RA	TA	RA	TA	RA
佐賀大学	13	3	13	4	13	3	13	3	13	4	13	3	20	5
琉球大学	19	3	14	5	12	0	19	3	14	5	12	0	6	4
鹿大農学部	9	9	9	4	7	3	9	9	9	4	7	3	6	5
鹿大水産学部	8	4	5	3	7	4	8	4	5	3	7	4	2	4
連大	2	0	2	1	1	3	2	0	2	1	1	3	2	4
合計	51	19	43	17	40	13	51	19	43	17	40	13	36	22

分野別セミナーの開催

平成 24 年度から、構成大学間の連携を促進し、さらに地域特性に根ざした産学官の連携も視野に入れて、連大生を中心とした若手研究者の意欲の向上に資することを目的とした「分野別セミナー」を開催している。令和 6 年度は、1 件の分野別セミナーが開催された。

セミナー名称：応用生命科学専攻 分野別セミナー（農芸化学）

開催日時：令和 7 年 2 月 27 日～令和 7 年 2 月 28 日

会 場：琉球大学農学部 206 講義室・多目的室

【セミナーの実施内容】

令和 6 年度の分野別セミナー（農芸化学分野）を令和 7 年 2 月 27 日～28 日の日程で実施した。初日は、琉球大学農学部 206 講義室において 13 時半より開会し、代表者から外部講師 2 名の経歴について紹介が行われた。その後、数少ない糸状菌分類の専門家である帝京科学大学の野中健一先生によるセミナー①「産業利用を目指した糸状菌ライブラリーの構築」が行われ、海洋島を含む日本国内の各離島から採集した希少糸状菌について主に講演していただいた。続いて、天然物化学のものとり分野で活躍されている静岡理工科大学の鎌田昂先生によるセミナー②「フィールドワークと実験科学の両輪でアプローチする新規天然物の探索」が行われ、フィールドにおける“新規化合物”という宝もの探し、ならびに研究室運営における学生との関わり合いについて情熱的に語っていただいた。2 題の講演後、会場を多目的室に移して 14 名の大学院生によるポスター発表が実施され、1 時間を超える活発な議論が絶え間なく行われた。最後に、沖縄の地酒である各種泡盛の試飲・飲み比べを交えた交流会を実施した。2 日目のエクスカーションでは、オリオンビールおよびヘリオス酒造を訪問して工場見学を行った。

【得られた成果・意義】

特殊な経歴・職歴をもつ 2 名の外部講師を招へいし、熱意のこもった講演・プレゼンテーションを目の当たりにすることで、多くの学生に良い刺激を与えることができた。さらに、参加者とは異なる研究分野かつ最先端の研究内容に触れ、今後の研究に活かせる知識の習得につながった。2 題の講演およびポスター発表に参加した多くの学生、特に修士課程の学生および学部生から好評を得ており、博士課程や修士課程に進学する意欲を高められたことは大きな成果となった。また、交流会を通じて参加者の研究交流をより深めることができ、今後の共同研究を展開させる良いきっかけになったと思われる。エクスカーションにおいては、一般的な工場見学では見ることの難しい製造現場を視察することができ、貴重な体験を得ることができた。

令和6年度 連合農学研究科（博士課程）「農学特別講義（一般セミナー）」実施報告

令和6年度鹿児島大学大学院連合農学研究科（博士課程）「農学特別講義（一般セミナー）」が、令和6年11月6日（水）から11月8日（金）の3日間で開講された。開講趣旨は、本連合農学研究科に在籍する学生に本学の教育理念に基づき、幅広い専門領域の先端知識に触れるとともに、各学生によるプレゼンテーションやポスターセッションなどを通じて発表能力、課題探求能力、創造性を養うことにある。令和2年度・3年度は、新型コロナウイルス感染症対策によりオンラインで実施したが、令和4年度より対面で実施し、令和6年度は本学学習交流プラザにて対面で実施した。内容は、外部から招聘した講師による講義4コマと、学生による「専攻セミナー（1年生プレゼンテーション）」、「情報交換セミナー（2年生ポスターセッション）」で、参加学生数は66名であった。

初日は13時から受講受付ののち、13時30分から開講式が行われた。開講式では、北原兼文連合農学研究科長による挨拶があり、玉置尚徳教授から日程及び注意事項が説明された。

○講義4コマについて

セミナーA：北海道大学の坂爪浩史先生による講義「農産物流通過程短縮化のワナ」が行われた。はじめに、日本における農学校の歴史について説明があり、現在90以上の大学に農学部や園芸系の学部があることが紹介された。本題では、農産物が生産者から消費者へ到達するまでの数段階ある流通過程についてのコスト論であったが、中間業者を省き産地直送にすることが必ずしも費用節約につながるわけではないことを提示された。現在の多段階流通が効率的である、という結論は予想外であった。講義後は、学生からの質疑も活発であった。コーディネーターは鹿児島大学農学部 坂井教郎代議委員。

セミナーB：九州大学の田畑俊範先生による講義「数値解析モデルを活用した農業農村地域の水環境の最適管理に向けた研究」が行われた。はじめに、アフガニスタンで長年に渡って灌漑事業に取り組んだ故中村哲氏の業績に触れ、中村氏がモデルとした取水堰である、200年以上前に筑後川流域に建設された山田堰の傾斜の取り方や有用性について説明を受けた。後半は有明海のノリ養殖にとって重要なファクターとなっている栄養塩変化のシミュレーションを通して農水圏の持続的生物生産における問題を解決する事例を紹介いただいた。コーディネーターは佐賀大学農学部 弓削こずえ代議委員。

セミナーC：早稲田大学大学院理工学術院の梅野太輔先生による講義「材料化学者が想う合成生物学のかたち」が行われた。生物学は異分野の「感性」が持ち込まれるたびに不連続的な進歩を遂げてきた。また、高分子化学の感性を原資に「俺の革命」を起こすことを夢見て生物工学分野に飛び込んだ研究者の立場から、生物のどこに魅力を感じるのか講義が行われた。これは聴講した学生に夢を与えるものであり、各自の研究に対する意欲の向上に貴重な機会であった。コーディネーターは佐賀大学農学部 宗伸明代議委員。

セミナーD：秋田県立大学生物資源科学部の藤田直子先生による講義「ありふれた謎多き物質、「澱粉」の科学～変異体米を用いた基礎から品種育成まで～」が行われた。「澱粉」は人間に身近な物質でありながら謎多き物質であることが説明され、その所以が紹介された。また、血糖値上昇抑制を抑制する澱粉を含有する米の品種開発について説明が行われ、今後は温暖化に対する課題についても説明が行われた。学生にも身近な「米」や「澱粉」から農学の役割を考える貴重な学びの場となった。

コーディネーターは鹿児島大学連合農学研究科 北原兼文研究科長。

○専攻セミナー（プレゼンテーション）について

今年度の1年生の専攻セミナーは、2日目の午前9:00～10:30並びに10:40～12:20の時間に2つのグループに分かれて行われた。多くの学生が、英語でのプレゼンテーションを行い、中には、日本語で発表する留学生も見られた。特に日本人学生にとっては、初めての英語でのプレゼンテーションということもあり、緊張している場面も見られたが、参加した学生からは、大変貴重な経験となったと達成感を感じる学生も多く見られた。ただ、教員からの英語での質問に対しては、聞き取り、回答のいずれにおいても苦勞する学生が多く見られたことから、今後、英語によるプレゼンテーションや、ディスカッションの機会を増やすことが重要であると感じた。

○情報交換セミナー（ポスターセッション）について

情報交換セミナーでは、30人の2年生が、初日15:40～17:10 および2日目15:10～16:40に、学習交流プラザ/学習ラウンジ4でポスター発表を行った。会場には2年生30人のポスターが同時に設置されたが、懸案事項であった発表時のポスター周辺の混雑を避けるために、発表は2グループに分けて実施された。また、今年度から、情報交換セミナーを活性化する方策として「優秀ポスター発表賞」が設けられた。投票は、農学特別講義（一般セミナー）の受講生と連大代議委員で行われ、3人の受賞者が選ばれた。2年生に対する事後アンケートでは、97%の受講生は意義があるまたは、少しは意義があると回答しており、ポスター発表に対する学生の満足度は高い。個別コメントでは、複数の受講生がポスター発表の利点として、専門分野外の学生と研究上の意見交換ができたことを挙げていた。一方、「優秀ポスター発表賞」については、その意義は認めるものの、受賞者選考の公平性について問題点を指摘する回答が幾つかあった。その一つとして、多様な専門分野がある中で研究内容の価値を評価して投票できるか疑問である点、投票結果は研究分野や所属大学の人数に依存するのではないかという点を指摘するものがあった。活性化のみならず公平性の観点から選考方法に検討を加えつつ、「優秀ポスター発表賞」を継続することが望まれる。

2024年度 農学特別講義(一般セミナー)時間割
Program for the 2024 Agricultural Science (General Seminar)

会場：鹿児島大学 学習交流プラザ/連合農学研究科棟
Venue: Kagoshima University Student Community Plaza/Rendai Building

11月6日(水) November 6(Wed)		13:00	13:30	14:00	15:30	15:40	17:10	17:30	19:00
		受付 Reception	開講式 Opening	セミナーA SeminarA 講師: 坂元浩史 Lecturer: SAKAUMI Hiroshi 農産物流通経路に携わるワナ Strains of Supplying Food Supply Chain	休憩 Break	2年生ポスターセッション Poster sessions 2nd grade students		交流会(自由参加) Meetup(Participation is not required)	
				学習交流ホール		学習ラウンジ4		学習ラウンジ1	

11月7日(木) November 7(Thur)	受付 Reception	10:30	10:40	12:20	13:30	15:00	15:10	16:40
		専攻セミナー (1年生プレゼンテーション) Major Advanced Seminar (1st grade students Presentation)	休憩 Break	専攻セミナー (1年生プレゼンテーション) Major Advanced Seminar (1st grade students Presentation)	昼食 Lunch	セミナーB SeminarB 講師: 田畑健樹 Lecturer: TABATA Toshinori 畜産遺伝子組換え技術の導入管理 Optimal Gene Environment Management in Agricultural Areas A Numerical Modeling Approach	休憩 Break	2年生ポスターセッション Poster sessions 2nd grade students
				学習交流ホール/連大3階会議室		学習交流ホール		学習ラウンジ4

11月8日(金) November 8(Fri)	受付 Reception	10:30	10:40	12:10	12:20	12:30
		セミナーC SeminarC 講師: 亀野太輔 Lecturer: UMENO Daisuke 植物化学が語る合成生物の新たな Way better synthetic biology/Material science's perspective	休憩 Break	セミナーD SeminarD 講師: 藤田直子 Lecturer: FUJITA Naoko ありふれた多量多糖「糊粉」の科学 〜芽生体を用いた高糖化の解明まで〜 The Science of Starch: A Common and Mysterious Material From the Basics to Bread-making Using Malted Rice	休憩 Break	閉講式 Closing 写真撮影 Group Photo
学習交流ホール						

令和6年度 連合農学研究科「人材養成学生支援セミナーI」実施報告

令和6年7月24日(水)に「人材養成学生支援セミナーI」がオンライン(Teams)で開催された。本講義は、大学・研究所・企業等で活躍中の方々を講師として招き、企業や社会でどのような人材が求められているか等、今後の研究者・指導者としての道を開くための講義であり、連大生の受講者に加え、学部及び修士の学生にもオープンにしている。

セミナーは4つの講演と質疑応答からなり、その概要は以下のとおりである。

講義1：森松 嘉孝 先生(久留米大学医学部環境医学講座)

題目：研究者ダイバーの倫理 ～本邦における事故事例と海外の倫理～

本講義では、森松氏の経歴紹介の中で、一つのテーマに集中して研究を行うことの重要性や、自身がフランスの大学院での経験から培った多様な視野や価値観をもつ必要性を訴えられ、これから研究者を目指す学生への助言をいただいた。また、現在は研究者ダイバーの安全向上を目指す研究を行っており、調査潜水は研究に重要なスキルであるにもかかわらず、その安全性には一定の基準がない現状が紹介された。高度な技術を持ちながらも命の危険にさらされている研究ダイバーの安全性について考える機会が提供された。

講義2：安田 元 先生(Bioret Corp)

題目：農業技術革新と畜産経営/Agricultural Technology Innovation and Livestock Management

本講義では、安田氏が携わってこられた研究を通して、現在の畜産技術の現状と問題に触れつつ、農業技術の導入が畜産業に与える影響とその重要性について講義された。特に、近年では畜産経営においてアニマルウェルフェアと地球温暖化への配慮を両立させることが重要となり、環境負荷の軽減や持続

可能な畜産経営の実現に向けた技術革新の具体的な取り組みが紹介された。講義の最後には、家畜経営の持続可能かつ競争力のある畜産業発展のために、周囲の環境を大切に、個々の家畜を健康に飼養することを両輪で進めることが重要であるなど、受講者にはこれからの家畜経営の在り方を考える良い機会となった。

講義3：藤田 友紀 先生（キッコーマン株式会社 研究開発本部）

題目：博士の生き方

本講義は、藤田氏ご自身が高校時代、大学時代、大学院時代、そして企業時代と、どの様な思いでキャリアを選択してきたかについて触れながら、「博士が企業で働くこと」とはどの様なことかについて分かり易く、しかも、女性研究者の立場から講演していただき、学生にとっては参考になる良い内容であった。また、キャリア選択をしていく上で個々の価値観に囚われずに、激動で多様な時代を生き抜いていく学生さんには、是非広い視野でキャリアを選んでいただきたいとの強いメッセージがあった。そして、博士課程に進学した際の「研究が好き」との気持ちを、多様な状況に当てはめながらポジティブに1人1人が納得のいくキャリアを選ぶ事を応援するとのエールが本講義で送られた。質疑も活発に行われ、博士課程学生が今後のキャリアを考える上で、大変有意義な講義であった。

講義4：富高 保弘 先生（国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構 植物防疫研究部門）

題目：私のキャリアヒストリー：スキルを生かした戦略

本講義は、鹿児島大学大学院連合農学研究科在学中に、植物の病気の診断同定に関する研究からスタートして根幹となる技術と知識を礎にしつつ、分子生物学や情報科学など最新のスキルを身に付けて研究を発展させることができた。そして、現在では、一連の経験からの強みとスキルを活かしつつ研究課題を分析し、計画を立案する立場に繋がったとの、富高氏の現在に至るまでの実体験が紹介された。同時に、博士課程を修了した者には、課題を発見する能力と、それを解決するための計画の立案能力と論理的思考が求められているといった強い助言を頂いた。さらに、学術研究の意義は、未知の現象を解明して知識を深化させる学術的意義と研究成果の応用による社会生活に貢献する社会的意義に大別され、特に農学研究は社会的意義が大きい研究分野であることが、現在まで取り組んでこられた研究成果を踏まえて説明された。

人材養成学生支援セミナーⅠ 2024 日程表 Human Resource Development Seminar I 2024									
8:30	9:00	10:30	12:40	12:10	13:30	15:00	15:10	16:40	
7月24日(木)	開演1	休憩	講義2	昼食	講義3	休憩	講義4		
	研究者ダイバーの物語 ～未来における事業価値と海外の展開～ モリマツ コシタカ 講師名 森松 嘉孝 久留米大学農学部		農業技術革新と畜産経営 ヤスダ ハジメ 講師名 安田 元 Bicret Group		博士の生き方 フジタ ユキ 講師名 藤田 友紀 キッコーマン株式会社 研究開発本部		私のキャリアヒストリー： スキルを生かした戦略 トミタカ ケイジロ 講師名 富高 保弘 国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構 植物防疫研究部門		
	コディ・ボナ	石川 学(監修)	飯井 義郎(監修)		宗 幹明(監)		酒井 一人(監)		

オンライン (Microsoft Teams) 開演

当春大学 遠隔大学

2024 度開講報告書 鹿児島大学連合農学研究科人材養成学生支援セミナーⅡ 洋上セミナー

2025年7月31日
鹿児島大学水産学部 中村 啓彦 小針 統

1. 洋上セミナーの開催趣旨

鹿児島大学大学院連合農学研究科の博士課程大学院生2名を対象に、2024年11月9日～18日の期間、鹿児島大学水産学部附属練習船「かごしま丸」を利用して人材養成学生支援セミナーⅡ（洋上セミナー）を開講した。この洋上セミナーでは、国内外の研究教育機関から海洋観測・サンプル採取するために乗船した研究者・技術者と協働しながら、研究者・高度技術者としてのキャリアをデザインする能力・経験を涵養するための実践型教育研究実習を実施している。具体的には、「我が国の水産資源を支える黒潮流域の海洋環境と生態系を明らかにする」という研究プロジェクトに基づき、連大生とともに観測を実施し取得資料を考察することにより、研究者を目指す実習生（連大生）と専門家（担当教員・外部研究者）が協働して大きなサイエンスを志すという試みである。その結果、専門家は実習生の自然観や人生観に影響を与え、専門家は実習生と共に学問を発展させられれば、この試みは成功と考える。

これらの目標を達成するため、下記のような教育コンテンツを入れている。

- ① 洋上セミナー実習生が、研究者や他の学生たちと一体感を感じ、責任感を自覚するような作業を行う（交代制グループワーク・データ解析）
- ② 異なる学問領域をバックグラウンドにもつ実習生・研究者の相互理解を促し、洋上生活を充実させる内容を入れる（洋上セミナーⅠ・洋上セミナーⅢ）
- ③ 実習生がキャリアデザインできるような内容を入れる（洋上セミナーⅡ）

以下、その実施状況を報告する。

2. 乗船者および指導教員

鹿児島大学大学院連合農学研究科（2名）

藏 蘭 秀 伍	鹿大	先端応用生命科学連合講座
マキヒチ カシナ ママ	鹿大	水産資源環境科学連合講座

指導教員（2名）

中村 啓彦	連大 農水圏資源環境科学専攻（鹿大/水産学部）
小針 統	同上

鹿児島大学教員（2名） ※鹿大農林水産学研究科 外洋域乗船実習 指導教員

仁科 文子	鹿大/水産学部
堤 英輔	同上

その他の乗船者（11名）

農林水産学研究科外洋域乗船実習 1名

他大学の教員・学生による共同利用 4名(愛媛大学)

共同研究による余席利用

7名(鹿大、九州大学、東京大、OIST)

3. 実習海域

鹿児島湾口、東シナ海北部の大陸棚斜面縁辺

4. 活動記録

11月09日(土)	09:00	乗船最終時刻、船内生活説明
	10:00	出航。出航後、救命艇操練
	12:00	観測打合せ
	13:00	観測開始(観測海域: 鹿児島湾口)
		観測内容
		1) 他大学・他機関の研究者・学生との共同観測
		➤ 水温・塩分・乱流等の観測(各種観測機器のオペレーション)
		➤ 栄養塩・生物サンプル採取・処理
		連大生は研究者・修士学生と共に、4時間交代で観測に従事
11月10日(日)	09:00	下甑島沖で係留系の設置作業と海洋観測
	17:00	セミナーI(自己紹介)
		セミナーII(OISTのDr. Dudsadee Leenawaratの講演)
		講演内容:
		1) Responses of the lower-trophic level to monsoon and ENSO in the Gulf of Thailand ecosystem
		2) Dynamics of mesoscale eddies and their ecological impact in the Okinawa Sea including the overview of OIST (Okinawa Institute of Science and Technology)
		その後、乗船者も交えて歓談
11月11日(月)~15日(金)		
	終日	九州西方の大陸棚縁辺海域で係留系の回収・設置作業と海洋観測
		観測の合間にセミナーIIIを開催
11月16日(土)	08:00	鹿児島湾口部で係留系の回収作業。11時頃、観測終了
	午後	後片付け
	15:30	谷山港接岸
11月17日(日)	午前	船内掃除
	午後	自由行動
11月18日(月)	09:00	機材積卸
	12:00	解散(於: 水産学部)

5. 実習内容

出港翌日の11月10日、異なる学問領域をバックグラウンドにもつ実習生の相互理解を促し洋上生活を充実させるため、修士課程の実習生も含めて自己紹介・研究紹介を行うセミナーIを開催した。その後、共同研究のため乗船した OIST の Leenawarat 博士(タイ出身の研究員)から、自身の研究キャリア形成と研究自体の講演、さらに現在所属している OIST についての紹介を受けた。

洋上セミナーの実習生には、海洋学という学問領域を1つのケースとして、高度で先端的な研究プロジェクトの一員として実習に参加することを要望するとともに、先端的な観測からしか経験することができない充実感を体感し、指導教員や他大学から乗船する研究者・学生との交流を通して自らの経験・知見を広げることを要望した。また、異なる学問領域における関心・方法論を理解するのみならず、大型洋上施設を利用しながら特殊な状況下で組織的に行う学術領域の研究現場を実体験することも要望した。乗船期間中、連大生はその他の乗船者とともに2つの観測班に編成されて観測作業に従事した。

実習で行われた観測、セミナーII での Leenawarat さんの講演に関する写真を添付する。また、実習生の藏菌さんとマラマさんの、実習に対する感想を一部抜粋して掲載するので、参照されたい。

実習に対する感想(藏菌)

今回の実習に参加することができて、良かった点が三つある。

一つ目は他学部のデータの採取方法を実際に見ることができたことである。私は農学部で焼酎の研究をしているが、フィールドワーク的な要素は一切なく、一人で研究することが多い。その点、今回の実習では、一人でデータを取ることは不可能でありチームワークを発揮しなくてはならない。研究分野によってはこのように他との協調性をもって、データの精度を高めていかねばならないことを知ることができ、自分自身の今後の研究活動の幅が広がったように感じた。

二つ目は、船の中でルールを守ることの大切さを知ることができたことである。洋上での実習であったため、ヘルメットやライフジャケットの着用や、ロープの上を跨がない、ブリッジに上がる時は許可を得るなど、身近に危険があるゆえに守らなくてはならないルールが多かったように思える。私が所属する研究室でも危険な試薬や環境があるが、長く研究室に滞在しているがゆえに慣れてしまっていることに気が付いた。慣れが生む油断を見直す契機となった。改めて、ルールの順守に努めたいと思う。

三つ目は鹿児島大学、愛媛大学、東京大学、九州大学、OIST の研究チームと話す機会があったことである。他分野かつ他大学の研究者から直接研究内容だけではない研究生活を伺い、異なる視点や環境を知ることができ刺激をいただき、研究意欲が高まった。

実習に対する感想(マラマ)

The onboard training was a great learning experience for me, especially having to learn a different aspect of research relating to the ocean. I had enjoyed getting to know about other students and professors and the kind of research they carry out.

I was grateful for the experience of what kind of research oceanographers focus on, from learning about physical oceanography to biological oceanography. The cruise was a mixture of people with different ocean interests, and it was a great experience in learning about the

aspects of their research. Such collaborative work is needed to understand more about our ocean and fisheries resources.

As a non-speaking Japanese person, though it was a bit difficult to understand some of the instructions, I was grateful to Kobari sensei and Nakamura sensei's students that took the initiative and are always willing to translate on the things I don't understand. The food on the vessel was delicious, though it was difficult to follow through on the times of the meals, as they were early breakfast, early lunch and early dinner.

At the end of the onboard training, I was able to have gained a fair knowledge of what the oceanographic features are, understood the equipment's used to study the oceanographic features, and gained a great network of people.

The things I have learned, and the knowledge gained from the colleagues on board have made me thought about other research and how I can incorporate that into my future studies or research if given an opportunity to do so.

6. 総括

洋上セミナー参加者数のこれまでの推移を表1に示す。2015年度以降の10年間の年平均受講者数は約2人(最大5人、最低0人)で、最大受講可能人数の8人に達したことはない。受講生の内訳は、鹿児島大学と琉球大学の学生である。受講者の満足度は水産学系に限らず、農学系の学生に関しても総じて高い特徴がある。水産学系の学生の場合、実習内容と自身の研究内容またはキャリア形成の方向性が一致していることが、満足度に繋がっていると考えられる。一方、農学系の学生の場合、日常生活では体験できない海洋観測という特殊体験が満足度に繋がっていると考えられる。私たちが洋上セミナーを実践形式の実習として企画する意図もそこにある。

このセミナーでは最先端の研究に従事する研究者・教員と協働することで、学生は研究者・高度技術者としての人生観に関して大きな影響を受ける。これらの機会は、学生の研究者・高度技術者としてのキャリアデザインを涵養するものであり、非常に貴重な経験となるはずである。本セミナーに関心を持つ学生であれば誰でも参加可能なので、ぜひ参加して頂きたいと考えている。

表1. 洋上セミナー乗船者数の推移(2015年度以降)。

年度	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024
参加者数	4	5	0	2	1	1	2	2	2	2
参加大学	琉大1 鹿大農2 鹿大水1				鹿大農1			琉大1	琉大2	鹿大農1 鹿大水1
		鹿大水5		鹿大水2		鹿大水1	鹿大水2	鹿大水1		
備考						コロナ禍	コロナ禍	コロナ禍		

8. 写真



1) セミナーI(11/10): 洋上セミナーに参加したの藏菌さん、マラマさんと共に、鹿大修士課程の学生1人も自分自身の研究紹介を行った。



2) 洋上セミナーII(11/10): OIST の Leenawarat さんに自身の研究と研究者へのキャリア形成について講演して頂いた。写真は現在所属している OIST の紹介をしているところ。



3) 海洋観測体験: CTD システム(水温、塩分を鉛直方向に連続的に計測しながら、任意の深度で採水することができる観測機器)の準備を、実習生のマラマさんと藏菌さんが担当しているところ。



4) セミナーII の講演者の Leenawarat さん(中央)と連大生の藏菌さん、マラマさん。



5) 共同研究利用で乗船した愛媛大学の学生と伴に採水をしている藏菌さん。



6) 採泥器(写真左下)の前で待機中のマラマさん。



7) 海洋観測グループの集合写真(11月17日 谷山港)。

先進的研究推進事業成果報告会を開催

鹿児島大学連合農学研究科では、先進的研究事業を推進するため、研究科長裁量経費及び学長裁量経費を「連合農学研究科先進的研究推進事業」支援に充てている。令和6年度も連大教員に対して募集を行ったところ5件の応募があり、代議委員会委員による審議の結果、2件の事業を採択した。

採択となった研究代表者、分担者、協力者には約半年間研究に取り組んでもらい、各報告書を提出いただいており、平成29年度より、研究代表者による成果報告の場として報告会を開催している。

第8回目となる本年度はオンライン（Microsoft Teams）にて接続し、下記内容で開催した。

日時：令和7年8月5日（火）14：30～15：20

開催方法：オンライン（Microsoft Teams）

研究課題及び構成メンバー：（ ）は所属大学、勤務先等

・先進的機能を備えた新規多糖ゲルの創出と評価

代表者：宗 伸明（佐賀大学）

・泥炭農地の再湿地化が温室効果ガス(CO₂、CH₄、N₂O)排出量におよぼす影響に関する研究

代表者：酒井 一人（琉球大学）

代表者全員の報告後、北原研究科長より、これらの研究がますます発展し外部資金の獲得にもつながり、連大としてもさらに発展していくことを期待します。と講評があり、締めめの挨拶とした。

過去平成26年度からの報告書については、鹿児島大学大学院連合農学研究科 HP に掲載。

HP 内メニュー 「各種報告書」－「先進的研究推進事業報告書」

（令和7年9月現在の情報です。以降、予告なく HP のメニュー名等が変更となる場合があります。）

学生数・教員組織等

年 度 別 入 学 者 数

令和7年4月1日現在

() 内数字：上段は社会人、下段は留学生で内数

				年 度		昭和 6 3 年度		平成元年度		平成 2 年度		平成 3 年度		平成 4 年度		平成 5 年度		平成 6 年度		平成 7 年度		平成 8 年度		平成 9 年度		平成 1 0 年度	
				入学定員		18		18		18		18		22		22		22		22		22		22		22	
				志願者数		25		18		30		25		40		39		58		55		46		47		62	
入 学 者 数	構成大学※ よ り	計	(社会人)	16	(0)	14	(0)	21	(0)	15	(3)	23	(5)	28	(1)	45	(4)	44	(2)	36	(1)	34	(5)	43	(2)		
			(留学生)		(8)		(9)		(9)		(6)		(9)		(15)		(24)		(25)		(11)		(13)		(25)		
	他大学 よ り	計	(社会人)	9	(0)	4	(0)	9	(0)	10	(0)	17	(1)	10	(0)	11	(1)	11	(1)	9	(0)	13	(1)	17	(2)		
			(留学生)		(5)		(3)		(8)		(8)		(14)		(9)		(10)		(9)		(8)		(10)		(12)		
	計	計	(社会人)	25	(0)	18	(0)	30	(0)	25	(3)	40	(6)	38	(1)	56	(5)	55	(3)	45	(1)	47	(6)	60	(4)		
			(留学生)		(13)		(12)		(17)		(14)		(23)		(24)		(34)		(34)		(19)		(23)		(37)		
構 成 大 学 別 配 内 訳	佐 賀 大 学 (農)	計	(社会人)	7	(0)	6	(0)	10	(0)	5	(1)	7	(1)	6	(0)	10	(0)	4	(0)	13	(0)	9	(1)	8	(0)		
			(留学生)		(4)		(4)		(4)		(1)		(2)		(5)		(7)		(3)		(3)		(5)		(5)		
	宮 崎 大 学 (農)	計	(社会人)	8	(0)	4	(0)	7	(0)	8	(2)	9	(1)	10	(0)	16	(1)	26	(1)	12	(0)	17	(3)	21	(0)		
			(留学生)		(3)		(3)		(4)		(4)		(6)		(5)		(9)		(16)		(7)		(7)		(16)		
	鹿 児 島 大 学 (農)	計	(社会人)	4	(0)	3	(0)	9	(0)	8	(0)	9	(0)	6	(1)	14	(0)	9	(1)	7	(1)	5	(1)	12	(3)		
			(留学生)		(3)		(1)		(5)		(7)		(7)		(4)		(10)		(6)		(2)		(2)		(5)		
	鹿 児 島 大 学 (水)	計	(社会人)	6	(0)	5	(0)	4	(0)	4	(0)	11	(3)	10	(0)	10	(0)	10	(1)	8	(0)	6	(0)	12	(1)		
			(留学生)		(3)		(4)		(4)		(2)		(6)		(7)		(7)		(6)		(3)		(4)		(7)		
	琉 球 大 学 (農)	計	(社会人)									4	(1)	6	(0)	6	(4)	6	(0)	5	(0)	10	(1)	7	(0)		
			(留学生)										(2)		(3)		(1)		(3)		(4)		(5)		(4)		
	計	計	(社会人)	25	(0)	18	(0)	30	(0)	25	(3)	40	(6)	38	(1)	56	(5)	55	(3)	45	(1)	47	(6)	60	(4)		
			(留学生)		(13)		(12)		(17)		(14)		(23)		(24)		(34)		(34)		(19)		(23)		(37)		
国 籍 別 入 学 者 数	国	入 学 者 名 数	日本	12	中国	4	中国	4	中国	3	中国	7	中国	5	中国	6	インドネシア	9	中国	10	中国	8	中国	6	中国	8	
			インドネシア	3	インドネシア	3	インドネシア	3	韓国	2	韓国	4	フィリピン	5	バングラデシュ	6	インドネシア	7	バングラデシュ	4	バングラデシュ	5	インドネシア	7			
			タイ	2	韓国	2	タイ	3	バングラデシュ	2	タイ	3	バングラデシュ	2	タイ	3	バングラデシュ	2	韓国	3	韓国	3	インドネシア	3	バングラデシュ	5	
			バングラデシュ	2	バングラデシュ	1	韓国	2	フィリピン	2	タイ	2	インドネシア	2	韓国	3	インドネシア	2	フィリピン	2	タイ	2	タイ	4			
			韓国	1	フィリピン	1	フィリピン	2	スリランカ	1	インド	1	インドネシア	1	韓国	2	タイ	1	マレーシア	1	ガーナ	2	韓国	2			
			西ドイ	1	マレーシア	1	マレーシア	2	バングラデシュ	1	バングラデシュ	1	バングラデシュ	1	タイ	1	フィリピン	2	パキスタン	1	パプアニューギニア	1	インド	1	エジプト	2	
			ミャンマー	1	ミャンマー	1	ミャンマー	1	エジプト	1	フィリピン	1	ネパール	1	スリランカ	1	フィリピン	1	ミャンマー	1	タイ	1	スリランカ	1	中国	8	
			アルゼンチン	1	アルゼンチン	1	アルゼンチン	1	グアテマラ	1	スベイン	1	スベイン	1	スベイン	1	スベイン	1	スベイン	1	スベイン	1	スベイン	1	スベイン	1	
			スベイン	1	スベイン	1	スベイン	1	スベイン	1	スベイン	1	スベイン	1	スベイン	1	スベイン	1	スベイン	1	スベイン	1	スベイン	1	スベイン	1	
																	</										

年 度 別 入 学 者 数

令和7年4月1日現在

() 内数字：上段は社会人、下段は留学生で内数

			年 度		平成 1 1 年度		平成 1 2 年度		平成 1 3 年度		平成 1 4 年度		平成 1 5 年度		平成 1 6 年度		平成 1 7 年度		平成 1 8 年度		平成 1 9 年度		平成 2 0 年度		平成 2 1 年度	
			入学定員		22		22		22		22		22		22		23		23		23		23		23	
			志願者数		44		55		64		55		67		67		39		50		30		40		40	
入 学 者 数	構成大学※ よ り	計	(社会人)	31	(2)	37	(4)	49	(7)	37	(2)	46	(4)	62	(6)	31	(3)	35	(1)	25	(3)	30	(2)	29	(5)	
			(留学生)	(16)	(23)	(25)	(19)	(22)	(20)	(12)	(19)	(12)	(19)	(13)	(16)	(10)	(16)									
	他大学 よ り	計	(社会人)	12	(1)	18	(3)	14	(2)	13	(5)	18	(4)	5	(1)	7	(2)	14	(5)	3	(0)	10	(2)	11	(0)	
			(留学生)	(10)	(8)	(7)	(4)	(12)	(3)	(7)	(5)	(12)	(3)	(7)	(5)	(6)	(2)	(6)	(2)	(3)	(4)	(22)	(40)	(26)		
構 成 大 学 別 生 数	佐 賀 大 学 (農)	計	(社会人)	13	(2)	11	(1)	11	(0)	7	(0)	10	(1)	17	(1)	10	(0)	13	(2)	7	(1)	10	(0)	12	(1)	
			(留学生)	(9)	(6)	(5)	(5)	(5)	(5)	(5)	(8)	(5)	(5)	(6)	(2)	(2)	(6)	(2)	(2)	(6)	(6)	(8)				
	宮 崎 大 学 (農)	計	(社会人)	7	(1)	12	(1)	19	(3)	10	(2)	21	(4)	15	(2)	5	(1)	8	(2)							
			(留学生)	(1)	(8)	(9)	(3)	(7)	(5)	(1)	(7)	(5)	(1)	(3)	(0)	(1)	(3)	(0)	(2)							
生 数	鹿 児 島 大 学 (農)	計	(社会人)	7	(0)	13	(1)	12	(2)	17	(5)	11	(1)	13	(2)	7	(1)	13	(0)	11	(2)	13	(2)	5	(1)	
			(留学生)	(6)	(8)	(7)	(8)	(7)	(7)	(7)	(4)	(7)	(4)	(4)	(7)	(6)	(6)	(6)	(3)							
	鹿 児 島 大 学 (水)	計	(社会人)	8	(0)	11	(2)	12	(0)	9	(0)	12	(1)	8	(0)	5	(0)	4	(0)	4	(0)	7	(6)	12	(1)	
			(留学生)	(6)	(7)	(7)	(7)	(5)	(9)	(4)	(9)	(4)	(4)	(4)	(4)	(4)	(4)	(4)	(4)	(4)	(4)	(9)				
生 数	琉 球 大 学 (農)	計	(社会人)	8	(0)	8	(2)	9	(4)	7	(0)	10	(1)	14	(2)	10	(3)	10	(2)	6	(0)	10	(2)	11	(2)	
			(留学生)	(4)	(2)	(4)	(4)	(3)	(6)	(2)	(2)	(3)	(5)	(3)	(5)	(3)	(3)	(4)	(4)	(6)						
	連 携 大 学 院	計	(社会人)											1		1		0		0		0		0		
			(留学生)																							
生 数	計	計	(社会人)	43	(3)	55	(7)	63	(9)	50	(7)	64	(8)	67	(7)	38	(5)	49	(6)	28	(3)	40	(4)	40	(5)	
			(留学生)	(26)	(31)	(32)	(23)	(34)	(23)	(23)	(17)	(17)	(25)	(25)	(15)	(15)	(22)	(22)	(26)							
国 籍 別 入 学 者 数	国 入 学 者 名 数	入 学 者 数	日本	17	中国	24	日本	31	中国	27	日本	30	中国	44	日本	21	中国	24	日本	13	中国	18	日本	14		
			インドネシア	8	インドネシア	9	中国	8	中国	7	中国	9	中国	7	中国	6	中国	6	インドネシア	4	インドネシア	4	インドネシア	9		
			パナマ	4	パナマ	7	インドネシア	4	インドネシア	3	インドネシア	3	インドネシア	3	フィリピン	3	インドネシア	2	パナマ	2	中国	3	スリランカ	2		
			韓国	3	パナマ	6	パナマ	3	エジプト	2	韓国	3	インドネシア	2	タイ	2	パナマ	2	フィリピン	2	スリランカ	3	パナマ	2		
			中国	3	韓国	3	ミャンマー	3	パナマ	3	スリランカ	2	スリランカ	3	スリランカ	2	ミャンマー	2	スリランカ	1	タイ	2	ミャンマー	2		
			フィリピン	2	インド	1	スリランカ	2	マレーシア	2	タイ	2	カンボジア	1	韓国	1	インドネシア	1	タイ	1	カンボジア	2	中国	2		
			インド	1	スリランカ	1	タイ	2	ミャンマー	2	パナマ	2	インド	1	パキスタン	1	タイ	1	韓国	1	インド	1	ネパール	2		
			ネパール	1	フィリピン	1	パナマ	2	カンボジア	1	ミャンマー	2	タイ	1	マレーシア	1	韓国	1	中国	1	パキスタン	1	パナマ	1		
			マレーシア	1	マレーシア	1	インド	1	スリランカ	1	アルゼンチン	2	パキスタン	1	エジプト	1	フィリピン	1	パナマ	1	ブータン	1	フィリピン	1		
			スリランカ	1	コロンビア	1	カンボジア	1	パナマ	1	カンボジア	1	パナマ	1	パナマ	1	マレーシア	1	ミャンマー	1	フィリピン	1	タイ	1		
			タイ	1	エジプト	1	フィリピン	1	スリランカ	1	スリランカ	1	スリランカ	1	スリランカ	1	スリランカ	1	コロンビア	1	カンボジア	1	キューバ	1		
			カンボジア	1	アメリカ	1	モリタニア	1	パナマ	1	トルコ	1	トルコ	1	トルコ	1	オマーン	1	オマーン	1	ケニア	1	台湾	1		
			ブータン	1	ブータン	1	ブータン	1	ブータン	1	ブータン	1	ブータン	1	ブータン	1	ブータン	1	ブータン	1	ブータン	1	ブータン	1		
			ブルUNDI	1	ブルUNDI	1	ブルUNDI	1	ブルUNDI	1	ブルUNDI	1	ブルUNDI	1	ブルUNDI	1	ブルUNDI	1	ブルUNDI	1	ブルUNDI	1	ブルUNDI	1		
			ヨルダン	1	ヨルダン	1	ヨルダン	1	ヨルダン	1	ヨルダン	1	ヨルダン	1	ヨルダン	1	ヨルダン	1	ヨルダン	1	ヨルダン	1	ヨルダン	1		
			イラン	1	イラン	1	イラン	1	イラン	1	イラン	1	イラン	1	イラン	1	イラン	1	イラン	1	イラン	1	イラン	1		

※佐賀大学農学部、琉球大学農学部、鹿児島大学農学部、鹿児島大学水産学部、宮崎大学農学部出身者数。
宮崎大学農学部は昭和63年～平成18年度まで、琉球大学農学部は平成4年度より構成大学である。

年度別入学者数

令和7年4月1日現在

() 内数字：上段は社会人、下段は留学生で内数

				年 度		平成22年度		平成23年度		平成24年度		平成25年度		平成26年度		平成27年度		平成28年度		平成29年度		平成30年度		令和元年度		令和2年度			
				入学定員		23		23		23		23		23		23		23		23		23		23		23		23	
				志願者数		45		38		36		29		28		36		44		37		36		28		33			
入 学 者 数	構成大学※ より	計	(社会人)	27	(3)	26	(5)	22	(3)	16	(4)	20	(4)	20	(5)	18	(4)	15	(1)	20	(3)	13	(1)	18	(2)				
			(留学生)	(10)	(10)	(6)	(5)	(6)	(3)	(6)	(3)	(7)	(5)	(5)	(5)	(5)	(5)	(5)	(5)	(5)	(5)	(5)	(5)	(5)	(5)				
	他大学 より	計	(社会人)	16	(2)	12	(2)	13	(4)	13	(3)	6	(2)	15	(2)	24	(2)	22	(7)	13	(2)	11	(3)	15	(1)				
			(留学生)	(12)	(9)	(8)	(10)	(3)	(3)	(11)	(17)	(13)	(9)	(7)	(13)	(9)	(7)	(13)	(9)	(7)	(13)	(9)	(7)	(13)	(13)				
	計	計	(社会人)	43	(5)	38	(7)	35	(7)	29	(7)	26	(6)	35	(7)	42	(6)	37	(8)	33	(5)	24	(4)	33	(3)				
			(留学生)	(22)	(19)	(14)	(15)	(9)	(9)	(14)	(15)	(9)	(9)	(14)	(24)	(18)	(18)	(14)	(12)	(12)	(18)	(14)	(12)	(18)	(18)				
構 成 大 学 別 配 属 内 訳	佐賀大学（農）	計	(社会人)	14	(1)	12	(0)	5	(0)	3	(2)	7	(1)	6	(0)	5	(1)	8	(2)	6	(2)	6	(2)	11	(1)				
			(留学生)	(8)	(7)	(2)	(1)	(2)	(1)	(4)	(3)	(3)	(5)	(5)	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)	(8)	(8)					
	鹿児島大学（農）	計	(社会人)	10	(2)	8	(4)	8	(3)	7	(3)	10	(3)	5	(2)	6	(2)	14	(4)	9	(2)	10	(1)	6	(1)				
			(留学生)	(3)	(3)	(0)	(2)	(2)	(4)	(3)	(2)	(5)	(6)	(6)	(5)	(6)	(6)	(6)	(6)	(7)	(3)	(3)	(3)	(3)					
	鹿児島大学（水）	計	(社会人)	11	(1)	11	(0)	6	(1)	9	(1)	4	(1)	7	(1)	19	(1)	5	(0)	8	(1)	6	(1)	5	(0)				
			(留学生)	(7)	(7)	(3)	(7)	(3)	(2)	(2)	(14)	(3)	(3)	(3)	(3)	(3)	(3)	(3)	(3)	(3)	(3)	(3)	(3)	(3)					
	琉球大学（農）	計	(社会人)	8	(1)	7	(3)	16	(3)	10	(1)	5	(1)	17	(4)	12	(2)	10	(2)	10	(2)	2	(0)	11	(1)				
			(留学生)	(4)	(2)	(9)	(5)	(2)	(5)	(5)	(5)	(5)	(5)	(5)	(5)	(5)	(5)	(5)	(5)	(5)	(5)	(0)	(0)	(4)	(4)				
	連携大学院	計	(社会人)																										
			(留学生)																										
	計	計	(社会人)	43	(5)	38	(7)	35	(7)	29	(7)	26	(6)	35	(7)	42	(6)	37	(8)	33	(5)	24	(4)	33	(3)				
			(留学生)	(22)	(19)	(14)	(15)	(9)	(14)	(9)	(15)	(9)	(9)	(14)	(24)	(18)	(18)	(14)	(12)	(12)	(18)	(14)	(12)	(18)	(18)				
国 籍 別 入 学 者	国	入 学 者 名 数	日本	21	日本	19	日本	21	日本	14	日本	17	日本	21	日本	18	日本	19	日本	19	日本	19	日本	12	日本	15			
			ベトナム	7	インドネシア	4	ベトナム	3	タイ	3	中国	3	ベトナム	6	ベトナム	4	ベトナム	5	中国	5	中国	5	中国	5	スリランカ	4			
			インドネシア	4	ベトナム	3	スリランカ	2	エジプト	2	ベトナム	2	中国	3	スリランカ	3	ベトナム	5	インドネシア	2	ベトナム	2	中国	2	中国	3			
			中国	4	スリランカ	2	マレーシア	2	スリランカ	2	エリトリア	1	インドネシア	1	中国	3	インドネシア	3	ベトナム	2	インドネシア	1	ベトナム	1	ベトナム	3			
			フィリピン	2	ベトナム	2	タイ	1	ベトナム	2	シンガポール	1	エジプト	1	ベトナム	3	スリランカ	1	ベトナム	2	ミャンマー	1	インドネシア	1	インドネシア	2			
			ベトナム	2	フィリピン	2	フィジー	1	ベトナム	2	タイ	1	韓国	1	ベトナム	2	アメリカ	1	スリランカ	1	スリランカ	1	ミャンマー	1	ミャンマー	1			
			セネガル※	1	ミャンマー	2	フィリピン	1	タンザニア	1	ミャンマー	1	スリランカ	1	エジプト	1	タイ	1	マラウイ	1	タイ	1	タイ	1	タイ	1			
			タイ	1	カンガ	1	ボリビア	1	フィリピン	1	マラウイ	1	タンザニア	1	スリランカ	1	中国	1	マレーシア	1	ラオス	1	韓国	1	韓国	1			
			ミャンマー	1	トンガ	1	韓国	1	中国	1	中国	1	中国	1	ベトナム	1	ベトナム	1	ベトナム	1	ベトナム	1	ベトナム	1	ベトナム	1			

※佐賀大学農学部、琉球大学農学部、鹿児島大学農学部、鹿児島大学水産学部、宮崎大学農学部出身者数。
宮崎大学農学部は昭和63年～平成18年度まで、琉球大学農学部は平成4年度より構成大学である。

年 度 別 入 学 者 数

令和7年4月1日現在

() 内数字：上段は社会人、下段は留学生で内数

			年 度		令和 3 年度		令和 4 年度		令和 5 年度		令和 6 年度		令和 7 年度		
			入学定員		23		23		23		23		30		
			志願者数		27		30		36		44		40		
入 学 者 数	構成大学※ より	計	(社会人)	12	(2)	15	(3)	16	(1)	24	(1)	23	(5)		
			(留学生)		(5)		(5)		(6)		(4)		(6)		
	他大学 より	計	(社会人)	13	(3)	9	(2)	15	(3)	12	(2)	10	(2)		
			(留学生)		(7)		(7)		(8)		(9)		(9)		
	計	計	(社会人)	25	(5)	24	(5)	31	(4)	36	(3)	33	(7)		
			(留学生)		(12)		(12)		(14)		(13)		(15)		
構 成 大 学 別 配 属 内 訳	佐 賀 大 学 (農)	計	(社会人)	5	(1)	9	(2)	9		13	(2)	7	(1)		
			(留学生)		(4)		(5)		(5)		(5)		(4)		
	鹿 児 島 大 学 (農)	計	(社会人)	10	(3)	7	(2)	6		12	(0)	12	(3)		
			(留学生)		(3)		(5)		(4)		(6)		(5)		
	鹿 児 島 大 学 (水)	計	(社会人)	5	(0)	4	(1)	10	(1)	7	(1)	9	(2)		
			(留学生)		(3)		(1)		(4)		(1)		(4)		
	琉 球 大 学 (農)	計	(社会人)	5	(1)	4	(0)	6	(3)	4	(0)	5	(1)		
			(留学生)		(2)		(1)		(1)		(1)		(2)		
	連 携 大 学 院	計	(社会人)												
			(留学生)												
計	計	(社会人)	25	(5)	24	(5)	31	(4)	36	(3)	33	(7)			
		(留学生)		(12)		(12)		(14)		(13)		(15)			
国 籍 別 入 学 者	国 名	入 学 者 数	日本	13	日本	12	日本	17	日本	23	日本	18			
			スリランカ	3	韓国	2	フィリピン	2	スリランカ	4	スリランカ	2			
			中国	2	タイ	2	タイ	2	ベトナム	2	中国	7			
			パ'ンタ'ラデ'シュ	2	ベ'トナム	2	中国	1	中国	1	カ'メル'ン	1			
			カ'ンタ'	1	中国	1	韓国	1	インド'ネシア	2	パ'キスタン	1			
			ベ'ナン	1	パ'ンタ'ラデ'シュ	1	パ'ンタ'ラデ'シュ	1	パ'ンタ'ラデ'シュ	1	カ'ンタ'	1			
			ソロモン	1	スリランカ	1	シエラレオネ	1	カ'メル'ン	1	フィリピン	2			
			フィジ'ー	1	ミャンマー	1	エチオピ'ア	1	ジンバ'ブ'エ	1	モザ'ンビ'ーク	1			
			ラオス	1	セントルシア	1	南スー'ダ'ン	1	フィジ'ー	1					
					シエラレオネ	1	ケニア	1							
							ベ'トナム	1							
							マラウイ	1							
							スリランカ	1							

※佐賀大学農学部、琉球大学農学部、鹿児島大学農学部、鹿児島大学水産学部、宮崎大学農学部出身者数。
宮崎大学農学部は昭和63年～平成18年度まで、琉球大学農学部は平成4年度より構成大学である。

学位記授与状況

I. 課程博士

R7.4.1現在

専攻名	年度	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
生物生産科学		4 (3)	5 (4)	4 (4)	3 (2)	5 (5)	9 (7)	14 (8)	12 (9)	14 (9)	14 (8)	9 (7)
生物資源利用科学		3 (3)	1 (1)	2 (2)	4 (1)	4 (1)	8 (3)	10 (7)	13 (10)	7 (2)	7 (1)	9 (3)
生物環境保全科学		1 (1)	2 (2)	6 (3)	6 (5)	6 (4)	2 (2)	15 (11)	15 (10)	6 (5)	12 (9)	11 (6)
水産資源科学		4 (2)	6 (4)	7 (5)	7 (6)	9 (7)	10 (8)	7 (7)	7 (5)	5 (3)	10 (4)	9 (2)
計		12 (9)	14 (11)	19 (14)	20 (14)	24 (17)	29 (20)	46 (33)	47 (34)	32 (19)	43 (22)	38 (18)

専攻名	年度	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
生物生産科学		10 (7)	16 (10)	19 (12)	9 (8)	20 (14)	12 (8)	13 (7)	16 (9)	9 (5)	6 (3)
生物資源利用科学		8 (6)	14 (5)	7 (5)	19 (9)	9 (3)	10 (3)	9 (3)	10 (2)	9 (2)	7 (2)
生物環境保全科学		8 (7)	6 (3)	5 (2)	7 (3)	6 (3)	9 (3)	6 (5)	10 (6)	9 (5)	8 (2)
水産資源科学		10 (6)	11 (5)	10 (7)	9 (4)	10 (6)	9 (7)	7 (3)	8 (7)	6 (4)	5 (4)
計		36 (26)	47 (23)	41 (26)	44 (24)	45 (26)	40 (21)	35 (18)	44 (24)	33 (16)	26 (11)

平成21年度4月入学者より、4専攻から3専攻に改組

()内数は、外国人留学生で内数。

専攻名	年度	23	24	25	26	27	28	29	30	31・令和元	令和2	合 計
生物生産科学		8 (4)	2	3 (2)	2							238 (155)
生物資源利用科学		5 (3)	3 (1)		1							179 (78)
生物環境保全科学		2 (1)										158 (98)
水産資源科学		1 (1)	1 (1)									168 (108)
生物生産科学		6 (4)	8 (7)	10 (7)	9 (6)	7 (4)	8 (4)	6 (3)	14 (10)	7 (5)	10 (5)	85 (55)
応用生命科学		2 (2)	7 (6)	5 (3)	7 (4)	8 (5)	12 (4)	3 (1)	5 (2)	11 (5)	6 (2)	66 (34)
農水圏資源環境科学		8 (4)	13 (9)	11 (4)	9 (5)	9 (3)	13 (7)	6 (2)	14 (6)	14 (7)	5 (2)	102 (49)
計		32 (19)	34 (24)	29 (16)	28 (15)	24 (12)	33 (15)	15 (6)	33 (18)	32 (17)	21 (9)	996 (577)

専攻名	年度	令和3	令和4	令和5	令和6							合 計
生物生産科学												238 (155)
生物資源利用科学												179 (78)
生物環境保全科学												158 (98)
水産資源科学												168 (108)
生物生産科学		5 (3)	7 (5)	12 (8)	8 (7)							117 (78)
応用生命科学		10 (6)	12 (4)	4 (3)	7 (2)							99 (49)
農水圏資源環境科学		8 (6)	11 (4)	7 (4)	5 (3)							133 (66)
計		23 (15)	30 (13)	23 (15)	20 (12)							1092 (632)

【国別内訳】

国名	日本	インド	インドネシア	カンボジア	スリランカ	タイ	韓国	中国	ネパール	パキスタン	バングラデシュ	フィリピン	ブータン	ベトナム	マレーシア	ミャンマー
人数	460	8	84	4	31	38	30	137	5	4	96	35	1	34	14	21
国名	台湾	アメリカ	アルゼンチン	グアテマラ	コスタリカ	コロンビア	パナマ	バハマ	ブラジル	ボリビア	メキシコ	ギリシャ	スペイン	ドイツ	イエメン	イラン
人数	2	1	1	2	1	2	1	1	3	2	1	1	2	1	1	2
国名	オマーン	トルコ	ヨルダン	ウガンダ	エジプト	カーナ	ケニア	コートジボワール	ザンビア	ジンバブエ	セネガル	タンザニア	チュニジア	ナイジェリア	ベナン	マダガスカル
人数	1	2	2	2	12	5	5	1	1	1	3	7	2	3	3	1
国名	マラウイ	モーリタニア	リビア	ソロモン	トンガ	バヌアツ	パプアニューギニア	フィジー	ラオス	カメルーン						合計
人数	3	1	1	2	1	1	1	3	1	1						1092

Ⅱ. 論文博士

年度	人数	国名	年度	人数	国名	年度	人数	国名
3	2	日本	15	19	日本・ベトナム・中国	27	1	インドネシア
4	2	日本	16	5	日本	28	3	日本・ブータン
5	4	日本・マレーシア・韓国・中国	17	9	日本	29	0	
6	1	中国	18	17	日本・エジプト・スペイン	30	1	日本
7	7	日本・米国・インドネシア・タイ	19	9	日本・アルジェリア・インドネシア・フィリピン	令和元	0	
8	2	日本・インドネシア	20	10	日本・アメリカ	令和2	2	日本
9	2	日本	21	12	日本・フィリピン・インドネシア	令和3	2	日本
10	9	日本・フィリピン	22	0		令和4	0	日本
11	3	日本	23	0		令和5	1	日本
12	5	日本	24	3	日本	令和6	2	バングラデシュ
13	8	日本	25	1		令和7		
14	3	日本・タイ・フィリピン	26	0	日本	合計	145	

令和 7 年度 代議委員会 委員名簿

A：任期 令和7年4月1日～令和9年3月31日(新任)

B：任期 令和6年4月1日～令和8年3月31日(継続)

領 域	所 属 大 学	氏 名	備 考
連合農学研究科長	鹿児島大学（農）	きたはら かねふみ 北 原 兼 文	
副研究科長	鹿児島大学（連大）	てらだ りゅうた 寺 田 竜 太	
農水圏生産科学	佐賀大学（農）	B こうただ のぶひろ 古藤田 信 博	
	鹿児島大学（農）	A しみず かつよし 志 水 勝 好	
	鹿児島大学（水）	A よしかわ たけし 吉 川 毅	
	琉球大学（農）	A うれしの けんじ 嬉 野 健 次	
生物資源生命科学	佐賀大学（農）	A ながお こうじ 永 尾 晃 治	
	鹿児島大学（農）	A おおつか あきら 大 塚 彰	
	鹿児島大学（水）	B こまつ まさはる 小 松 正 治	
	琉球大学（農）	B こにし てるこ 小 西 照 子	
地域環境共生科学	佐賀大学（農）	A つじ かずなり 辻 一 成	
	鹿児島大学（農）	B さかまき よしたか 坂 巻 祥 孝	
	琉球大学（農）	B さかい かずひと 酒 井 一 人	

令和7年度 鹿児島大学大学院 連合農学研究科 行事予定表

R7.4.11.現在

月	曜 日							行 事	備 考
	日	月	火	水	木	金	土		
2025年 4			1	2	3	4	5	11日(金) 連合農学研究科入学式(11:00～) 連合農学研究科オリエンテーション 代議委員会:連大担当	履修登録(Web) 「Newsletter 第45号」原稿依頼
	6	7	8	9	10	11	12		
	13	14	15	16	17	18	19		
	20	21	22	23	24	25	26		
	27	28	29	30					
5					1	2	3	9日(金) 代議委員会:佐賀大学担当	研究科教員候補者推薦依頼(※切:6月27日) 出願資格認定申請受付 → 審査 → 報告 → 通知 (令和7年度10月入学コース 国費外国人留学生優先配置等プログラム特別選抜) (令和8年度4月入学コース 一般選抜、外国人留学生・社会人特別選抜(第1期))
	4	5	6	7	8	9	10		
	11	12	13	14	15	16	17		
	18	19	20	21	22	23	24		
	25	26	27	28	29	30	31		
6	1	2	3	4	5	6	7	2日(月) 令和7年度第1回全国連合農学研究科協議会 当番:東京農工大学 場所:一橋講堂 ～3日(火) 13日(金) 代議委員会【オンライン】 18日(水) 令和7年度前期連合一般ゼミナール(日本語) 当番:東京農工大学 ～20日(金) 講師担当: 佐賀大学・鹿児島大学(農)	前期学位論文(論博含む)提出(※切:6月2日) 願書受付(6月23日～6月26日) (令和7年度10月入学コース国費外国人留学生優先配置等プログラム特別選抜) (令和8年度4月入学コース 一般選抜、外国人留学生・社会人特別選抜(第1期))
	8	9	10	11	12	13	14		
	15	16	17	18	19	20	21		
	22	23	24	25	26	27	28		
	29	30							
7			1	2	3	4	5	11日(金) 代議委員会【オンライン】 上旬 キャリア開発特論 中旬 入試説明会【オンライン】 下旬～8月上旬 事務会議及び事務連絡会【オンライン(予定)】 7月28日～8月1日 令和7年度10月入学コース 国費外国人留学生優先配置等プログラム特別選抜入学試験【オンライン】 7月30日～8月1日 令和8年度4月入学コース 一般選抜、外国人留学生・社会人特別選抜(第1期)入学試験【オンライン】	学位論文「公開審査会」……1週間前までに公示 授業料免除(後期)申請
	6	7	8	9	10	11	12		
	13	14	15	16	17	18	19		
	20	21	22	23	24	25	26		
	27	28	29	30	31				
8						1	2	中旬～下旬 教員資格審査委員会【オンライン】	学位論文審査・最終試験等結果報告(※切:8月20日)
	3	4	5	6	7	8	9		
	10	11	12	13	14	15	16		
	17	18	19	20	21	22	23		
	24	25	26	27	28	29	30		
	31								
9		1	2	3	4	5	6	11日(木) 入試委員会【オンライン】 12日(金) 代議委員会:連大担当【オンライン】学位論文審査結果、教員資格審査判定 研究科教授会【オンライン】入試合否判定、学位論文合否判定、教員資格審査判定 18日(木) 秋季合格者発表 24日(水) 入学手続き(入学料免除申請等)～26(金)まで 26日(金) 学位記授与式	学位授与申請 → 授与の可否決定(学長) 秋季合格通知書・入学手続き案内の発送
	7	8	9	10	11	12	13		
	14	15	16	17	18	19	20		
	21	22	23	24	25	26	27		
	28	29	30						
10				1	2	3	4	3日(金) 秋季入学式 オリエンテーション 連合農学研究科運営会議 代議委員会:連大担当 研究科長候補者選考第1次意向投票管理委員会 23日(木) ～24日(金) 令和7年度第2回全国連合農学研究科協議会 当番:岩手大学	学生募集要項発表 (上旬) 後期学位論文(論博)提出(※切:10月15日) 「Newsletter 第45号」発行予定
	5	6	7	8	9	10	11		
	12	13	14	15	16	17	18		
	19	20	21	22	23	24	25		
	26	27	28	29	30	31			
11							1	10月28日(火) 洋上セミナー 担当: 鹿児島大学(水) ～11月6日(木) 7日(金) 代議委員会【オンライン】 10日(月) 農学特別講義 当番:琉球大学 ～12日(水) 19日(水) 令和7年度後期連合一般ゼミナール(英語) 当番:鳥取大学 ～21日(金) 講師担当: 琉球大学・鹿児島大学(水)	出願資格認定申請受付 → 審査 → 報告 → 通知 (令和8年度4月入学コース 一般選抜、外国人留学生・社会人特別選抜(第2期))
	2	3	4	5	6	7	8		
	9	10	11	12	13	14	15		
	16	17	18	19	20	21	22		
	23	24	25	26	27	28	29		
	30								
12		1	2	3	4	5	6	未定 研究科長候補者選考第1次意向投票 19日(金) 代議委員会【オンライン】 学位論文の受理及び審査委員会委員の選出、次期代議委員の調整 教員資格再審査委員会(代議委員会後)	研究科教員(特例)候補者推薦依頼(※切:12月5日) 後期学位論文(課程博)提出(※切:12月5日) 願書受付(12月8日 ～12月11日) (令和8年度4月入学コース 一般選抜、外国人留学生・社会人特別選抜(第2期))
	7	8	9	10	11	12	13		
	14	15	16	17	18	19	20		
	21	22	23	24	25	26	27		
	28	29	30	31					
2026年 1					1	2	3	9日(金) 代議委員会【オンライン】 研究科長候補者選考第2次意向投票管理委員会 中旬 入試説明会【オンライン】 28日(水) 令和8年度4月入学コース一般選抜、外国人留学生・社会人特別選抜(第2期)入学試験 ～30日(金)	学位論文「公開審査会」……1週間前までに公示 学位論文審査・最終試験等結果報告(※切:1月30日)
	4	5	6	7	8	9	10		
	11	12	13	14	15	16	17		
	18	19	20	21	22	23	24		
	25	26	27	28	29	30	31		
2	1	2	3	4	5	6	7	6日(金) 代議委員会【オンライン】 学位論文審査結果、次期代議委員の決定 未定 研究科長候補者選考第2次意向投票 12日(木) 入試委員会【オンライン】 13日(金) 研究科教授会 入試合否判定、学位論文の合否判定 18日(水) 合格者発表 25日(水) 入学手続き(入学料免除申請等)～27日まで	学位授与申請 → 授与の可否決定(学長) 合格通知書・入学手続き案内の発送
	8	9	10	11	12	13	14		
	15	16	17	18	19	20	21		
	22	23	24	25	26	27	28		
3	1	2	3	4	5	6	7	13日(金) 代議委員会:連大担当 学位記授与式、構成法人連絡調整委員会	募集要項発表(中旬～下旬) (令和8年度10月入学コース国費外国人留学生優先配置等プログラム特別選抜)
	8	9	10	11	12	13	14		
	15	16	17	18	19	20	21		
	22	23	24	25	26	27	28		
	29	30	31						

代議委員会委員・連大事務室一覧表

所 属	氏 名
連 合 農 学 研 究 科 長	きたはら かねふみ 北原 兼文
連 合 農 学 研 究 科 副 研 究 科 長	てらだ りゅうた 寺田 竜太
佐 賀 大 学 農 学 部	ことうだ のぶひろ 古藤田 信博
	つじ かずなり 辻 一成
	ながお こうじ 永尾 晃治
鹿 児 島 大 学 農 学 部	おおつか あきら 大塚 彰
	さかまき よしたか 坂巻 祥孝
	しみず かつよし 志水 勝好
鹿 児 島 大 学 水 産 学 部	こまつ まさはる 小松 正治
	よしかわ たけし 吉川 毅
琉 球 大 学 農 学 部	うれしの けんじ 嬉野 健次
	こにし てるこ 小西 照子
	さかい かずひと 酒井 一人
連 大 事 務 室 長	やました けんいちろう 山下 憲一郎
連 大 事 務 室 長 代 理	あた はるみ 阿多 晴美
連 大 事 務 室 連 大 事 務 係 長	うわとこ あい 上床 亜衣
連 大 事 務 室 再 雇 用 職 員	よしむら まなぶ 吉村 学
連 大 事 務 室 連 大 事 務 係 事 務 補 佐 員	いしかわ まゆみ 石川 まゆみ
	うえかま はつき 上釜 葉月
	いじゅういん あきこ 伊集院 昭子
連 大 事 務 室 連 大 事 務 係 派 遣 職 員	たなか みなこ 田中 美奈子

編集後記

鹿児島大学大学院連合農学研究科ニュースレター第 45 号をここに刊行することが出来たことをご報告させていただきます。今回の表紙には、練習船で時々寄港する指宿市山川港近くの鰹節工場の薪の写真を用いました。また、裏表紙には、沖永良部島のサトウキビ畑、佐賀大学農学部、沖永良部島での潜水調査の様子、鹿児島大学で開催された連大一般セミナー、出水市に渡来したツル、長島町のヒトエグサ養殖、琉球大学農学部、名護市の嘉陽ビーチ、佐賀市松原神社の大楠、一般セミナーのポスター発表、学位記授与式のさつつん、噴煙をあげる桜島の写真を使用しました。第 45 号の刊行に際して、執筆および資料等を提供して下さった先生、学生の皆様にこの場をお借りしましてお礼の言葉を申し上げます。また、連大事務室の事務職員の方々にも多大なるご協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。

令和 7 年 9 月

Newsletter 編集委員長

寺田 竜太

鹿児島大学大学院連合農学研究科

Doctoral Course Newsletter

第 45 号 令和 7 年 9 月発行

編集 鹿児島大学大学院連合農学研究科

鹿児島市郡元 1 丁目 21 番 24 号

電話（ダイヤル）市外局番 099

研究科長 285-8780

副研究科長 285-8781

連大事務室長代理 285-8791

連大事務係（総務系）285-8792

連大事務係（学務系）285-8795

FAX 285-8799

URL <https://homeugs.agri.kagoshima-u.ac.jp/>

E-Mail renjimu@kuas.kagoshima-u.ac.jp



鹿児島大学大学院連合農学研究科
 The United Graduate School of Agricultural Sciences
 Kagoshima University
 〒890-0065 鹿児島市郡元 1 丁目 21 番 24 号
 Phone 099-285-8792 FAX 099-285-8799
<http://homeugs.agri.kagoshima-u.ac.jp/>